타4R13

30
488

大町桂月
伊藤銀月 修
伊藤天籟 刪 編

文士寶典

東京日高有倫堂發兌

30-488

文士寶典

家弟天籟美文資料を編して予に求むる所あり頗る初學者を益するの事業と思ひ趣意を聞きて信じたるを以てすなはち之に應じ出來得る限り助言と助手とを與へたり。故に文士寶典は家弟天籟の勢力其大部分を占むと雖も諸友及び予の勞力亦之を渾成するの補足となりたるを事實となす。是れ讀者に向つて言明する所たり

予は信ず。本書に集聚したるの資料は讀者をして直ちに取つて自家の文中に嵌入せしむべきものにあらずして。之を咀嚼し。之を消化し。以て

明治
39 10 15
内務

讀者の文想の滋養分となすべきものなるを故に。讀者の本書を以て。取て用ふべき財寶の庫となすべからず。讀者の師友たるべき數十百の古人今人をして本書を通して。讀者が作文の際の相談相手たらしむるにとゞめんことを要す。措字造句は畢竟末技のみ。予は文の爲めに文を作る腐れ文士を厭ふ。文を作る者は。創造力と消化力とを併有せざるべからず。本書は蓋し讀者の消化力の方面に屬するものにして。之を有益ならしむると無用ならしむるとは。一に其力の度如何に在るのみ。之を以て序となす

伊藤銀月

此書の性質

一現代文壇の粹を篩ひ。諸家の英を漉して。諸君の机上に美しき畫帳を献せんとせるは。編者の目的也

二此書に於て。以上の目的が成就せられざるは勿論也。紙數の程度あれば也。異日續篇を編纂するの期會あらば。其目的は達せらるべし。然れども現代の文壇を飾る十數株の名花中。少くとも其數基は。移植せるものなる事を記臆せよ

三文士たらんとする人。所謂作家希望者に此書を勸む。單に文學を愛する人。所謂讀者にも之を勸む

四名は實の賓に非る大家先生に向つても机上に一本を献せん。我れ群書を山積して。其中に神韻あるもの。熱情あるもの。天衣無縫なるもの香氣齒頰に湧くものを求め。幾度か失望せり。半熟。生硬。平板。陳

腐。是當代文壇の尊貴なる特色也

五哲學倫理などは。成るべく反抗的精神ある者を取りたるが如く。全體に亘る方針亦然り

六集むるは作るよりも骨折也。本書一部成ると共に。其魂を拔かれたる拔殼の書籍約數十卷。諸君之を購はんには。大枚何十圓とかを要する也

編者申す

序

兄弟とも揃うて文を能くする伊藤銀月、天籟二子の如きは、今の世、其比稀也。天籟この頃、文士寶典を著はして、余の序を乞ふ。思ふにこれ少年の頃、自から文を學ぶに資したるもの乎。既にこの苦心あり、今、文に堪能なるも、亦怪むに足らざる也。元來、文は思想を傳ふるもの也。されど、思想を傳ふるには、言語によらざるべからず。言語の運用に熟達するは、作文練習時代に最も必要なる事也。之を怠らば、如何に面白き思想を有するとも、到底文章家たる能はざるべし。此書は、この點に於て、初學を稗益すること、極めて大也。され

ど、魚を得て、筌を忘ると云へり。思想は本也、言語は末也。世に文を公にするに至りても、なほ思想の美をよそに、言語の美のみを求め、彫蟲琢刻をこれ事とするものあらば、實に文章の惡魔也。否、文士寶典の罪人也。

われ少年の頃、文章の練習を忽にして、多讀せざりし報は、今もなほ文字に乏し。思想もきはめて淺薄也。今かゝる陳腐なることを言ひて、序に充つるも、みな自から招くところと、慙愧に堪へず。われに鑑みて、力めよ、年少文に志すの士

明治三十九年の夏

大町桂月

文士寶典目次

第一章　叙景叙情

戀の蕾の發育―朧夜の夜の神の手―歌盗人の水鷄―窶れて意地惡い老樹―春雨味淋の如し―堪らない妙な心持―櫻を養ふ夜の氣―生温い運命―吹矢を追ふた鳥―樂みある牢屋に入るの感―月なき所に立たれぬ身―自分の影法師を踏んで歸る―空寢入して居る顏を蠟燭で照さるゝ思―新らしき苦惱を生命とす―時の祝福―畸形の好意―樂しい破戒―凄美なる夜の花吹雪―煙の如き細雨―黃金を瓦となすも亦奢りに非ず―蓬のみ徒らに高からんとは―無常の繪卷の切れ端―凄美の極致―眼前に浮ぶ遊蕩大盡―天正文祿の氣―魂を搔き消す風物―雪に心あるが如し―唯秋の濤が秋の山を撼かして居る―船の外は皆月―朧の船朧の人―實に人を泣かしめんとする光景―夜と朝と交代する一時―霧を破つて閃く一塊の焰―微かに届いた鷄の聲―天地は我秘密と共に唯濛々―勇氣は全く落ちた―絶望の極―玉楠の老樹―水氣薄白き里芋畑―碧玉盤の上を走る水晶の缺片―畫けども成り難き雅致―切子燈籠―大聲に一つ天を罵つて―荒砥にかけ

た刄の色—長命寺の曉の太皷—藤鼠の朝霞—江戸的趣味—鮫の箭竹が一時に裂けるやう—舊日本的旅心—暖かき希望の湧泉—鶯に呼起さるゝ朝機嫌—形容し難き優しき詩情—東京的風景の眞髓—天然と人事の調和—殺風景又の名春—春を惜む多涙の人を迎ふ—花を出しの飲み食ひ主義—莽蒼跌宕の歴史的風物—全然殊別なる畫面—新派油繪の好畫材—崇高莊嚴—凄凉幽遠—泣くことを解せざる鐵漢—武藏野的趣味—毛筆の疎畫—霧の侵掠—吸へば水のやうな空氣—空一面の薄曇り—海の底の如く蒼く凉しい—百条の黄金の箭—海の色を淺黄に染め更へて—山の汁を充した手桶—處女グレースの神

第二章　山嶽

富士山—登山は嚴格なる日本人の事業—山の美の標本—火山を載する臺英雄の墳墓—アルプス山—再生の恩と喜悅—山の資本—山は景色の始にして又終り—山中の花—鳥獸に關する特殊の興味—色彩の豐富—勤勉忍耐なる住民—有ゆる配合總ての對照—秋山は暗黑也—惡天候の美—雨は色彩に生氣を加ふ—一日の中異りたる美—雲の結果—薔薇色の光線—見上る山見下す山—興味に富める山の根原—山の隆起及降下—崩壞の結果なる谿谷—自然は大技術家—氷河の破壞—氷河は美の全く豫期せざりし要素也—アルプスの眺望—自然界の壯觀活動せる火山—燃ゆる河—火山の原因は地球表面の事由也—高きもの深きものゝ人を魅する力—ピラミット形の峻峰—餘りに紅葉の深さ—紅葉一段雲一段—色の配合の變幻—爽快の極悲哀を催す—山の食物—自然の清福を領する山家—吐出された一丸の月—苦臭い汗—山に住んで立派な仕事—千萬の魔軍—秀氣人を倒さんとす—夜の如き谿谷—火を焚いて堂に宿す—絶大の洞門—濃雲と驟雨—氣宇恢宏—嚴しく訊問されるやうな氣がする—掃くは芥でなくて花—忍び入る落花一二片—見事に降る花—生命ある徑の小石—高い臺の上に飾られた置物—怪禽御祈禱鳥—鎧を着た偉丈夫肩の丸い女性—山の活氣人の活氣—頭を湧き出つる雲の眞中に突入れよ—甘美なる恐怖心—寂しい荒れ果た美—怪奇な雲の曠原—一種嚴格な敬虔の情

第三章　海

高山の巔澤谷の底共に海の趣味—俗物に秘せられたる大寶庫—船を家となし一世を漂泊せん—無人の孤島濡れたる巖—一大紗幮の裡—七彩の飛沫百里觀測の行—崩れかゝりたる人波—海が創造の新趣味新思想—感情

の胸學問の淵叢—一段沈痛なる氣味—彼等の海は芝居の波幕のみ—暴風と暗黑との結合したる力—懷かしさ羨ましさ—海と靈山—黑き巖に寄せ來る波—偉絶凄絶の光景—測り知るべからざるの不安—一丸の素月—風愈豪也—紫深き天と水—水色澄徹—女性の怪物—早曉水禽を驚起せしむ—小兒の如く驚呼す—波濤と暗黑の衝突—幽咽として哀切を極む—設彩に吝なる山海—健氣にも泳游する我等を來襲する魚の群—餘りに痛快にして氣味の惡き程也—躍躰を打つの海泡—波と人との戰ひ—哀れな話—芋虫種屬—淡墨の筆痕—鰯を貪食し去る鯨の壯觀—漁撈は詩的營業也—意氣を豪にするの遊樂的職業—魚の都市の衰微—荒削りと彫刻—默坐と氣焰—意味深き羔—餘りに解明に失したる光景—若き希望の光りが一杯—一年一度の靜和—海國民の長短所—壯なる哉海賊の歌—波濤は夫れ墓歌か—夏將海岸に移動するは人間の本能也—陸地に有せざる美麗なる野—狂氣する程に美麗なる海—巡洋航海—海は時以上の者也—休息なき海—偉大なる立派なる表象—詩人に極力描寫せられたる海の暴風雨—礁湖の人を恍惚たらしむる美觀—南方の空の美—東方多島海の風景

第四章　河と水

山の壓抑—深潭と猛鷲の巣—絶えて夏なきの處—水面の大渦紋—兩峰の對照一幅の活畫—間斷なく奔る雪崩—瀧を下るの大筏—激流が生み出した倔强の舟師—鰥を突く河童の兒—七月尙寒し—美人の乳の上に囁く早瀨の水—舟中生活—縫目なき水と空—慍りを帶んだ厭世家の面のやうな景色—林間の泉水—饒舌なる谿間沈默なる深淵—萬水雪山より落下す—不思議なる水の力—吾人の想像を迷はす水邊の動物—一滴の中に藏せられたる秘密—湖水は流動體の寶石也—川源より海に至るの興味—河は最後の勝利者也—溶解せる氷河—川は山よりも古し—水の速力—地を堀る恐るべき力

第五章　湖沼

叙情詩の材料—限りなき幽怨—一種の美感—沼の性格の代表花—湖國的夕暮—韵絶味絶の情趣—物を愛護する女德—高潔なる天女—地勢魂を惱ます—平水の美—全地球女性の不平の代表—陰險なる魔女—冷たい胃囊

第六章　瀑布

瀑布に對して起る畏怖心—神秘なる白百合の花—瀧壺に臨む—無數の護

誤の玉—一種の快き温か味—一の愛すべく精神ある耳語—心を碎く女瀧石を碎く男瀧—銀の鎧の姿

第七章　氣象天候風雨色

梅雨と狂的發作—非常の事變と氣候風—伊勢の神風—火災と氣象の關係—青天と煩悶—曇天と人心—壓迫的密雲並に陰雲—螺線狀の渦卷—嶽上の雷雨—青空と黑雲との戰—魔物の笑ふ樣な風の聲—凄壯無比なる音樂—電光—掃いて洗つたやうな—强風電光月光—色と眼の調和—色彩の表情—色彩の疊積

第八章　音樂　自然の音響

幽咽せる潮來節—銀の線のやうな細く頭ふ聲—天地の異變に刺激せられた技能—絃聲に靈氣を添へる雷と電が消えた—八分の自信に二分の掛念—撥は絃を絶つ聲は喉を裂く—颶風萬籟皆鳴る—火の音響—自然の言語—夜濤の聲

第九章　自然觀

自然は活物也—自然は言語を有する朋友也—夜の背—夜の容貌—星辰これ天の詩—寂寞たる天地—嚴肅無限—墻壁なき大殿堂—暴風及闇黑—暴風と夜の樂しさ—雷霆の一語—露けき朝—自然と我との同化—忘却さるゝ一切の時間—高山も我感情也—新鮮なる翼—不朽の得分—自然を愛する純潔なる情—力に充てる思想—太洋の權威

第十章　都府研究

風なる專制君主—雨の保守的感化—悲みの都怒りの都—保險なきの安全—冷笑的哲學—寸鐵殺人的一警語—眞珠を發掘すべき金針—一擲り—厚顏無恥なる小術數家—王國に特殊の裝飾を與ふる美術家—老蒼なる景物に配合する鼠色—風の經營慘憺—貪食の動物—勝者と敗者—喉黑と領黑—三種の東京美人—可驚消化作用—無意義なる生存者—風流は表皮一枚也—紅蓮の花—名の都利の都—秀吉的と家康的—江戸ッ子氣質—詩味を帶べる沈痛峭烈—怜悧は小乘の器也—聞かぬ氣の負けじ魂—上層下層の間を走る電火—社會の裏を行く伏樋—變形せる反抗—植物的なる營養の吸收

第十一章　哲學—宗教—道德

最高の生活—眞の人間—人類の天職—人類の目的—人類の不幸—天才と國家—歴史論—非歴史觀—過去の忘却—歴史の用途—歴史の無益—貧しき自由—吾人と何等の關係なき史的眞實—甚だ惡しき謄寫—歴史と民象自由の本能—殘忍は人の本能也—偉大なる罪人の精神—科學と個人主義との衝突—精神の絶對的自由—威力の意志—非獻身的行爲—國家は猛獸の一群より成立せり—自ら命じ能ふ人—道德は惡しき良心に依て作らる—奴隷の精神的復讐—奴隷道德の勝利—道德慣造者—君主道德—粗野卑賊なる一貧僧—絶大の君主人—奴隷の舞臺—非基督敎的救世主—宗敎家の不人情—惡人の開祖カイン—我を咀ひたる者は父母也—偶然の稟生—死の呑食—破壞者兼建物者—生れざる幸福—殺人の增殖—日の下に行はるゝ虐遇—惡より善を生む—惡も亦神也—神の虛言—咀はるべき神—剛愎なる靈體—汝全能者よ—世界を造りたるは耻辱也—耻ちべきノアの一族—天國よりは地獄に行かん—道理は誤謬に充てり—惡魔は大智也—脆弱なるかな道德—怒れるエホバ—怒れるサタン—暴君の哲理—敗れたる惡魔の意思—反亂的自由の精神—我が運命の星—一個の硬頸一箇の紅唇—衆弱—一切の正邪は意見の一致のみ—道德は强者の理想のみ、

第十二章　苦樂厭世樂天

他人以外に立つて生活す—後悔的不平—至高の熱心の壞敗—獅子となつて獨歩せん—道德は人間の上衣也—心の寒冷なる氷山—常に新たなる心痛—偶然の運命—境遇の玩弄物—偶然は誤謬的の神也—大惡神アリマスチス—磽确不毛の社會—血を流せる塘鵞—精神の露の源泉—昏醉と至樂—快樂之れ絶對的純粹の善—苦樂の一瞬—死は生得の大權也—死來る時は我既に在らず—葡萄を化する魔法—彼等の不平—快樂の紀念碑—快樂的黄金時代—人を疑ふは間者の職也—我一生は愛の一生也—凋むより摘まれん—生命主義と快樂主義—耻にあらざりき—汗を流して快樂を追求す—快樂の短き時間—葡萄の血液—黄金を好むは下等なる鑛物を愛する也大海の飲料—酒杯の露—王冠は何ぞや—我宴席の光榮—凋み行く生命—黄金墓の中夜を照さず—死は嘆息を顧みず—我今現に生あり—死近づき快樂益々貴し—愛生れて幾才ぞ—死神の家は暗し—心に恐れを懷く長壽者を羨まず—自然は殘忍刻薄也—裏にも表にも悲哀憂患を錄す—一大屠殺場—神性の分有—柔和なる者地を嗣く—代贖的犧牲—苦痛の感覺—動物の苦感—苦痛の鍛錬

第十三章　戀愛

戀愛の解剖——女性の哲學的解釋
男子の戀愛觀——女子の戀愛觀
戀愛の技術——戀愛の魔力
盲目的の愛——不貞の解釋
戀愛の飽醉——失戀と苦痛
純潔なる愛情——道德と兩立せざる戀
愛情の傾向——愛情と結婚
大詩人の戀愛觀

第十四章　男と女

顏の美を支配する力—氣の利いた新造ッ兒—意氣張り見得張り—樂天主義の男女—女の古手—薄墨で書いた繪のやうな一生—涙は女性の良藥—女と生理心理の微妙な作用—世話女房—意地惡い程悲慘な女—双方より見たる男女—姉妹—三都女性—可愛い男女の兒—男達に非ずんば泥棒のやうな粋な男—ヒステリー性婦人の代表者—詩化されたる東京的眞髓の女—俗を離れた女離れぬ女—氣の鈍い女—妾と後家—美人と醜婦—再婚の婦人—男の浮氣女の我儘—顏面に閃めく人を魅する力—婦人令孃と花柳界の女性—薄紅いな神

第十五章　動物

プラチナの鎖り—蟹の勇士蟹の美人—鼬の厭世家—雉は羽族の剛也—禽のダイナマイト—鱒は鱗族の健也—沈靜深穩なる大都會—蛇と墓の王國鱒躍つて蛇を搏つ—魚の健、味の美—大陸人の魚食を重んぜざる所以—高くとも惜くゝなきは白魚也—水黑く船を動かして寶を返せと迫る—汝冬の精神を喫せよ—佃魚の變遷—初鰹魚と布子—意氣地なく腐り易き鰹—鰹は軍に勝魚也—一皿の紅ゐに王侯の豪奢を誇る—凄美に過ぎて氣味の惡い螢—五彩の水煙りに包まれつゝ—非常な運動の螢の働きの終り—海中に巨大なる動物—鯨に負ふ所多し—海水を變色する動物の群—海中動物の避難所—大洋の小模形—海中の動植物研究の興味—水中に於ける美麗なる魚の運動—軟らかき燐光の玉—光りを發する魚類—深き太洋の淵に於ける魚の奇異なる生活狀態—眼の下にランプを有する魚類

第十六章　史論人物評論

英雄は太陽の如し—美はしき花環—英雄の引立役—時代は尤も秀でたる一個を輝かす—地上を離れて舞踏す—八面皆長所也—機變と空想の一致—英雄は火の美を愛す—慘酷の詩化—動作の美—秀拔なる氣品—辨舌の雄—生れ乍らの粹人通人—人物利用法—隙間なき小刀細工—暗中の跳躍—史を讀むの快事—別誂への人間—高價なる遊蕩—數字なき大算術—非常に努力せる我儘勝手—豪華と寒素—一椀の薄茶—作られたるの英雄—火に燒けざる一頑石—可愍老雄—傳記に不斷の點火裝飾—堅實周匠の英雄—低聲の助言者—實行に疎なる批評家—詩的惡戲者—天授と自作と半ばする英雄—姫君の豆腐買ひ—彗星に似たる生滅—興味ある鬪爭力の對比—韵致に富める傳記—恐るべき詭計に富める英雄—夜雨一過桃花開—奇兵の成功—奇兵の評隲—戰爭ダレ氣味の時代—天禀の姦雄—締りなく呑氣なる戰爭—篩ふも漉すも半點の美無し—醜的半面の發露時代—肥料を施さんとて經過せられたる時間—韵絶味絶の詩境—安座の重量—活ける殺人器と黄金の太刀の詩的對照—火牛王—絶好の活畫—榮華の二重—物理的權力の進歩—沈重なる不導體—獨政發明者たるの名譽者—恐るべき感化—巧みなる獨政の盜奪—數理的に施されたる慘劇—美術的姦策—日本ステーツマンの祖—政治と道德との詩的醇化—政治の神髓—動的武力靜的武力—武人的政治家の典型—悟道的勇斷—襤褸に包まれたる珠玉—權力得喪の心理—武斷主義の殉道者—虹霓の如き榮華—淫酒主義の生活—武人專權の發芽—謎教的武士道—儒教道德の權化—儒教播種の大收穫—外虛しきが如き大賢—儒佛兩教の反應—文物が生み出したる妖僧—法王的皇帝—詩歌的適度の興奮—慾情の斷滅と其反抗—一掬の涙—天使と惡魔—火の如き不平—根本的失戀—美の理想躰の女性化—興奮と精血の消耗—天才の不幸

文士寶典

大町桂月
伊藤銀月 刪脩
伊藤天籟 編纂

叙景叙情

沈の言の發育……朧夜の夜の神の手……歌盗人の水鶏……寂れて意地悪い老樹……春雨味淋の如し……埒らない妙な心持櫻を養ふ夜の氣……生温ひ運命……吹矢を負ふた鳥……樂しみある牢屋に入るの思……月なき所に立たれぬ身……自分で自分の影法師を踏んで歸る……空寢入して居る顏を蠟燭で照さるゝ思……新らしき苦惱を生命とす……時の祝福……畸形の好意……樂しい破戒……凄美なる夜の花吹雪……煙の如き細雨……黄金を瓦となすも亦奢りに非ず……蓬のみ徒らに高からんとは……無常の繪卷の切れ

端……凄美の極致……眼前に浮ぶ遊蕩大盡……天正文祿の氣……魂を掻き消さうとする風物……雪に心あるが如し……唯秋の濤が秋の山を撼かして居る……舟の外は皆月……朧の舟朧の人……人を泣かしめんとする光景……夜と朝と交代する一時……霧を破つて閃く一塊の焔……微かに届いた鷄の聲……天地は我秘密と共に唯漠々……勇氣は全く落ちた……絶望の極……玉楠の老樹……水氣薄白き里芋畑……碧玉盤の上を走る水晶の缺片……畫けども成り難き雅致……切子燈籠……大聲に一つ天を罵つて……荒砥にかけた刄の色……長命寺の曉の太鼓……藤鼠の朝霞……江戸的趣味……藪の箭竹が一時に裂けるやう……舊日本的旅心……暖かき希望の湧泉……鶯に呼起さるゝ朝機嫌……形容し難き優しさ詩情……東京的風景の眞髓……天然と人事の調和……殺風景又の名春と云ふ……春を措む多涙の人を迎ふ……花を出しの飲み食ひ主義……蒼苔跌宕の歴史的風物……全然殊別なる畫面……新派油繪の好畫材……崇高莊嚴……凄凉幽遠……泣くことを解せざる鐵漠……武藏野的趣味……毛筆の疎畫……霧の來るや成吉思汗の侵掠に似たり吸へば水のやうな空氣……空一面の薄曇り……海の底の如く蒼く凉しい……百條の黄金の箭……海の色を淺黄に染め變へ乙……山の汁を充した手桶……處女グレースの神

戀の蕾の發育

▲水の中では魚の子が育ち其岸には櫻の蕾が膨らむ朧夜、暖かく柔かき空氣は絹の衾のやうな心地好い肌障り風もないのに何所からともなく美妙な匂ひが搖いで來る星は皆笑める人の目のやうに霧んで沾ふて居る萬種の花の蜜が釀さるゝ如く此夜普天の下に於て戀の蕾を發育せしめらるゝ少年少女凡そ幾百人あるであらう

朧夜の夜の神の手

▲夕靄はまだ薄白く上根岸の深巷に名殘りを留めて居る徐ろに鶯横町を出づれば遠い繁華な町の物音は自分に呼く人の聲の如く微かに響いて來る、浮き立たせるやうに又浮き立つた氣を押し鎭めるやうに朧夜の夜の神の手は絶へず自手に觸れるのである此夜に限つて新内の門附けの婆さんを極めて床しと思つた

欣迚人の水鷄

▲五月雨の頃行燈の灯を掻き立てつゝ古人の集を力草に覺束なくも夜を明かして以來風流は睡いものと閑人に相場を立られた歌盗人の水鷄は、腔氣にも山谷のほとり玉姫稲荷の森蔭の庵の戸を敲いてあつたさうな、あの邊一體標茅ケ原と呼ばれて橋場今戸の淺茅生に裾を引き墨田を下る暮雨の片帆を楹側から見送

り今から五六十年立てば自由廢業と云ふ石炭臭い風が吹くぞと辛ひに人驚がせの豫言者巫女も出なかつた極樂淨土の吉原其高樓の水の如き燈光を紫深き夕霧の外に眺めて錦の裏の淡黄地に墨繪の葭蘆を繪いた江村水郷。蝕ひの古錦繪に當時の面影を留めて居る

▲近頃建直した白木造の檜の香のまだ失せ切らぬを眞黑な錦をちぎつて投げ出すやうな近所の瓦斯會社の濃き煤烟に燻べられて好い加減に時代が着いて居る瀛船の火夫のやうに煤けて窶れた姿をして小供の手から紙鳶を引つたくる意地惡い老樹が三本五本づゝ所在なささうに立つて居る

窶れて意地惡い老樹

▲氣のせいか空氣の中に何となく名所らしい錬れた色があるやうだ麗らかな春の日、紺屋の物干場に張り渡してある赤或は紫の金巾の間から見えて新芽を吹く草木の生氣に籠もる古き下屋敷或は春雨味淋の如く蛇目傘の檐端に珠を綴つて落ちる時蕎麥屋の角を曲つてヒョックリ由ある人の子の落ぶれし者らしき美人の卵に遇ひたる何處かに名所の面影が殘つて居るやうだ

春雨味淋の如し

▲もう向ふ岸は白く見えなかつた暖かく濕つぽい湯氣のやうな風は顔を舐めるやうに吹いて來て空は平生より奥深いやうに思はれお星樣は遠く〳〵薄つすりと見え草か木の葉の好い薫りが水垢の臭ひにまじつて來るんでせう堪らなつ妙な心持になつて來て誰か目に見えない大きな人が居て、死ぬと私を面白い所へ連れて行かうとして居るやうにも思はれた

堪らない妙な心持

▲門の柳は老婆の見すぼらしい後姿を掃き消して其跡に十九日ばかりの古提灯見たいな月を掛けた櫻を養ふ夜の氣は更くるに從つて益々深く月を得て愈々朧である日和足駄の音次第に薄れて夢よりも遠き絃聲纔かに耳に到つた時何故か自分の目には、うるんで大きく二つ三つになつて朧月が見えた

櫻を養ふ夜の氣

▲結婚の甘美なる味は一口も嘗めさせられずに其酸苦なる味をば舌も腸も縮むばかりに嘗めさせられた不幸なる實驗者であるそれ以上の運命が自分を見舞ふべき筈はない自分自身として愁し生温い運命に迎へられること屑しとせぬのだ

生温い運命

▲幾たびか秋の鴉の如く高く翔り又幾たびか吹矢に當つた雀の如く落ちて來た

吹矢を負た鳥

樂しみある牢屋に入るの思

▲又もや古城に梟の啼く春の朧夜が循環して來た五たび師を出して五たび敗れ歸つた自分は出途を送り歸郷を迎ふる友の數を一回毎に失ひ終には滑稽として送迎さるゝに及んだ一回は一回より彼女をして人に耻ぢ父母に耻ぢ舅姑に耻ぢ彼女自身に耻づるの色を深からしむるを見て自分は樂しみある牢屋に入るの感を禁じ得なかつた

月なき所に立たれぬ身

▲人なき野邊に出で尾花野菊の中に並び立つた人は居ないが人より清い月が我々を見守つて居る今の我々は月なき所に立たれぬ身である

▲優ない賴だが我々には時の祝福を待つより外の道がない、互に忘れるか左もなくば社會が我々の自由に對面するを非難せぬ時來るかである、どうか其方へ月の方へ向ひて其方を見ないやうにしてお呉れ私は自分の影法師を踏んで歸るのだから

自分で自分の影法師を踏んで歸る

空寢入して居る顔を蠟燭で照らされる思

▲扨は確かに月より外に知る人がなかつたか併し併し何故に自分は空寢入して居る顔を蠟燭で照らされるやうな感じがしたらう

新らしき苦惱を生命とす

▲彼女の名は前世紀の人の名の如く遠く薄く自分の耳を掠むるに過ぎなかつたが一人の子を後に殘して二度目の產の苦みで世を去つたと聞くに及び鐵槌で頭を打たれたやう眼から火が迸り彼女を見るの始めから其終りに至る迄の歷史は走馬燈の如く眼前に回旋した、さうして其走馬燈の消えた後の淋しさ情けなき嗚呼自分は此淋しさ情なさの趣味を充分に味ふべく實に新らしき苦惱を生命とする今の身を悔ゐる者である

時の祝福

▲時の祝福五年の星霜は青年の外觀及び內容を一變せしむるの勢力を示した自分の歷史は頁を改めて新らしき苦惱を生命とするに及んだ

畸形の好意

▲自分は未だ曾て惡意を以て人に遇された經驗がない一時は惡意と見えたるも跡から筋道を探つて見れば必らず好意の畸形なるもの若くは反動作用の變形好意に過ぎない

樂しい破戒

▲外へ行つて數盃の酒を飲むは自分の異例である、破戒である、自分はこんな樂しい破戒を味はつた事がない

凄美なる夜の花吹雪

煙の如き細雨

▲『夜嵐や大閤様の櫻狩』此絶代の大天才が、荒鷲の曠野を翔るが如き雄烈なる苦悶に驅られつゝ、物狂はしき豪興を起し來り、限りなき懷ひを凄美なる夜の花吹雪に遣るの情景を描いて、三百歳の下猶は其遊びに從ふが如き感を起さしめずんば已まず、是れ秀吉の人物を解し趣味に通じ、而して後秀吉に同情すること限り無き者にして、多代女の秀吉を知ること北の政所及び淀君以上なり

▲年少にして氣を負ひ好んで天下を放浪せり、其短袴高履にして舊都に入るや、必ず先つ阿彌陀ヶ峯に豐公の墳塋を訪はんことを要し、蒲團着て寢たる姿の東山を望んで、鐵杖を突き鳴らし、鴨の流れを渡り、松蔭の古びし鐘に寄りて、嫗が汲む澁茶に興じ、路を問ふて數々誤まり、舊都の山水より色彩を搾り來つて染め成したるが如き陶器の店に道草を食ひ、憧がれし繪と其儘なる清水の舞臺を紫翠の中に仰ぎ、八阪の塔下には煙の如き細雨に帽簷を重くし、遂に荒廢せせる阿彌陀ヶ峯の下に至る、指擦ふれば十年以前の秋也

▲磴道既に土に埋もれて、無數の落葉峻坂を下り、颯として我が裾を打つ、凡ての葉に凡て響あり、或ものは簌々として哂ふが如く、或ものは蕭々として泣くに似たり、人跡稀にして向蘆頭を低れ、拂へども〳〵其繁きに堪へざる也、嗚呼、東山一帶、訪ふべき物あれば必ず履むべき路あるに、此山何ぞ獨り荒れたることの甚だしきやと、思へば德川の奴儕が憎くなり、悲憤の涙墮ちて芦の葉を走る、追憶す豐公功業の大なるを、黄金瓦となすも亦奢りに非ずと叫びて、感慨無量、遂に大に泣く

黄金瓦となすも亦奢りに非ず

蓬のみ徒らに高からんとは

▲既にして頂に至れば、こはそも何事ぞ、石の玉垣名のみにして、中には何の表もなく、平なる石の土より低くなりてあたりの蓬のみ徒らに高からんとは、英雄狗鼠同じく枯骨とは云ひ乍ら、餘りの事に涙も出でずなり、胸は板を張りたるが如く、股はしびれて自ら支ふること能はず、鐵杖を地に突き刺して之に縋りぬ

無常の繪卷の切れ端

▲折しもあれ、萬壑一時に鳴りて、秋の氣横さまに連山を動かし、松の翠、楓の紅、滿眼錦繡の波を漲らしたる中にも、葛の葉、楢の葉などの裏向を見せ、

波の中に波を織り込みたる、美しと見れば唯美しけれど、感慨の目には、豊公の豪華を偲ばしむる無常の繪卷の切れ端とのみ見られて、山を動かし壑を鳴らせし風の餘りの、鬢を吹き懐に入りて、冷たき思ひの骨を慄せしむるに堪へざりき

凄美の極致

▲空想は取り留めもなく起りて、身は謠曲中の人となりたるが如く、彷彿として秀吉の幽魂の眼前に浮ぶを視るの心地す、眸を放てば、北山より鹿ケ谷のほとりに掛て、雲低く〳〵雨深く、さながら極彩色の畫幅を展べて、一刷毛の淡墨に其半を光澤消しゝたるが如し、須臾にして上加茂を呑み、下加茂を掩ひ、黒谷に迫り、若王子に連り、黯慘凄涼の底蔭物としてダイナマイトの將に破裂せんとするが如き氣を包み、萬馬嘶かず、軍容肅として、古帝都を壓し來る、而して東寺の高塔を中心として、下京及洛外の平野は、白光光刀の如き秋の日に照されて、何かは知らず、縱横、十文字、卍、巴、ぶつちがひに、數百千の大蛇が鱗甲を輝かして蜿蜒るが如く、凄美の極致を呈す、高臺寺を下瞰しては北

眼前に浮ぶ

遊蕩大盡

天正文祿の氣

の政所を思ひ、醍醐の花見の舊跡は、彼方かと指し、遠く伏見の桃山を青紫の淡靄の外に望む

▲此時予が眼前に現はるゝの秀吉は、暗啞叱咤馬上の英雄に非ずして、美酒を右にし、佳人を左にし、天下の豪傑を酒の肴に供して、談笑の間に之を翻弄するの遊蕩大盡なり、茶味漫透、其骨綠りにして香ばしく、清淡の味、高遠の趣を人體に寓して、其魂となせるが如き利休居士に、醉醒めの茶を捧げしめ、千古の奇人、天地を笑殺するの大滑稽家、大諷刺家曾呂利新左衛門を、腰巾着となして、花晨月夕、酒興を助くるの幇間たらしむ、淀君、松の丸殿を始めとして、一代の美人、花の陣をなし、名古屋山三、出雲阿國の如き、人を泣かしむるの妙伎は、座前に極樂界を現ず、實に馬上の英雄としての秀吉に好敵手、好伴侶多かりしが如く、遊蕩大盡としての秀吉も亦、千歳稀に見るの非凡人に圍まれしなり

▲恍として覺ゆ、眼中の天地古色を帶び、平安の舊都は一種崇高なるものとな

りぬるを、細雨既に天の四隅に寒りて、半ば斜陽の光りを透過し、暗灰色の部分々々に燕脂の色を孕み、而して全体に金粉を散ず、天正、文祿の氣味、勃々として其底に動き、此天地恰も豐太閤の豪華なる生活を容るゝに適するを思ふ

▲天の一角から油のやうな雲が流れ出したと見る間に、蚤くも葉櫻の梢に返つて冷々と人の頭を冷ますのである

魂を搖き消さうとする風物

▲蛙の音の喧すしい田圃路を行く、空は雨を落しさうで猶呑んで居る、綠の野は黯澹として夕暮の樣な色彩になり、人の魂を搔き消さうとする風物である

雪に心あるが如し

▲正午よりも晩に近い野は、今日を歌ひ收めの鷄の聲に淋しさを添へられて居る

▲別莊らしい生離に、今を盛りと咲き亂れた卯の花、詩人は之に對して時鳥を思ひ、耽讀まぬ者と雖も、此魂を惱ます床しき白さに、夏の初めの趣味を覺えさせられる花、さながら雪に心あるが如し

▲夕方淵子子、可愛らしい辰子さんを抱いて、唯一人、亡き父の紀念なる櫻の空洞の不動尊を訪ふた、懷かしい小川は、何故我を棄てゝ去るかと咀く樣である、底の砂の轉げて流れるのも、今日に限つて何かの意味を示すものゝ樣に思はれる、澄み切つた秋の水に、辰子さんを抱いた儘の我が姿が、あり〳〵と映る、漣が其影を搖がして、少しづゝ下へ流して行く樣に思はれ、我を忘れて海の際迄歩みを運んだ……何たる寂寞の光景であらう、人なく舟なく唯秋の濤が秋の山を撼かして、巖老ひ海荒るゝ黯澹たる黃昏に、花の如き一枝の人が、玉の如き一顆の人形を抱いて立て居るのである

唯秋の濤が秋の山を撼す

▲鼎の沸くが如き混亂の間から身を脫して、秋の〇氣を面を吹かれつゝ水神の森へ驅け込んだ小百合は、川に向つて立つ石の華表に凭れて、血の沸く胸を暫し冷ました、目の下に一艘小さい屋根舟が横たはつて、舟の外は皆月である、石の柱の冷つく心地は、得も云はれずスカズカしい、露は雨の樣に濃くて、双の袂が忽ちに重くなつた、此月と水と露とのみの情涼な天地を獨で占むる小舟は、如何なる俗を離れた人を載せて居るであらう、酒袋の樣な惠比須大壺、錆びた

舟の外は皆月

剃刀の様な師匠、金欲しさうに鳴る三味線太鼓、猫狐が化けて出たかと思はれる口附して、人間の五音を外れた妖しい聲の歌を唄ふ女共、それ等の世界から跣足で脱け出て、今此月下の扁舟に對すれば、是迄覺えぬ一種の世を厭ふ心が起る、否是迄も全く覺えないでは無かつたが、是迄よりは一層固まつた着實な心なのである、明かに云へば、此小船に乘つて何處か人間界を離れた處へ行つて見たい様な氣がするのである、其船を岸へ附けて下さいなと呼び掛けたのは、半ば無意識に出た、追手を恐れる爲ばかりではない

箭を負へる孔雀

▲光る帶、長き袂、白き面、妙なる薫の少女が、箭を負へる孔雀の落るが如くに轉げ込んだのであるから、船中の人は度を矢ふばかりに驚いた

臘の舟臘の人

▲蘆の葉に篩はれて一入青味を増した夜半過の月が繪き出す臘の船臘の人、髯嚴めしき偉丈夫にヒタと寄り添ふて、花を綴つた様に美しい着物を纏ふた妙齡の佳人が、一心に水の底を隙し見て居る形は、月込め蘆込め水込め船込め大きく四角に切り取つて、其儘無究に傳へたい様な好畫面である

人を泣かしめ人とする光景

▲こんな機會でゝもなけれア、君等の身で、一番鷄が鳴く前の隅田川は見られやせん、どうだ、何たる淋しく且つ意味の深い景色ではないか……實に人をして泣かしめんとする光景である。無限の感慨は今天地に充ち滿ちて居る、活動の東京の大動脈たる隅田川は、荒砥に掛けた刄の様に曇つて而も殺氣を含んだ色を呈し、凝つて流れない様に見える。今其上に動く物は唯此美人の船ばかりである、肌やゝ薄くなつた土手の葉櫻は、花の時代の夢さへ見ぬと覺しく、向島を蟲の音に任せて居る、待乳の森の神の灯は、唐辛の様に赤く固くなつて、淺草の五重の塔は鼠色の空より少しく濃く見える、眺へたものなら是に鐘の音が添はなければならぬ、けれども今は二時と三時の間である

夜と朝と交代する一時

▲下手に吾妻橋が見え初めて、其橋が目に見える度よりは、折柄橋の上を通る下駄の響の耳に聞える度が、數倍高いのである、恐らくは其橋の上の人には、隅田川全體の景色が目に入る度よりは、此川の上の一つの船の一挺の櫓の音が、遙に高く耳を打つであらう、夜の寂默の正中よりは、將に朝の活動に入らんと

霧を破つて閃く一塊の焔

微かに屆いた鶏の聲

する前の一時が靜の極である

▲其下駄の響が本所の岸に消えた時、遠く後に當つて艪の聲が起つた、此方は緩い爲に向の急なのが分る、振り返れば、霧は早や薄白く川上を鎖して、鯉が頭を現はした邊は、別の世界の樣に隔だつて見える、霧を破つて閃く一塊の焔、青物市場へ行く野菜船だと、髯男は丹を説明した

▲焔の船は見る〳〵近づいて、吾妻橋の手前半町足らずの處で、とう〳〵それに追ひ越された、石油を焚く篝火の臭氣一陣、此方の屋根の下を通り拔けて、美しからぬ赤色の光にあたりの景色は見世物看板の樣に照らし出だされた、それが復元の色に返つて、三圍の見當から微に鶏の聲が屆いた、能く聞けば家鴨が目を覺ました樣な音も聞こえる、とう〳〵淺草の鐘がゴーンと打附けた、霧が一皮づゝ張つて行く樣に濃くなつて、それにボカされた篝火が、又二つばかり川上に現はれた、今迄荒砥に掛けた刄の色の隅田川は、處々に少し赤錆を帶びて來た

天地は我秘密と共に唯蒙々

勇氣は全く落ちた

▲何處で今何をして居るかを想像すれば、痒い樣な樗つたい樣な、胸の上を輕い羽で撫でられる樣な心持になる

▲起き上がる迄は馬鹿に頭が重くて、氣分の惡い事限りなかつたが、起きて見たら心臟が音樂のやうに皷動して、五體に望みの波が打つのである、山や木に顏を見られるのが極まりが惡い樣で、暫く窓を明ける事を躊躇したが、思ひ切つて遂にがらりとやつた、扨ても粹な山の神、此朝の御嶽山を濃き雲霧に包んで居るとは、天地は我の秘密と共に、薄白く漠々たるばかりである

▲此人無き朝の人無き徑に、一間より向ふの見えぬ濃き霧である、石を拾つて木を叩いたが應へる者が無い、瀧子はまだ來て居ぬ……霧より外に知る者の無い處で、今に瀧子が來たらどうしやう、手を握つても構ふまい、抱き附いても誰が咎めやう、思ひ切つて此機會に乘じやう……微かに足音がする、河本の胸は轟き始めた、薄りと霧の中に影法師の樣な人が見え出す、河本の勇氣は半ば落ちた、それが愈よ形の分る一間の範圍内に來る、先づ髮と肩の輪廓が鮮やか

になつて、次には例のパッチリした兩の目が、霧を破つて朝日の如く額を射る、河本は昨日よりも更に極りが惡い、眩ゆげに下を見た瞿は上らぬ、手を握るどころか、抱き附くどころか、其方から手を出されても尻込みしさうな身の縮め方である

絶望の極　悲慘の極

▲兄弟三人――其父及び他の三人の兄弟は皆な既に或は戰死し、或は信仰の爲に焚殺せられ、殘るは今ま此三人の兄弟のみ、暗黑にして、微かに日光さし入る獄中に投せられ、隔離せる柱に縛せらる、故に互に其死を見合ふのみにして又如何ともする事なし、初めに中間の弟死す、殘れる兄弟、獄人に嘆願するに、せめてもの事に日光照す所に埋めん事を以てせり、然るに獄吏の無情なる冷談に嘲笑し去て顧みず、屍體を目前に横たへ、苦無き土を薄く蔽ひたるのみにして、彼を繫きたる鐵鎖は其屍體の上に懸れり、次に父の最も寵愛したる、又母の面ざしある美くしき最も幼き弟は、日に益々凋み行き、花の如きの容貌も今は次第に色を失ひ、虹霓の色の消え去るが如し、往て之を勞はらんと欲すれども如何せん、身は鐵鎖を以て縛せられたるの悲さよ、唯弟の絶へ入る呻吟の聲を聞き、悲哀なる有樣を眼前に傍觀するのみにして、詮術更に有る事なく、助を呼ぶとも人影だに來る無し、嗚呼これ絶望の極に非ずや……可愛き幼弟は眼前に死につゝあるなり、如何にせん、力の限りに跳躍突進すれば、鐵鎖は漸く斷絶せり、されども萬事終れり、弟の手を取れば其冷たき事土の如し、兄は知覺を失ひ思念も茲に止みたり

重き心情

▲我性自然を愛す、然りと雖も憂鬱の情去ること能はず、牧羊者の笛聲も、雪崩の墜落する凄じき響も、水流も水河も、森林も雲漠も、一として瞬時たりとも我心情の重きを輕くすることを得ず、又自ら天地の壯嚴なること、强勢なること、及び我が上下左右の光榮美觀に恍惚して自我を脫出忘却することも能はざるなり

▲此土藏は裏手の方戌亥の隅に建つて、鐵甲を環した武夫の如く湊屋を鎭護して居るので、中には鎧、兜、槍、刀、古器、古書畫など、湊屋の系圖に附屬し

た種々の什物を貯へてある

玉楠の老樹

▲相州極樂寺の里、月影が谷から流れ出る小川を前に控へて、國道と隔だつた茅葺の古い建物、對岸に低い松原を臺にして、箱根、天城の紫、夕榮の芙蓉峰の朱鷺色を重ね、左りには稻村ヶ崎の一角を控へて、江の嶋は濃く大嶋は淡く、海を湖の如くに見るのである、玉楠の老樹傘をなして屋根の半ばを蔽ひ、隣と境する荊棘の藪に沿ふて砂地を淺く鋤いた菜畠がある

水氣薄白き里芋畑

▲夏の朝早く起きて唯一人別莊の門を出る、空は二つ三つの星を殘して、海よりも却つて好く水の色に見える、谷の底を行く小川は目に見えぬが、水氣薄白く里芋畑の裾に浮んで、對岸を包み、此方の岸は自分が出た爲に草も木も目を覺まして、彼方はまだ誰も起きぬから山も林も寢て居るのだと、一人でさう思つて何となく嬉しい樣な氣がする

碧玉盤の上を走る水晶の缺片

▲別けて心地好く思ふのは、天の星の落ちたのを掌心に受て擎げて居る樣な、里芋の葉に凝る露の玉である、餘りに淸く麗はしさに、自分の顏が之に照らされて恥かしい、始めは白く柔らかい瓜紅の刷かれた指先で、チョイ〳〵突ついて見る、それから、輕く葉を搖がして碧玉盤の上をサラ〳〵と音じて走る水晶の缺片を追ひ掛け、つッくりした手の平に掬ひ取らうとする、過つてこぼせば、バラ〳〵と下の葉を打つて、物の裂け破ぶれ樣な如何にも小氣味の好い、胸の開ける響きがする、此露と此葉が無二の伴侶となつて、胸に床に就いて先づ目を瞑れば、あり〳〵と翌くる朝の里芋畑の景色が描かれるのである、其爲に朝起が益す早くなる、果ては目印を附けた芋の葉を前夜から奇麗に洗つて置いて、翌くる朝、其葉に顏を埋めて露に洗ふを日課とする樣になつた

雷けども成り難き雅致

▲爺やが丹精した甲斐あつて、これこんな大けいのが出來ましたと自慢たら〳〵ゴロりと瓢子の足許に轉かすは、切通を一つ隔てた鎌倉の大將の頭も此半分はどうかと思はれるばかりの南瓜、節瘤立つて畫けども成り難き雅致を帶んで居る

切子燈籠

▲極樂寺の生活も何時しか秋を迎へるに近くたつて、舊曆盂蘭盆の節が來た、

大聲に一ツ天を罵つて

今宵は魂祭りの十三夜である、湊屋の佛壇には女郎花桔梗の露込め切子燈籠を吊つて、哀れ深く魂棚か飾られた、後の椽から細越しに、稲村が崎に續いた山の横腹を望めば、其處に村の墓所があるかして、灯影に動く人の形、鉦の音、念佛など、心も消えるばかり淋しく聞える、海さへ鎮まり返つて、其懐に幽玄なる哲學を一盃に滿たして居るかと思はれる、木も草も默思に沈み、月は空中の水氣にボカされ、まだ田舍の暮らしに慣れぬ女世帶の都人に對しては、餘りに陰氣な此夜の景色である

▲店番をして居る阿夏は今夜はモウ客があるまいと、人の身體の縕に潜る程な隙を殘してお常に板戸を締めさせた、霙は更けるに隨つて白さを加へ、時々外を通る傘の音に、必ず冷ていとか暖けいとかの舌打が添へられるのである、グッと首を突込んだ兄イ、一睨み店を睨み廻はしてから、オイ菊世界を一つ呉ねいと白銅カラリ抛り出して、お常の手から詰らなさうに卷煙草を引つたくり、霙に薄れた傘の印をクルリと此所へ向け、べら棒な物を降らせやアがると大聲に一つ天を罵つて、大股に身振りをし乍ら跡をも見ずに行くのである、本尊を店に見なかつたので、大きに骨折損の冷た儲けと云ふ後姿である、一しきり近所の浚の歸りであらう、女雜りの笑ひ聲が表を殷はして通る、霙の中にバラバラと本雨が降り込む音

荒砥にかけた刄の色

▲吾妻を渡る時丁度淺草の鐘が四時を報じた墨田川は荒砥にかけた刄の色を呈して居る曙の月は早や花よりも朧になり待乳山の灯は河霧の底から起る櫓聲に連れて一吟眺毎に白けて行く心地がする始には梵磬次には蛙、鷄、犬の遠吠、家鴨の馬鹿騒ぎ等、物の音は次第に複雜になつて聲々に花の睡りを覺まさせやうとする、けれども花は、こんな事、で破られて仕舞ふやうな淡薄な夢を見て居るのではない上げ潮の水の私語を守歌に他愛もなく恍惚として居る

長命寺の曉けの大鼓

▲言問の角から折れて又折れて花と水との緣が離れた所へ來ると後に當つてドーン〳〵と地響きするは長命寺の曉けの大鼓、これが非常に好かつたので暫し立止つたが此響きで夜の神が大分惚りしたらしく花はソロ〳〵ほの白く匂ふて

藤鼠の朝霞

江戸的趣味

同上

鼓の筈竹が一時に裂けるやうな

來た

▲森を廻れば花も好くなる夜も明け離れる薄い藤鼠の朝霞みは此一時の是を包み盡して花は勿論眼界の渾ての背景を無聲の詩に化して居る

▲器械明文的の都府たる東京から江戸的趣味を發見するのは人類學者が芋畑の間から陶器の缺けを堀り出した時と少なくとも同等の價値がある

▲江戸的趣味は東京の水を飲むこと多い程益々深く舌に泌み込むのだ山と水ばかりの單純な幼稚な趣味ではない複雜な鍛錬された趣味だ正直に云へば田舍者の粗造な味覺に充分な刺激を與ふる程左樣に土の臭ひの激しい趣味ではないのだ。

▲坂を下りやうとした所、路を挾む藪の筈竹が一時に裂けるやうな響きを發した仕舞つた雨だなと纔かに意識する間もあらせずバラ〳〵と礫の如く頭を撲つて來た、意地の悪いものさ降られて困る時の雨に限つて必ず御手柔かな降りやうをしない、

深き春

蓬日本的旅心

空氣の変

活きて流る、動脈

暖かき希望の湧泉

▲花なく柳なく淋し味に悲し味を加へて滿眼の畫圖を掩ふた中に限りなく深き春を含んで人の魂を惱ます

▲腰掛茶屋に這入つて例の澁茶を啜つた茶釜の下には松葉が燻ぶつて烟りの匂ひが妙に舊日本的旅心を起させる

▲咽喉から鼠色の痰を吐かないのと何所を歩いても足袋の底が黑くならないとで三崎の空氣と東京の空氣との差を測ることが出來る

▲孟宗竹の深き藪や自然を枉げられぬ古來に風致を與へられ、動脈の如く活きて流るゝ用水の小川は東京人が飲む多摩川の枝流である轡虫が鳴いて居る

▲大晦日の夜市上に購ひ來れる鉢の梅を燈下に眺むる程嬉しきはなし、正月早々向島に七福神詣でをなし、廻り歩く深巷の裡思ひ掛けなき離落の間より、健腕の筆勢を示せるが如き横枝に數顆白玉の蕾を點ずるを見るや、滿目悲觀的なる冬枯の野中に暖かき希望の湧泉を發見し得たるが如く、樂しき世界は此梅の花の一輪と共に開展し始めらるべきものなるを思ふて、一種詩的なる哲理的な

る感想を起さゝるべからず。

▲春信先づ梅に通じて江東の各園茶汲女を雇ひ、人事漸く花の爲に忙はしからんとするの端緒を啓くも、天然は猶ほ其壓制を寛めず、遊人は寒風と戰ふべく雪霰と戰ふべく外套と瓢簞の武器を準備せざるべからず、既にして、銀鼠の暖雲低く裾を垂れ、乳の如き甘雨聲なくして下り、簑笠着たる利根の漁夫が鯉買はぬかと呼び來るの佳期に入れば、東京市民は漸く天然の壓制を免れ得て、筋肉の伸び〳〵する寢心地、鶯に呼び起さるゝ朝機嫌、春意始めて人に宜しきを覺ふべし、此時澁蛇の目の傘に嫩黄烟の如き門の柳を押分けて出でよ

▲念入れて水打ちし程の小雨、濡れ色暖かき大地に腹這ひて立棄ぬる朝烟、上野の森は恰も釜の蓋を取りたるが如く、濛々たる白氣を吐きつゝあり、其白氣の中に、幾億萬顆の櫻の蕾が蒸されつ膨らみつ色づきつある光景を想像し來れば、形容し難き優しき詩情は胸底の源泉より限りなく湧き來りて、渾身の脈管に琴の如く鳴り、頓に長かりし天然の殘虐の病苦を忘れ去るべし

鶯に呼び起さるる機嫌

形容し難き優しき詩情

東京的風景の直髓

天然と人事の調和

天然と人事の調和

▲岸を霞まする水の温味は浮寢する都鳥の腹に春の稍闌なるを知らせ、墨繪の枝に猩臙脂をポカせし未開紅の風情に、初代廣重が古き錦繪の中より響き來れるが如き金龍山の鐘の音を添ふるの趣味、これぞ一種の詩人の手に捉へられて端唄てふ俗謠の卑猥なる經に、韵絶味絶なる詩的の緯を貫かしむる東京的風景の神髓なれ

▲天然は人に向つて和を講じ、人亦天然の講和を歡迎するの最初なるを以て、櫻餅の旗、白酒の菰被り、瓢を佩べる胡麻鹽髯、裾を褰げたる銀杏返し、凡ての人事盡く天然と調和せざるはなし

▲東照廟下に踏み割られたる瓢を拾ふて、一句の偈を授けんとする俳諧禪の風骨、白髮祠畔に古鐘の下を吹いて、一縷の紫烟に春の行衛を尋ねしむる賣茶媼の面魂等、事々點頭、物々首肯して凡て天然の意向と調和せざるはなし而して此調和の美は天然が羈絆なく其美を發展し得るの場合極めて少き東京に於て、殊に著しく美的快感を刺擊し得るなり

殺風景又の名を春と云ふ

▲鎌倉の海より飛び出でたる大鯛魚河岸を闊がし、木挽町の三月狂言團十郎の大眼玉パッタと睨む所一時に滿都の櫻花を開かしめ、即ち東京を花の都となすや、市民は始めて雀躍して一年一度生命の洗濯の時期來れりとなし、有藏無藏、猫杓子我も〳〵と一時に浮かれ出で、滿地に展開せる詩卷畫幅を會釋もなく蹂躙し盡し、神經質なる詩人をして殺風景！又の名を春と云ふと嘆息せしむるに至らざれば止まず。

春を惜み多涙の人を迎ふ

▲既にして天然長く人事に壓倒せらるゝを屑しとせず、忽地に風の手と雨の脚を微ひ來つて横暴なる有藏無藏を此詩畫の天地より驅逐し、幽禪や孺珍や七子や風通や白紛や花簪や目かつらや手拭や紅黄紫白相繚亂し、妍醜都野相踏藉して盡く遁逃し去るや、天然は風と雨とを以て洒掃したる地上に、更に念入れて落花を振撒き、慇懃に春を惜む多涙の人を迎ふ。

花を出しの飲み食ひ主義

▲東京には花見てふ事なし、唯花を出しに使ひ花を踏臺にして騒ぎ狂ふの時期あるのみ、花こそ頗る好い面の皮と云ふべし見よ一年一度の好時期と稱して花を欺きし市民は其枝頭纔かに青葉に蔽はるゝをも待たず、一枚の布子を殺して初鰹魚に換へ、即ち調法なる舌端を轉じて曰く、是れ一年一度東京ッ兒の度胸を示すべき時機なりと、何ぞ夫れ虫の好きや、龜戸の藤の色四ッ目の牡丹の容等は元來深く問ふ所にあらず、唯初茄子の鳴燒紫玉を泣かしめ、新筍の美人の腕を割くあれば足るのみ、時鳥五月雨の雲を劈いて日光麥稈帽子に白く、燒芋の店は氷屋と早變りをなし、人は樹下水邊を戀ふの時に至れば、即ち水無月の鯉の、沈肉浴後の骨を仙にするあり、舊都の露を運び來れる松簟の新荷金塊よりも貴き彼も一時、紅葉狩、瀧の川より歸れる人は必ず紅葉よりも赤き顏を家土産になし、火燵櫓、隅田川を眺め下しての雪見も、是非手の上に盃なかるべからずと云ふに至つては、東京市民の今日主義に飲み食ふ以上の趣旨あるを信ぜんとするも得べからざるなり

葬者跌宕の歷史的風物

▲舊約聖書の中に溺渤たる亞剌比亞、埃及の風雲、杜甫李白の詩卷に滂薄する亞細亞大陸東端の烟霧、此等の趣味に養はれ來りたる氣魄を以て日本の風景に

對すれば凡て是れ石を積み砂を布きたる箱庭的小天地のみ、獨り武藏野てふ固有名詞の中に含蓄せる莽蒼趺宕の歴史的風物が、今猶ほ東京の周圍に昔乍らの雲烟の氣を留めつゝある賜に依つて、吾人は想像力を舊約聖書若しくは李杜の詩卷に包藏されたる强大の天然に及ぼし得るやう敎育さるゝの幸福を有する也。

全面殊別なる畫面

▲紫衣を披いて兀坐する禪僧の如き筑波鶴裳を着けて卓立する仙客に似たる富士、兩偉人の相對して談笑する所、强大にして純淸なる其呼吸は、常に東京の頭上を壓して相往來しつつあり齊しく莽蒼趺宕なりと雖も、富士を風景の中心となせる山の手の郊外と、筑波を風景の中心となせる向島の郊外とに於て、全然畫面の殊別なるを見る。

新派油繪の好畫材

▲鯨跳る大平洋の潮曇り南より壓し熊吼ゆる奥羽の山颪し北より迫り、加ふるに舊時の沼澤を水田に化成したる此廣大なる平野をば、天然的及人爲的なる大小數十百條の水路が縱横に貫通しつゝあるを以て、多濕なる空氣は動もすれば雲霧を醸し來り、四野に垂るゝ幔幕を複雜なる色彩に染む、之を見れば空氣の色を描くに力を極むる新派油繪の好畫材は向島の郊外に陳列されつゝあるを首肯すべし。

崇高莊嚴

▲櫻の土手を行き盡して流れ緩き綾瀨の岸に沿ひつゝ進めよ、又水下の湄りにさすらひて芦荻深き處に渡守を喚べよ、花の春と蟲の秋は必ずしも云はず、五月雨時の薄日影、菖蒲花凋みて青芒未だ月を招くの手を出さゞる時、低く〳〵野末に横はれる東京は、濃厚なる濕潤の空氣が斜陽の影を帶べる黃金色の霧に埋められ、淡藍の富士消えなんとして微かに在るを認むることあり何等の崇高ぞや何等の莊嚴ぞや。

凄凉幽遠

▲行く秋や紫紺の色の筑波山は檣より低きこと幾尺にして、湖水の如く平かなる野川に萬種の雲の色を映じ、枯野を燒く煙り長く引きて、横さまに房總三國を蔽へるを見ることあり、何等の凄凉ぞや何等の幽遠ぞや、其瞬間の趣味を消化して畫架の上に吐き出す所、必ずや空前なる風景畫の大作を現ずべし、然れども、其崇高、其壯嚴、其凄凉、其幽遠は描くべし、之を包圍する武藏野的

泣くことを解せざる冷強沈重の鐵漢

武藏野的趣味

莽蒼跌宕の氣は捉へ易からざるのみ

▲轉じて山の手の郊外を見よへの字への字の圭角なき丘陵起伏して、際涯なきこと大洋の波濤の如く、身は扁舟に似て、一波を越れば更に一波を迎ふるの思あらん、此一事既に平面的なる向島の郊外と全然趣を殊にしつゝあるのみならず、彼の濕潤と正反對に乾燥なり、彼女の涙脆き多感性と正反對に泣くことを解せざる冷強沈重の鐵漢也故に空林、畦畝、村落等、其斜面に其脊梁に若くは其凹處に點綴しつゝあるもの亦向島の郊外と筆法設彩を異にすること甚し、しかも尤も著しき相違は、風景の最大要素たる空氣の色にあり、其水分を含有する多少の度が原因をなして殆んど兩者を別樣式の畫面たらしむる結果を示すなり、然れども如此風景を品評するに平凡の二字を以てする勿れ

▲への字の山の端より一抱へに餘る朧月を吐き出す春の夕、或は粟黍を守りする案山子の簑ごめ尾花風に靡く秋の日に於て、狩衣に獵矢を帶べる武士の面影の偲ばるゝ歷史的武藏野の趣味は、却つて此の平凡に似たる風景の中に含蓄されつゝあるを見るべし。

毛筆の疎畫

霧の來るや成吉思汗の侵掠に似たり

吸へば水のやうな空氣

▲向島の郊外をして、紫勝なる新派の油繪たらしめば、山の手の郊外は單純なる曲線の輪廓に淡墨を塗抹したる毛筆の疎畫なるべし、筆意の老勁にして圓熟せる、古元信か今雅邦か、到底凡手の企つべからざるを見る

▲異常の現象あり、此莽蒼跌宕の大天地に滂薄する靈變の元氣は、獨り東京の周圍を繞るに滿足せず、時として其限界を破り、溟渤として東京を呑み來ることあり、是れ霧也、秋季に入りて地面の反射熱減ずるに及び低く〳〵裾を垂る〳〵水蒸氣の凝集體なり霧の來るや成吉思汗、帖木兒の侵掠に似たり、百八十萬の人口を有する雄大なる都府は、瞬時に馬蹄の塵に埋沒せられて顏色なく、漠々の外一時何物をも見ず、而して其變幻開闔の際、時として日光を帶べる尼古來塔の金十字を一閃せしめ、或は魚河岸の市聲魚氣を帶んで迸る等、一種尖新なる詩料ありて流矢の如く人を射來るの趣味は霧の東京より受くる賜也

▲吸へば水のやうに肺へ添れ込む空氣は星の色迄も洗ひ上げて、一粒づゝ露を

垂れて居る

▲人を嚇した程でもなく、やう〳〵大地と木の葉を水打つたゞけに濡らして、雨は何時しか歇むともなしに歇み、今度は空一面の薄曇りになつた

空一面の薄曇

▲月はやうやう山の端を離れて、微風に戰ぐ玉蜀黍の葉が薙刀の如き反りを有つて閃めく

薙刀の反り

▲水無月の滿月は、極樂寺の谷に滯ほる熱さを冷して海の底の如く蒼く涼しくして居る、少し磯臭いのに畑の物の月下に延びる生氣を含んだ夜の風は、之を甕に入れて頭の重きを苦む都人の靈藥に贈りたい程である

海の底の如く蒼く清しい

▲午前九時の強い夏の日は、高い岸の上に縋れ合ふ灌木の枝を穿つて、百条の黄金の箭を小川の半面に射下して居る、他の半面は岸の砂地に掛けて、不動尊を空洞に包んだ欅の蔭に蔽はれ、瀧とは云へぬ水の滴りが、一點々々互に晄み合ひ乍らキラリ〳〵と崖の青苔から落ちて居る

百条の黄金の箭

▲秋は海の色を淺黄に染め變へて、昨日より廣くなつた樣に思はれる、未練らしい殘暑も今朝の冷つく風に吹き拔かれて、爽氣は山の骨石の髓、樹の心迄に透り渡り、今目を覺まして顔を洗つたばかりの景色を以て人に對するのである

海の色を淺黄に染め更へて

▲神社の右手の谷、栢山毛襌等の古木が枝を組み合せて屋根をなして居る、下、勿論晝も明るくはない處に、山から湧き出す清水を井の樣に湛えて、箍のかゝつた大柄杓を置き、山上の民の飲料に供するのがある、それへ行く小徑には、種々なる灌木の花や草花が咲き亂れて、餘りの水がさゝ流れを作つて居る、山の娘の雪よりも白いの、山の息子の見事に身體の發育したの、それ等が朝に夕に溢るゝばかり山の汁を充たした手桶を左右に擔いで、木の精、草の氣に身體も着物も綠に染めさせ、きらめく氷の玉をこぼし〳〵行く狀態は餘念なく眺むれば目醒め骨洗はれる景色である

山の汁を充たした手桶

▲早春は軟風に翼を與へ、五月日光温かなり、處女グレースの神等は、露けき春の道に花まき散らして咲かせ、つぶやく波も今は眠りて靜かなり、飛び交ふ海鳥の羽根は燦めく金波に映じ、田鶴の聲は雲井より來る、日光和照にして雲

處女グレースの神

晴れ天清し、野は耕され小河は廻り〳〵て流れて日光に輝やけり、地は青葉に茂り、花は小さき鈴の如く、葡萄も色着き、果物亦實りて綠葉中に紅を點ず

山嶽

富士山……登山は嚴格なる日本人の事業……山の美の標本……火山を載する臺……英雄の墳墓……アルプス山……再生の恩を喜悅……山の資本……景色の始にして又其終り……山中の花……鳥獸に關する特殊の興味……色彩の豐富……勤勉忍耐なる住民……有ゆる配合總ての對照……秋の山は暗黑也……惡天候の美……雨は色彩に生氣を加ふ……一日の中異りたる美……雲の結果……薔薇色の光線……見上る山見下す山……興味富める山の根原……山の隆起及降下……崩壞の結果なる谿谷……自然は大技術家……氷河の破壞……氷河は美の全く豫期せざりし要素也……アルプスの眺望……自然界の壯觀活動せる火山……燃ゆる河……火山は地球表面の事由に原因す……高き者深き者の人を魅する力……ピラミット形の峻峰……餘りに紅葉の深さ……紅葉一段雲一段……龜の配合の變幻……爽快の極悲哀を催す……山の食物……自然の情福を領する山家……何かに吐出された一丸の月……

……苦臭い汗……山に住むで立派な仕事……千萬の魔軍……秀氣人を倒さんとす……夜の如き谿谷……火を焚いて堂に宿す……絶大の洞門……濃雲と驟雨……氣宇恢宏……嚴しく訊問される樣な氣がする……掃くは芥でなく て花……忍び入る落花一二片……見事に降る花……生命ある徑の小石……高い臺の上に飾られた置物……御祈禱鳥……鎧を着た偉丈夫肩の丸い女性……山の活氣人の活氣……頭を湧き出つる雲の眞中に突入れよ……其美なる恐怖心……寂しい荒果た美……怪鬱な雪の曠原……一種嚴格なる敬虔の情……樹木の斥候兵……

▲富士山は日本國土の實質が海國として無上の價値あるものに打成せられたる結果を示すもの也、其紀功碑也

▲富士山は日本の裝飾品也、海國日本に象嵌せられたるのダイヤモンド也

▲富士山は日本の眼睛也、其神髓也、其中心點也、日本人の品性を陶冶するの大坩堝也、日本人の心膽を鍛錬するの大鐵砧也、日本人に精神的敎育を施すの大學校也、如何なる文明も、科學も山の自然の一毫を損ずるを許さず、富士登山は遊樂的迷信的勞働に非ずして、嚴格(シリアス)なる日本人の事業なる也

山の美の標本

▲圓滿なる模範式火山の形容を損ずるものは、寄生火山の噴起と、巖石の崩壞とに在りと雖も、寶永山、小御嶽、小富士等の微瘤は未だ富士山の美を傷くるに足らず、肌膚亦未だ甚しく痩削せずして適度の肉を保ち、地球上唯一個の山の美の標本として、特に我日本の地を選んで置かれたるものゝ如し、遍く世界の名山に比較して、而して後に我が富士の眞に無二なるを確め得たる也斯の如く自然美の精髓を結晶せしめたる大塊は、惜氣もなく同胞の之を貪り見るに任す、之に對して品性の高まらざる者は胞に彈ずべきの琴線なき獸的人類のみ

火山を載する臺

▲日本に於ては人に仰がるゝ名山は、殆んど其總てが火山と云ふも妨げざる程也、極端に云へば日本は火山を載する臺の如きものなる也

英雄の墳墓

▲富士は大和心の忠君愛國の心のと、そんなたゞかしいものを代表しては居ない、彼は唯根本的不平の火焰をば、途中で腰を折らずに吐いて〳〵吐さ盡す迄吐いて、潔よく自滅して、其骸骨を地球に留めて置くのである、骸骨に心も魂もあるものでない、彼に對すると、驚天動地の大活動をなして笑つて瞑目した英雄の墳墓に向つて立つの感がある、一種詩的な歴史的な感想が起つて、何とも云へぬ心地がする

再生の思と喜悅

▲アルプス山は喜悅、平和及健康の無盡の源泉にして、又實に生命の根源也、吾人は精神の疲勞及憂愁を感じつゝ、倦怠し疲勞してアルプス山に登れば、其歸るや必ず健康と精力とに滿ちて歸り來る也、山間の自然は他の場所に比するに一層自由、幸福、光明及高潔に充ち、河川の暴漲、湖水の靜止、純白なる氷原、及偉大なる氷河、新鮮なる空氣、山々の秘密を包める山頂、遠山の霞、朝の美色、夕の輝き、天空の美、暴風の壯烈、何れも皆連續して吾人に再生の思と喜悅とを與へ、其記臆は決して永遠に忘るべからざる者也

壯嚴なる美を有せる山の資本

▲アルプス山谷の輝ける幻影は余の眼前に彷彿たり、蒼々たる天空、皚々たる白雪、灰色、赤色の大巖に加ふるに、此處彼處に綠深き落葉に交れる青松あり、平滑なる山の赤楊及び山毛欅の叢林を以て飾らるゝあり、森林あり、又其下には銀の如き流れに依り貫通せられたる濃綠色の草野を有する谷あり、然して

山は景色の始にして又其終り

山中の花

余は又殆んど想像ならんも、山上より下り來る牛の鈴の遠く響く音、又はさわ〳〵と走れる水の音を聞く事を得る也、無限の變化、休息、而も勢力の感覺、壯年の力、活動力、色の配合、形狀の美、彼等の根元の秘密等は、凡て壯嚴なる美を有せる山のみ本に紅合せる者也

▲山はあらゆる自然の景色の始めにして又終り也、山及び其所に至る迄の低地の景色の中に余が情緒は全く包括せらる、而して平地に於ける花、樹林、茫々たる天空を見て之を賞すれども、其幸福の溫室に於ける花を檢する如く、或は愉快なる書を讀むが如し、平靜にして稍趣味淋き感あり

▲山中の花は特に大にして且つ立派なる光輝ある色を有す、山に獨特なる多くの花、例へば黃、青、紫色のアルプスのりんどう、アルプス石南、アルプス櫻草、及くりんざくら或はアルプスおだまき、水仙、ふうりん草、とらかぶと其他吾人の知らざる數十の美花あるのみならず、此等山中にあるものは、同種類にても他方の谷よりも其花大にして、且一層の光澤あり、全く異りたるアルプス特有の種々なる草花は、星の如き花を以て飾られ、或は全く花の敷物を以て蔽はれたる芝の如き座布團を作れり

鳥獸に關する特殊の趣味

▲英國の森及離に於ける多くの受らしき鳥に慣れたる者は、スウイスの森及アルプス山に立てば、寧ろ寂寞荒涼の感なき能はず、而して猶鷲鷹の空中に高く翱翔するあり、不思議なるモルモットの聲、或は吾人は之を見る能はずと雖も、常に吾人を見つゝありと稱せらるゝ羚羊は又アルプスに特殊の興味を與ふる者也。

豐富なる色彩

▲山地に於ける他の大なる喜びは、彩色の豐富也、先づ第一に低地に於ける種々なる色の全色合と、たゞ山より來る濃紺青色との相違を考察せよ、普通の低地の景色中に、吾人は蒼々たる天空、爽快なる草木、畑に於けると等しく吾人の思考するよりも更に美なる樹皮及び樹蔭より來る紫色の要素あり、然れども山中には此等に加ふるに純粹なる菫及紫色の大なる連續せる塲所は、遙かに遠く連り、谷及び森の暗黑の上を通過する雲に依り、青色は最も優美なる色を呈

勤勉忍耐なる山の住民

す、此等の天色及び紫色は、他の薔薇色に変りて山頂の中に云ふべからざる優雅を來たす、此時天の蒼色は、平野に於けるよりも一層濃く、且純潔也、或る意味に於て曉の薔薇色の光線が、十二或は十五哩を距てし蒼々たる山を横ぎる光景を見し事なきものは、殆んど色の優美は如何なるものなるやを知れりと云ふ能はず、實に輝ける優美は、之を天空或は花に於て見る事を得るも、遙か彼處の山の紫色の壯嚴なる優美は、之を解する能はざる也

▲余(ラスキン)はフロローサイン及びアルテニーの間にトリント水域に接する地方よりも、一層明白に何等の遮るものなく、山の性質を表はせる地方を知らす、ローン河の谷より此處に至る路は、恰もゴシック塔の柱の中の階段の如く險しき廻り路にして、終に山の背を越えて、殆んど終點を知らざる谷の中に退けり、然れども勤勉忍耐なる住民は、人口稠密之に住せり、此處に住する農夫は、恰も水中にある海豚の背の如く、平滑にして長く黑き大なる隆起せる岩の端に沿ひて、徐々と色附く苔或は矮草を注視して少しづゝの土を集め、之を開拓し、一二年を經て漸く小麥の小なる穗を岩間に波打せつゝあり

世界が興へ能ふ有らゆる配合

▲此日は普通惡天氣に先ちて來るべき最も靜穩なる日の一日なりき、空氣は全く靜かに、且つ凡ての雲、蒸氣より自由にして、五十否百哩も隔りし山も手に取る如く明かに見ゆ、又其細かき事即ち山背、巖、雪、及氷河は誤りなき正確を以て見るを得べし、アルプスの主なる峰々一つとして隱れたるものなく、凡て明瞭に現出せり、就中一萬尺の足下には、ハムレットの草野ありて、此處彼處に徐に青き烟を上ぐる牧畜小屋の散布するあり、他方に於ては八千尺の下方にブルーイルの牧場あり、又暗々鬱蒼たる森林あり、其他愉快なる草野、跳れる瀑布、平和なる湖水、肥えたる土地、及び荒れたる土地、日當りよき平原、或は寒冷なる高原あり、又最も凸凹甚しき形狀を爲せる處、最も立派なる輪廓、恐ろしき垂直の崖、或は靜かに起伏せる傾斜地あり、城壁、小塔、尖塔三角塔、圓天井、尖峰及び尖閣を有せる陰氣にして、嚴格なる、或は殫ける白き巖石の山、及び雪山あり、此處には世界が興へ能ふ、あらゆる配合、及び吾人が心中希望

する凡ての對照あり以上は夏の景色なり、然して秋及冬の景色は之れ亦相當の壯大及び美を有せり

秋の山は暗黑也

▲秋の山は暗黑也、灰色の霧は山を圍み、旋風は荒野に聽ゆ、暗黑は狹き野を通して河流に回轉し、木の葉は飛ぶ

惡天候の美

▲惡天候も屢々山の美及壯大を增す、山麓の隱れたる時にても、山頂の雲上に聳ゆるありて、全山嶽の現出せる時よりも更に一層の偉觀を呈す、陰鬱は山の光景に一種の魔力と秘密とを與へ、飛翔せる雲に至ては、更に大なる變化を與ふる者也

雨は色彩に生氣を加ふ

▲雨は色彩に生氣を加ふ、樹葉及草は一層輝ける綠色を呈す、凡ての日光に焦げたる岩石は瑪瑙の如く輝き、好天氣に恢復するや、新たなる雪は非常なる光輝を與へ、森は特に仙境の美を以て被はる、アルプス地方に於て何人も其山の有せる秘密及び隱所を一層完全に樂しまんが爲に、又は更に精密に探見せんが爲に、人をして鳩の如き翼を渴望せしむ、然れども身體は後に止まるも、猶心をして遠く仙境に馳せしむるを得る也

一日の中異なりたる美

▲山は一日の中毎時それ自身異なりたる美を有せり、而して朝夕は殊に異りたる光彩を以て輝くを常とす

雲の結果

▲山地に於ける雲の結果は、平地に於けるものよりも更に變化多く、且つ一層の光輝を與ふ、天上高く漂ふ雲は、時に最も美麗なる虹色の光を以て輝き、下界より見る時は恰も天女の翼の如し

天體より地球を瞰下す

▲低地に於ては何人も雲中に在る事を得れども、雲上にある能はず、而して吾人が山頂より下界を瞰下し、遙か下方に漂ふ雲を見る時、恰も天體の一つより此地球を見下すが如き感あり

薔薇色の光彩

▲アルプス山中にて最も勝れたる光景は、日沒後暫時の間、薔薇色の光線の雪及氷の上に照り輝く風光也、山麓は既に影に閉され、プラン山の頂きは雪に反射する夕陽の光に依て變容す、此光は恰も他の世界よりの光線の如く、又其消ゆるや來りし時と同じく突然に且つ不思議に消滅す

見上る山
見下す山

▲吾人が谷より山頂を見上ぐる時は、彼等は地平線より遙か高く突起せる個々別々の峰の如く見ゆ、然れどもこは全く誤れる印象にして、高き山頂に上りて之を檢ずれば、彼等は曾て半球形を爲し、或は臺地なりしものにして、此中に谷の刻まれし多くの形跡あるを見る、多くの山脈は、一般に古代に於ては現代の少くとも二倍の高さを有せし也、而して現代に於ける最高の峰は最も少なく、時の損耗を受けしもの也

興味に富める山の根原

▲山の根原は實に多くの興味に富める問題也、火山の建設は今も猶吾人の眼前に進行しつゝあり、又他のもの例へばドロマイツの如きは、リッチゾーフエン及び他の地理學者に依り、古代の珊瑚列島として承認せられたり、屢々國を横りて數哩に亘れる長き斷崖は、主としてホワーテーカーの探究せし所なるが、今や大氣の働きに歸するものと決定せり、然れども山脈の普通の根原は、最初は下部より上方に向ての壓迫なる事云ふまでもなし、之に反して山の根原は、最初は下部より上方に向ての壓迫なる事云ふまでもなし、之に反して山の根原は降下にありと云へば、殆んど逆説の如く思はるれど、而も今や普通の原因は兎に角、或る場合に於ては、下層がある物體の收縮に原因する横の壓縮なる事確實となれり。吾人の知る如く地球は漸々冷却しつゝあり、而して冷却するに依りて收縮するが故に、外皮の層は必然的に褶を形成する也、之れ恰も冬に於て林檎の乾きて表面に皺を生ずるが如し

山の隆起及降下

▲山の隆起及降下は今日と雖も、世界の種々なる方向に於て行はれつゝあり、スカンヂナヴィアは北の方に上りつゝありて、之と反對に南の方に沈みつゝあり、南亞米利加は振子の如く其軸に於て廻轉しつゝ西方に上り、東方に沈みつつあり、山脈のよりて起る地層の壓壞及褶をなす事は必然的に地震を起す者也、此事實に關しアルプスは實に驚くべき説明を與ふ、而してスウィツランドの地方に於て屢々起る輕き地震は、アルプスを隆起せる力の未だ全く消費せられざるを示し、又地下の徐々たる移動が、今尚山脈の側面に沿ひて進行しつゝある事を示す

自然は大技術家也崩壊の結果なる谷

▲山脈の起因が壓縮に原因するものなれば、現在の谿谷は、主として崩壊の結果也、一度山脈の隆起するや否や、自然の全體は、其れに反抗するもの、如し、太陽と霜、寒暑、空氣と水、氷と雪、苔の如きものより松柏の如きに至る凡ての植物及び虫の如きより人類に至る有ゆる動物は、皆一致聯合してそれを攻擊す、然れども其中水は最も有力なる活動物也、秋の雨は凡ての竅及び裂罅を浸潤す、而して其水は凝結して最も固き岩石を破碎す、又春の太陽は雪を溶解して川の水を膨脹せしめ、其河は代り番に平原に破片を運び行く也、然れども詮ずる所自然は大技術家の如くに形なき石塊に形を彫刻し、粗野なる物體に生命と美とを賦與するものなりと云ふ方恐らく一層正當なるべし

氷河の破壞

▲スウイス山の頂きは氷河以上に立てり、故に其頂きは高く聳へ、スコットランド及ノールエーに於ては之と反對にて、現今グリーランドが其實例を示すが如し、曾て全國を蔽ふて擴がりし一面の氷は、山の尖れる峰を切落して、之を殆んど大なる大頭の飾り鉞の如くに爲せり、然るにウエールスに於ては同じ原因は時の避くべからざる作用と合して、曾て崇高なりし頂きを削り落して、單に斷株の如きものと爲せり

氷河は美の全く豫期せざりし要素也

▲スウイッツランドに於ては雪線は普通八千五百尺と九千尺の間にありと云ふ、之れ以上に於ては雪は漸々堆積して氷河を形成し谷を下りて遙かに流れ行くに至る

▲氷河は甚だ美麗なる者也ダッフアリンは云へり、ピヤレンゾルク山は、其大さ、其色及び其結果は、余が豫期せし凡てのもの以上なりき、氷河は實に美の全く豫期せざりし要素なりき、テームス河の如き大河の有ゆる障碍物を破壞して渦卷きつゝ、泡立つ瀨を爲して岩より岩に突き當り跳ぬ返へりつゝ、水煙を飛ばして山側を流下するもの、忽ち泡沫及水煙に至る迄も凝結して、不易の彫刻物に異變するを想像せよ、此實景を親しく目擊するにあらざれば、其眞相を浮ぶる事不可能なり、吾人は進みてナイヤガラ瀑布の落つるが如くに、此等の氷河の海中に墜落す地點に達せし時、最早其河たるの概念は、之を起さんと欲

アルプスの眺望

するも能はざるに至り、吾人の目は船の檣上數百に上る氷の輝く絶壁と見えし所のものに於て、單に驚愕を以て之を注視して滿足せりと

▲スウイスの山々は各其獨特なる性質を有せり、テインダルはアルプスに於ける眺望を次の如くに記せり『今日は天空にも山頂にも一點の雲あるなし、又外界の鮮明を邪魔する霧も霞もなしヂャングフラウ山、モンク、アイジャー、トラグベルグ、嶮峻なるストウルグラットの諸山は、皆偉大にして天空に聳え、フインステラーホーンは山の靈の如くに其近隣の凡ての上に超然たり、次ぎに吾人は其脊に轉流するヴイーシの氷河を有せるオベラーホーンを見る、下方を見れば水晶の如き崖及藍色を帶べる海に帆かけつつある白き浮氷を有せるカヤージエリン海あり、其前面にはイタリーよりヴァーレーを別つ山脈あり、一轉して眺むれば雛鳥の母鳥の方に集まるが如くに見ゆる峯々の聚合せるあり、次に吾人はサーバン山の互に相反抗せる巖を見て、知らず〳〵野蠻にして馴致すべからざるに殘忍の觀念を腦中に惹起せしむ、次に來る者は其偉大なる點に於て、

自然界の壯觀活動せる火山

前の諸山に勝る事なからんも、威嚴の觀念を吾人に與ふるはヴァイスホーン山にして恐らくアルプス山中の最も立派なるものなるべし、そは實に魔力と共に美麗をも合せ有せり、故に吾人は此山に對して殘忍の感想は少しも之れを起さず、反て偉大及剛毅の念を浮ぶ、右の邊には大なるコーンバン山の其禿頭を高むるあり、他の山々峯々は其周圍に集合せり、又灣曲の終點にはブラン山あり、今や日没に近づきたれば、眞珠の如き雲の渦卷形は、其山頂の周圍に棚引くあり、此等の雲に色なけれど、猶其影狀の優美に輝く光の和するありて、其美は實に筆紙の及ばざる所也

▲自然界に於ける壯觀の中、活動せる火山程莊麗なるはなし、世界に於ける最も著明なる噴火口は、恐らくハワイ島のマウナロアの側に立てる四千尺のキラウエア火山の噴火口也、其直徑二哩にして、其輪廓は楕圓形をなし、其周圍殆んど七哩あり、內部は溶岩の大なる湖にして、其半面は絶えず變化しつゝあり、普通は其面噴火口の緣より殆んど八百尺の所にありて、其深さは殆んど千四百

燃ゆる河

尺也、其熱度は非常なるものにして、夜間殊に甚しく、雲は其溶岩よりの反射に依りて眞紅色を呈し、其光景甚だ壯麗也、而して溶岩は漸次に噴火口内に其容積を増し、終に側面を穿ちて噴出するか、或は縁より流出するを例とす、斯くて其後噴火口は或る時は數年間も空虛に殘るに至る

▲溶岩の流れは、燃ゆる河の如くに山の傾斜面を流下し、最初は其速度大なれども、其冷却するに從ひて、漸々に火山岩を形成し、終に溶解せられたる物質は、自ら冷却するに依り上部面側を全く固體に化せる外皮を以て蔽ひ、墜道を形成し、源より絶えず溶岩を供給する間は、徐々として其内を流れ行く也、而して此處彼處に溶岩の外皮を通じて現はるゝあれども、之れ又絶えず其前方に再び外皮を造れり、如斯にして、此恐ろしき殘忍酷薄なる火の河は、其行路に於ける凡ての物を滅亡しつゝ徐々として流下す、一千八百八十五年に火山より噴出せし溶岩の流は、七十哩の長さに及び、一千七百八十三年にアイスランドに於けるスカプターヨーカル火山の噴出せしものは五十哩の長さに及び其深さは、最も深きものは殆んど五百尺に達せり

火山は地球表面の事由に原因す

▲火山の根原に關しては、二個の主なる理論あり、噴火の現象の宏壯なると、偉大なるとに依りて深く感銘せられ、其の印象は火山の破壞力に依りて更に增加されて、多くの人々は火山の噴火口を地球の外皮を通過して地球の中心に於ける火と行通せる巨大なる煙突となせり、然れども最近の研究に依れば、火山は其偉大なる點に於て、大に人目を驚かすものなれども、火山は重に一地方に限れるもの、又表面の事由に原因するものとして考へざるべからざる事を示せり

何物か線より成らざる形體あらむ

▲天下何物か線より成らざる形體あらむ、樹木の垂直なり、斜曲なる、平野湖沼の水平なり、弧線なる、日輪月輪の圓なり、半圓なる、高塔の上尖りて下大に、或は方なる、或は六角なる、皆各美を其一方に恣にす、然れども有ゆる太線、曲線を湊合し、配置し、對複し、離乖して、虛空の白紙に皺を走らし、皺を引き、縱横に交叉して、如何なる黑風白雨も之を抹殺する能はざる畫圖を作

る者は、地球上單だ山是のみ

高きものは其性質として本來人を魅する力を有す、高きものは何が故に然るか、人の到達し得べき圏外し人間の干渉を許さずして、造化が專一支配の下に立つものは、高きものゝ特權なるが故に非ずや、之と同一の推論に依り、深きものも亦人間の到達し得べからざる圏外に在りて、初めて壯嚴視さるべし

▲國寶に編入されてある御嶽神社の古冑に酷く似たピラミット形の峻峰が宛然緋緘に黄金の金具を打つた物の樣、黄葉紅葉に包まれ、雄大も壯嚴に嶄然群山を拔いて秋天を刺して居る

▲神社を横から拜んで雲湧く谷に降つた足に觸れる物は龍膽の花、梅鉢草と云ふ蘭科の白い花、栗の毬、栗の實、猿の睾丸と云ふ赤い草の實狼か何かの乾いた糞、袖を引くものは葡萄の蔓ヨソドメと云ふ珊瑚の小粒の樣な灌木の實、行く〳〵雲の薄衣を搔き分けて覗けば、底の底に一筋の水音を殘して餘りに紅葉の深さ胸も轟く許りである

高と澤の人を魅する力

ピラミット形の峻峰

餘りに紅葉の深さ

▲紅葉一段、雲一段、層々極まり無く幾千尺の深さ迄に重なつて夕暮の樣に薄暗い底から、紫かがつた一條の煙が、奥の宮と高さを爭ふべく、眞直に立ち昇つて居る、それが恰も我々の話し聲と鸚鵡石の反響の爲に驚かされたかの如く、俄に中途から二つに切れて、上の方が横さまに流れ始めた、山勢に隨ひ屈曲して其疾さは虚空を奔る多摩川の樣である

紅葉一段雲一段

▲奥の宮より更に一層高い大嶽山が、丁度今雲の中から顔を出して再び隱れやうとする刹那である、雲の濃淡と褐色黄色紅色の葉と杉檜し黑木との配合が幾通にも變幻して息を繼ぐ間も無い

色の配合の變幻

▲氷の如く冷たい溪水に臨んで壁にも天井にも淙々の音が餘る程な、眞に仙家の名に背かぬ趣味を領せり

壯快の極悲哀を催す

▲九月十五日は霜雜りの驟雨に襲はれて、山で稀有の暑さたる八十二度が俄に六十六度に降つたには爽快極まつて却つて悲哀の感を催す程であつた

▲野菜は各自所有の山畑に産するもので充分だ夏には下男が麓の溪川から鰍を

山の食物

自然の清福を領する山家

捕つて來る秋には山の土が種々の菌類を供し、山の植物が野木瓜、松茸、栗等を與へ、雪が降れば雉子山鳥、猪、鹿などが食膳に供される、それに家鶏は何時でも珍客の犧牲となるべく飼養されて居る

▲春は遠近の山櫻が咲く、秋は杉檜と溪川及び瀑布を殘して全山悉く紅に染まる、冬は云ふ迄もなく眞白になる、さうして自分が行つた夏秋の交には、桔梗女郎花撫子に白百合をこきまぜて山の草皆物言んとして居る、鶯と杜鵑は檜の葉隱れに啼く、御祈禱鳥、慈悲心鳥などの奇鳥は時々人を嚇かすやうな又嘲るやうな音を漏らす、此自然の清福を領して三十二の樂しき家庭は靜に白雲の上に横たはつて居る

吐き出された一丸の月

▲籟々として山の葉は夕嵐を帶んで落ちる、御嶽神社の太鼓は一種神寂びた響を以て空山を震はす、子供が軍歌を唱ひ乍ら足踏する楹の板が、低に青白く光り出したので、首を斜めに茅の檐を仰げば天を攫む杉の老木の眞黑な梢に、箭を射る如く横さまに走る雲を拔いて、澄み切つた一丸の月が何かに吐かれた

樣に躍り出てた恰も好し今宵は九月十三夜である

▲目は早や山の秋に滿足して自然に口の慾に移る、何の蔓でも引つ張りさへすれば大抵其端に食ふ物が付いて居る

▲今日の汗は鹹くなくして苦臭い

山に住んで立派な仕事

▲山に住んでも立派な仕事はある、天下同好の文士の爲に來つて靜思するの地を作る事、山の清き子に小學以上の教育を施す事、自分も亦山の秀靈の氣から或る發明の力を與へらるべく深く養ふ事

千萬の魔軍

▲四面壺く樹にして遠眺を逞ふする能はずと雖も、山嶺風常に烈しきを以て、樹皆高く天を衝くこと能はず、却て偃蹇横悠の態を逞ふし、葉疎らに瘤多く奇々怪々、千萬の魔軍を闘はすに似たり、一種の奇觀なり、是等の樹は所謂無用の材なるものにして、敢て規矩繩墨に合はず、薪となすも亦容易に燃ゆべからず、長へに斧鉞を免れて萬世に存するもの也

▲絶巓に達す、八面無碍、焚籠の中を脱したるが如く飄々として双袖に風を蓄

雄氣人を

倒さんとす

へて飛び去らんとす、眼を放てば鳥峰近く我が前に在り、手を延べて之を撫すべし、雪膚皎潔、神骨靈奇、秀氣人を倒さんとす、爽然として自失す、四山繞繞、雲烟際涯なく、莽々蒼々として天末に波打つもの、盡く彼が兒孫に過ぎざるのみ

夜の如き黯俗

▲五峯相環擁せるの間、宛然として擂鉢形をなし、樹密に雲深く黯々として其深さを知らず、人をして毛髮を竪たしむ、古より人善く此谷底に入りし者なしと、嗚呼其深さ幾千仞、陰々暗々常に夜の如く、日も照さず月も照さゞるの底、長へに造化の秘府として、此裏の光景何の時か人界に明かなるべきやを知らざるなり

火を焚いて山中の宿に宿す

▲冷氣骨に徹して悚然として覺れば、爐火既に滅して白灰山の如し、此時一友はかすかに鼾聲を漏らし一友は死せるに似たり、四邊森寂として風なく、只寛の水の音を聞く、夜氣凝つて陰冷を釀し鬼氣人を襲ふ、火箸を把て灰を撥すれば、一點螢の如き殘火を認む、即ち枯れ杉葉を加へて之を吹けば、撥々の響と共に一團の紅焰を飛ばし火焰の空氣に觸るゝ音、物凄く森寂の中に響き、焰裏忽ち大魔王を現出せんかと疑ふ、既にして火氣籠り堂に滿ち、纔かに陰冷の氣を驅逐することを得たり、即ち復た睡に就く、曉きに至るまで夢驚くこと三たび、覺むれば必らず火を燃やして復た睡る

絶大の洞門

▲岩皆褐色、巨斧を以て削りたるに似たり、一大岩、環の如きもの巍然として絶大の洞門をなし此間より谷底を下瞰すれば、萬木森々雲湧き風生ず、毘沙門堂小なること蝸殼にだも如かず、洞中の天地悟として別世界を望むに似たり

濃雲と驟雨

▲須臾にして濃雲全く谷を蔽ひ、洶湧として巔に捲き來る、百龍一時に天に上るに似たり、偉觀と云はんか奇觀と云はんか、唯駭然として魂を掉はしむるのみ、既にして天地全く雲に罩まれ僅かに洞門と我輩三個とを殘すに至つては、全く人間社會に對するの感情を失ひ、飄々として空に乘せんとすなどは、平生慣用するの形容詞ながら、此一瞬時は眞に我自ら理解すること能はざる微妙不可思議の觀念を動し出せり、忽ち聲あり萬竹一時に裂く、沛然として下るは驟

山氣深浸

氣宇恢宏

殿しく訊問される樣な氣がする

掃くは芥でなくて花

雨也

▲山氣深く浸して蔀席沈蒼を含み、古壁陰々として雲霧を蓄ふるに似たり、主人柱に倚て長笛を吹く、彷彿として蟄龍を起し來らんとす

▲誰か名山に登りて雄大の氣を養ひ得ざる者ぞ、誰か名山に登りて局促の氣を脱し得ざる者ぞ、絶巓に卓立し、濶然として四望するの間、一片の活氣天外より來りて腹吐に入れば、多少柳塞の物盡く解け去るを覺ゆるなり

▲何しろ、御嶽山から又五里も奥で、多摩川の水源に程遠くない土地であるから、東京の塵埃の中に住み慣れた者から見れば、何となく物凄く、身の上が氣遣はれる樣な景色だ、景色が好いの惡いのと云ふ段を越えて、山々峰々八方から我に迫り、何用あつて此處へ來たと、殿しく訊問される樣な氣がする

▲山の土から生れた眞黑な下女が、『今朝掃除したのに、又た……』と小言を云ひ乍ら、手荒く庭前へ掃き飛ばす物を見れば、芥でなくて花である、仰向く軒端は一面に薄白く、崖から覗く山櫻が風なき夕暮を雪にして居る

忍び入る落花一二片

見事に降る花

生命ある徑の小石

高い窓の

▲歸つて寢やうとして、餘りの物足らなさに責めてもと、夜風の身に泌みるを厭はず、例の山櫻の下の雨戸を引き明た、冷々と袖を嫐つて袖口の中へ忍び入る落花一二片、ソッとして頸を縮める

▲朝飯畫飯一度に濟まして、後の山へ風に吹かれに登つた、川を見下す處へ出やうと思つて、細徑を辿つたら、測らずも自分の座敷から見える崖の上の櫻に行先を塞がれた、花は昨夕の樣に降つて居る、今日は風が強いので寧ろ昨夕よりも見事に降る、下を覗けば座敷に置いた自分の足袋も手帳も眞白になつて居る

▲鍛の中に人の足跡らしいものがあると云ふだけで、徑と云ふ名を與へるも口惜しい程である、木の枝は左右から手を延べて、或は引留めるもあり或は彈き返すもある、徑の小石は皆生命ある物の樣で、足を置かうとすれば避けて谷底へ飛込むのである

▲忽ち廣くなり忽ち狹くなるは車の轍の無い徑の常である、仰ぎ見れば青葉若

上の置物

葉が白雲を吐いて、鶏の聲は天から落る樣である、御嶽神社の朱塗門と、彼方此方の御師の茅屋根に美しく草の生へたのが、高い臺の上に飾られた置物の樣になつて見える

怪禽御祈禱鳥

▲牝鹿の物に驚く樣に飛んで、暫く中に細徑の楢の葉陰に隱れた、御祈禱鳥と名づくる怪禽は、其檜の上の一つ上の檜の梢で、鳥の行者の如く神寂た鳴音を漏した

鎧を着た偉丈夫と肩の丸い女性

▲眼前三尺の處、霧が俄に薄くなつた、薄くなり〳〵して、大きく圓く輪廓の不規則な空處が出來、谷を隔てた向ふの山の鮮やかな綠が、パノラマの樣に描き出だされたと思つたら、それが又横の方から流れ込んだ一際濃き雲に撫で消されて、却つて頭の上が廓然と明るくなつた、驚いたり、御嶽山より首だけ高くて、ヒラミツト形した大嶽山は、鐵の兜を戴いて鐵の鎧を攝た偉丈夫の如く、腰から上を雲の外に現はして、儼然我を睨みつゝ立つて居る、骨格の秀でゝ相貌の勇ましい事は、肩の圓く肉の柔かい御嶽山をして、其前に跪き俯せしむるに足るのである、藤、躑躅を着物の模樣にして、珊瑚色に塗つた神殿を頭に戴いて居る御嶽山は、此大嶽山に對する女性である、御嶽山は大嶽山の妻である

山の活氣人の活氣

▲餘りに山の靜かさに、犬の聲鶏の音の一旦高く雲に昇つてそれから谷の底へ落るのが、天地に充ち滿ちて聞こえる、どうしても人を立去り兼ねしむる景色である

▲どうです、生々した心持の好い景色ではありませんか、スツカリ綠りになつて此路を登つて來た時とは、丸つ切り景色が別になつた、谷川が見えなくつて、唯音ばかり聞こえるなんか、いゝぢやありませんか、山には山の活氣あり、人には人の活氣がある、人間も此天地を悉く綠にして仕舞ふ樣な、意氣込がなければなりません

高山の驚嘆

▲登れば登る程高い山に驚嘆しつゝ行くと、威力ある海洋の波濤も見えて來る、滔々たる江河の流も見えて來る、遂には此全宇宙の波も見える樣、星宿の軌道

頭を湧き出る雲の眞中に入れよ

甘美なる恐怖心

愛すべき細徑

寂しい荒果てた美

も見える樣＝からなると小なる人間は遂に自己の內部に深く沈まざるを得ない

▲神が自分の生活を許し給ふ間は、自分は毎年二三回、少くとも一回は必ず登山を試みやうと決心した、其は一つには高山植物を研究する爲であり、一つには身體を强健ならしめ、精神を爽快ならしむる爲である、否當に其ればかりでない、彼の豪宕にして峻嶒たる高山を登り、我が頭を天表に湧き出づる雲の眞中に入れたならば、どんなに愉快でも得られない事はないではないが

▲嶷巒重疊たる山嶽の間を跋涉する間に、精神は何となく恐怖心に充たされ、而も其恐怖心は一種甘美なる趣を有つて居る

▲平野の美も美には相違ないが、自分は峭立してる巉巖や、急流の轟轟たる聲や、天そゝり立つ樅の木や、千古斧鉞の入らざる森林や、岩根こゞしき九折りの細逕などを愛する

▲此寂しい荒れ果た處にも美はある、しかし此の美は唯之を享受し得る人にのみ好意を呈し微笑を送つて、其他の人には不快な印象を與へる性質の美である

寂的及感興

怪僻な雪の曠原

一種嚴格なる敬虔の情

樹木の斥候兵

……吾々の脚下なるアルプスの中腹には一望涯なき湖水が藍を湛へて居る、此美觀は恰も一幅の繪畫であつて、ユラ山の絕巔を以て其輪廓として居る

▲高山の上、密林の中、孤島の上に、自然は最も詩的な感興を打擴げて居る

▲世界の中で最も荒寞ないものは、即ち此怪僻な殺風景な、雪で蔽はれた山の曠原である三時間計りと云ふものは、前へも後へも歩けるものでなく、全く活き心地も無かつた

▲近世の詩人に現はれた、山嶽に對するロマンチック的感想は、發足點を崇高の感情に置いたけれども其內容は單に崇高な感情ばかりでもなく、又ゲーテの說いたやうに、單に寂寞とか不在とか別離とかいふ感動的悲哀ばかりでもない、吾々の心をして永遠實在の前に戰慄せしめ、天に朝する山巔より一躍して空靈縹緲たる帝國へ上らしめ得る底の、一種嚴格な敬虔の情であつて、此情は又我々の精靈を沈めたり、又之を昇上せしむるのである

▲下方には普通樅或は松及び落葉松を以て蔽はれたる一層險阻なる處あり、其

或る者は恰も干若の斥候兵を先にして軍隊の山を登るが如き有樣を爲せるものあり

海

高山の巓深谷の底共に海の趣味あり……俗物に秘せられたる大寶庫……舟を家となし一世を漂泊せん……無人の孤島濡れたる巖……一大紗幮の裡……七彩の飛沫……百里觀潮の行……崩れかゝりたる人波……海が創造の新趣味新思想……感情の胸學問の淵叢……一段沈痛なる氣味……彼等の海は芝居の波幕のみ……暴風と暗黑との結合したる力……懷かしさ羨ましさ……海と靈山……黑き巖に寄せ來る波……偉絶凄絶の光景……測り知るべからざるの不安……一丸の素月……風愈豪也……紫深き天と水……水色澄徹……女性の怪物……早曉水禽を驚起せしむ……小兒の如く驚呼す……波濤と暗黑の衝突……幽咽として哀切を極む……設彩に客なる山海……健氣にも游泳する我等を來襲する魚の群……余りに痛快にして氣味の惡き程也……躶體を打つの海泡……波と人との戰ひ……哀れなる話……芋虫種屬……淡墨の筆痕……鰯を貪食し去る鯨の壯觀……漁撈は詩的營業也……意氣を豪にするの遊樂……魚の都府の衰微……荒削りと彫刻……默座と氣焰……意味深き美……餘りに鮮明に失したる光景……若き希望の光りが一杯……一年一度の靜和……海國民の長所短所……壯なる哉海賊の歌……波濤はそれ墓歌か……夏時海岸に移るは人間の本能也……陸地にあらざる美麗なる野……狂氣する程に美麗なる海……遠洋航海……海は時以上の者也……休息なき海……偉大なる立派なる表象……詩人に極力描寫せられたる海の暴風雨……礁湖の人を恍惚たらしむる美觀……南方の空の美……東方多島海の風景

▲海濤は藥石以上の藥石也

▲高山の巓を愛する第一の理由は、眼中の眺望恰も怒濤狂瀾の我を圍んで來るが如きを以て也、千山萬岳波狀をなして脚下に起伏するあるに非ずんば、予は左迄に高山の巓を愛せざる也

高山の巓

▲幽谷の底を愛す、斷崖百丈斷泉之に掛りて雪崩の落るが如く、天風一たび來つて之を撲てば、瀑布中斷して横さまに萬樹の上を飛び、半山の白霧を釀す、此時樹下石上夜よりも暗きの處に座して、仰いで青天の帶よりも細きを望む、

幽谷の底

蒼々凉々としてたゝ深海の底に在るが如し

▲高きに登つて海を望めば凍りたる胸に新たなる希望湧く

新なる希望

▲扁舟を放つて大濤を弄べば枯れたる頭に新たなる思想浮ぶ

新なる思想

▲景は海上の月に如くものなく味は海魚の生けるものに過ぎたるは無し

▲願くば死して太洋の底に葬られ萬有皆青きの所に眠らん

▲海は凡て俗物に秘せられたる物を貯藏するの大寶庫にして靈氣時々外に漏れ光の如く虹の如く波頭に閃く

俗物に秘せられたる大寶庫

▲願くは堅牢にして而も進退の輕快なる小滊船を得て之を我家となし王國となし世界となし海より河に河より湖に一世を漂泊せん

舟を家となし一世を漂泊せん

▲海中の孤島人を棲ましむるに足らざるものを愛す。常に濤に洗はるゝ濡れたる巖を愛す人棲まざるを以て輙ち清し然れども清きが上に清かれとて濤は洗ひし上に之を洗ふ巖は打ち來る波の粉末を練りて絲となし日夜幾千匹の白絹を織りて暫くも留めず之を海に返す

無人の孤島濡れたる巖

▲凉波月を吹いて其色碧玉の如く滿眼蒼々として一大紗幮の裡に在るに似たり

一大紗幮の裡

▲月下波崩れて雪に紫を帶び飛沫動もすれば七彩を成さんとす

七彩の飛沫

▲八月秋高きの時天來の爽氣の潮に入つて鳴るを聞くべく肥馬に鞭つて波に洗はるゝ濡れ砂に蹄の痕を印し百里觀潮の行をなさんことを思うて已まざる也

百里觀潮の行

▲麥浪を愛す稻波を愛す崩れかゝりたる人波を愛す大火災の焰の波を愛す滿山の櫻花夜半の狂風に捲かれて白浪倒まに天を拍つが如き凄美の觀を愛す而して竟に眞の海濤の天を呑み日を浴するの壯觀に匹敵すべきものはあらざる也

海濤の壯觀

▲海は常に其五洲を包むの絕大なる實體の中に萬物を化して其組織分子となすの大消化力を貯へ其創造の新趣味新思想を漫々たる全面に蒸騰せしめ人の飽迄之を吸收するに任す之を吸收して其創造力を養ひ得ざる者は是醫治すべからざるの病者のみ

海の創造せる新趣味新思想

▲青く深く、想像豐かに、感情高き海の胸は文學の原料に充たされたる大なる倉也其深々暗々たるの底は科學と哲學と神秘との淵叢也

海の胸學問の淵叢

一段沈痛なる氣味

▲海國民の文學は須らく動的なるべし卷を披いて波響の輕籍たるを聞くの思ひあらしむべし一片海國民的意氣即ち世界を家となし波を枕となすの豪爽にして而も激越なる底に何とはなしに悲哀を含むの一段沈痛なる氣味なかるべからず

彼等の海は芝居の波幕のみ

▲方今文學を以て其任となすの徒何ぞ夫れ海と海國民との微妙なる心情的關係を知らざるの多きや海の感化が海國民の意氣と情熱とに及ぼすの心理的狀態に注目せざる者多きは何ぞや海の情、海の意、海の能、海の力、其内容其外形共に自己の情、意、能、力を以て之を測ること無くして唯漠然と海を描き海を歌ふ彼等が所謂海は海にあらずして芝居の波幕の如きものゝみ

海の貢献

▲眞に海を愛し海に親む者は海亦彼に向つて其大消化力其創造力を貢献す

暴風と暗黑の結合力

▲暴風と暗黑とは其結合したる力を以て夜を齎らし來れり

噫！彼は怒濤の響を何と聞きしぞ

是れ未だ曾つて其睡眠を搖かして破裂せしめざりし所也

爰に自己と同質なる元素の怒號に喚び起されて彼の激烈なる心情は激烈なる願望を生じたり

數々彼は奔馬の如き波濤に騎して其快速力を起すの狂暴を愛せしが今又怒濤の亂擊の彼の耳に見舞ふ也

是れ彼が舊知の聲何ぞ空しく彼に近きや

烈風は空に吼ゆ迅雷は之を壓倒して樓を撼かし紫電を窓櫺に射る

實に是れ中夜燦爛たるの星斗よりも更に親愛なる彼の友也

懷かしさ羨ましさ

▲「ほの〴〵と明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞ思ふ」之を誦すれば萬物皆新なるの朝萬物皆清きの海其清く新なるの氣が蒸々として立昇る彼の上に豪爽の意氣を負ひ遠大の希望を懷いて翔る船の帆の薄れ〳〵て島かげに消え行く懷かしさ羨ましさ果ては何とはなしに悲しさ胸の上を輕く撫ぐらるゝか如き思ひあり

海と霧山

▲下界は既に夜の幕に蔽はれて海面は漁火の傾となり今迄淡紫の靄の如くなりし海氣は漸次に濃紺色に變じて大山箱根天城は一刷毛に撫で消され其輪廓を失

ひぬ此時獨り頂部の缺け損じたる三角塔の如き絶大の富士ヶ根は平生より殆んと倍以上の高さを加へたるが如くに見做されて高く其要部以上を地球外に拔き其周圍には恰も佛陀の後光の如く微明を存せり开は空中に置かれたる天の寶藏にして中に藏されたる無數の寶玉が透して光りを散ずるものにあらずやと怪まる。

黑き巖に寄來る波

▲我が足下は水成岩の潮に染まりし黑き巖にして波の寄せ來るさま極めて趣致あり始めは黑朦朧たる物體の海より押し上げらるゝが如くに意識されて漸次に近づき來るがまゝ紫紺色の頭を擡げ夫れが動いて青き閃きを帶びしかと見れば颯と音して白に薄く紫を帶べる無數の尾花の如き物を戰がせ頓て崩れ掛つて巖の根に打ち附くれば其一刹那に波は恰も富士の後光と同じ色を呈する也よく見れば其中に富士の影もある如く思はれて踏める巖の俄に尊くなるを覺ゆ我が髪若し長く肩にかゝりて雪の如き素衣を纏つゝあらば此時恐らくは人目して神となさん。

偉絶凄絶の光景

測り知るべからざるの不安

▲或夕は富士の腰より圍々たる叢雲が湧き出でたり青黑く鋼鐵の如き色にて金色の環を箝めたる半圓形が幾個ともなく重なり〳〵て限りもなく大空に衝き上る也恰も數萬の天兵渾鐵の鎧を着け黃金の兜を戴いて敵に赴くものゝ如く中に勃々たる氣勢を包めり見る間に天の三分の一を占領して富士も箱根も天城も其馬蹄の塵に埋沒せり海は慴伏して呼吸を絶し空氣は重く沈んで死せるものゝ如し實に人をして己れ自身を忘れしめ人生を忘れしめ人間社會を忘れしむる偉絶凄絶の光景也。

▲既にして雲の奔馬の活動は全空の九分九厘を蔽ひ纔に房州の一角に錆びたる鎌の如き色せる半圈の暮天を殘しぬ黃金の兜も鋼鐵の鎧も萬兵悉く油幕の裡に伏して劒氣水の如く海上十餘丈の所を流る海も山も一齊に驚天動地の怒號をなすべく先づ相約して一瞬間の靜默を保てる者の如し其測り知られざるの不安は今將に火蓋を切らんとする大砲に跨がりつゝあるにも似たらんか既にして海の遠鳴り雲に響き其響き再び海に落ちて横さまに我に向つて飛奔し來る忽ちにし

て我が頭は縮む頭を打つの雨點大さ梅子の如し

▲唯天の青きを盛るの大海盤を見るのみ海豚時に出沒し飛魚梭の如し

大海盤

▲會ま陰曆初冬の望に屬し碧玲瓏界に一丸の素月を吹き來る風大に潮盛んにして氣愈々澄み月色刻を追うて白を加ふ船上明かにして銀盤を敷くが如し

一丸の素月

▲中に玉笛を弄するものあり波に激して管破れんとす正に是れ天風海濤樓船月夜の豪興

豪興

▲夜深く月高く風愈々豪也船化して鳥となり空に翔らんとす或は波濤人立して船を凌くこと丈餘。倒れて船に入る銀板の上に氷塊を碎くが如く細片八面に亂飛す亦無數の白鷗の翼を挫きて滾轉するにも似たり

風愈豪也

▲海月銀の如く天地碧なり我頭。天を離るゝこと纔に咫尺。襟懷浩然として宇宙曠かなり風に向つて朗吟すれば聲の白さを覺ゆ

朗吟発白し

▲乾坤清爽の氣あり風の如く動いて我を撲つを覺ゆ

▲淡路島欄に浮んで盆大の黄月斜めに其一角に桂り月の影する所島山虹の如き氣を浮ぶ

島山虹の如し

▲予は未だ曾て如此紫深き天と水とを見しこと無し葡萄鼠とも云ふべき色にて殆んど澱淡無く全面を塗抹し其中火黄色に淡墨を加へたるが如き半圓の月を殘したるの外淡路島も島がくれ行く帆も皆全く紫化されんとして纔に其痕跡を留む此日は秋暑爍くが如き九月初旬なりしかば海面の蒸發の盛なること思ふべし

紫深き天と水

▲濱邊を歩み行く海人の船唄深き林を隔てゝ聞くが如く却つて身に沁むの哀れを催す

哀れの唄

▲海底皆嚴にして水色澄徹能く肉眼を以て百尺の底を見るべく海草動搖して水魔の相鬪ふに似たり一寸ばかりの紅魚が海草の下より躍り出でしかと思へば漸く水面に近く游ぎ上りて二尺に餘れる鯛となる

水色澄徹

▲島の下。水を扨くこと纔に三尺許の巖あり上に裸體の女子の直立せるを認む渾身黎黑にして頭髮海松の如く方に褌を搾りて水を滴らしむ忽ち見る波を拔いて突出する者あり匍匐して巖に上る亦一の裸體女子也予は慄然として六月の寒

女性の怪物

早晩水禽を驚起せしむ

きに堪へざらんとせり彼等は此奇嚴怪石の鬼境に入りて百尺の波底に沒し水厨相鬪ふが如き海草を穿ちて海鮑を探らんことを要する者也殆んと人間に非ずして女性の怪物なる也

▲暗中歩を進むるの路は一條の長堤にして右は海也左は湖也湖天は深沈として左耳を擾すものなく唯海吼の右耳を動かすあり朝寒に堪へずして急歩すること一二町忽ち左方に帛を裂が如きの烈聲を聞く同時に氷よりも冷かにして刀の如く鋭きの氣あり來つて予の左頰を刺す驚いて歩を停むれば湖畔の蘆荻人よりも長きの間五六の生物あり亂鳴して空に騰る隙かし見れば微かに白き其翼の裏面也是れ蘆荻の下に宿せるの水禽が我が跫音に夢を破られて驚き起てるもの也頰を刺して冷かなるは蘆の葉に置ける霜の其翼に打たれて飛びたりし也予は詩趣の動くに堪へず人間生れて旅行の痛苦を嘗めざる者は不幸なりと切に我が天賜を謝しつゝ再び歩を進むるに數十歩にして又水禽を驚起せしめぬ又數十歩にして三たび此事に遭ふ始めて知る予は此道に於ける今曉第一の行人なることを

海情湖心

小兒の如く驚呼す

波濤と暗黑の衝突

▲沈默せる湖の心の寒きを恐れ狂吼する海の情の暖かなるを愛す

▲既にして湖雲に埋るゝの曉鴉を聞く海天少しく白し忽ち路盡きて橋あり一道の海潮は湖心に向つて注入す潮勢急なるが如く橋脚動いて危からんとす橋の半ばに立ちて下瞰すれば曉色稍々水に明かにして三尺餘の大魚十數尾潮に乘じて矢の如く湖中に突進するを見る其何なるを知らずと雖も予は小兒の如くに驚呼して漫に橋板を踏み鳴らしぬ恰も大魚の一隊が東海の温情を齎らして湖心の冷かなるに注ぎしかと覺しく沈々たりし湖面は漸くにして蒸々たる朝霧を醸し來れり

▲俄然一陣の冷風は海を皺めて過きぬ驚いて顧れば岸上砂起つて黄霧をなし既に海驛の百家を失ふ

▲日も早や暮れしと覺しく恐ろしき暗黑は鐵よりも重く厭するに海は之に反抗して物の裂くるが如き凄き叫びを上げ波濤と暗黑と衝突するの所横さまに紫電を走らしむ

幽咽哀切

▲一夜砂頭の古驛に宿す月細く海紫也樓外尺八を吹く者あり幽咽として其哀切を極む

設彩に吝なる海山

▲一たび東京を出て、北に向へば風煙黯慘。山頑に河縱まゝに千里荒涼として又佳景の人を樂しむるあるなし。而も其單調沒趣味にして設彩に吝なる山海の間。百里五十里にして突如として砂漁に含まるゝダイヤモンドの如く暗慘荒涼の風物の底に明麗眼を鮮ならしむるの佳景を包藏せるを發見することあり。

健氣にも游泳する我等を襲する魚の群

▲寧ろ游泳術に巧みなるを彼等に誇るべく脇目も觸れず眞一文字に洋中に突進しぬ。水は冷たき絹の如く心地能く膚を擦り空氣は靈藥の如く肺を清らす。鯛の族にて灰色の皮に黑き縞ある小さき魚の群れは健氣にも我等を來襲する也嘴を尖らして突き鰭を立てゝ刺す也。雪眼鰈と稱する魚の一隊は見慣れぬ赤黑き大動物に撞着して少なからず驚慌を生じたるが如し。隊伍を亂して八方に奔散せり紅色をなせる五六寸の魚は我等の脊上を交叉して梭の如くに飛ぶ。鰺は互に衝突して電光の如く我等の目を眩す。烏賊は我等に握手を求むる水中の怪物の手の如く冷たく柔かく而して徐に觸れ來る。斯くて網は近づけり

余り痛快にして氣味の惡さ程也

▲快きこと限り無き儘益々突進して遂に網の輪を乘り越えたり。一刹那の感覺。生來未だ曾て感覺せざる所にして亦求めて經驗せんとするも得べからざる所也。實に餘りに痛快にして氣味の惡き程なりき。大小數十百の銀鱗は潑溂として空裡に相觸れ雪の如く頭を撲つて來る。又十面より敵人に包圍せられて及の雨を浴びるが如し。水中の魚は相寄り相重なつて我等の體を撐へ百千の手もて搔かれ櫟らるゝに似たり。何かは知らず蛇の如く足に捲き附く物あり。又河童の如く襲ふべからざる部分を狙ふ物ありされど要するに我が腹に葬らるべき魚以外の物にあらじと思へば之が爲に生ずるは惡感にあらずして快味也

不穩の氣配

▲南風やゝ強くして夏乍ら波音高く空には火花を散らしたるが如き雲走りて何となく穩かならぬ海の氣配也

裸體を打つの海泡

▲衣を脫ぎ棄て腕を組みつゝ波打際に降る濛濛として目に何物も見えず霏々としてゝ裸體を打つは海泡の雪となつて飛ぶもの也

波の粉末

▲巖上に並び立てる二人の姿が朦朧として霧を隔つるが如くに見ゆる程碎けて散る波の粉末は深し

波と人との戰

▲大瀑布布の如く崩れ來る白浪の中をば頭を鋒となし身を柄となし五體を一條の戟となして唯一突に突き拔けたり

同

▲眼前咫尺波頭隆起して蒼黑の顎。雪白の齒を有せる巨口となり我を載せたる波は舌の如く其中に捲き込まれぬ

哀れな話

▲伊勢の海の潛女の名は古代の大和的詩人の好題目なりき乳呑兒を舟に寢かして潛るに兒の目覺まして油く聲。母たる者の耳には十尋の底迄も聞こえ慌てゝ浮び出て藻のからみたる濡れ髮を拂ひも敢えず乳房含ましむるなど哀れな話多し。

孝蟲種屬

▲海國民は獨り波上に浮ぶことを能くするの民にあらず　〻て能く鯨鰐と共に波間に戯遊するの民也能く黿鼈と共に潭底に潛入するの民也陸上に於ては盛んに空威張りをなすも水に遭へば忽ちブク〳〵と沈むもの之を芋蟲種屬と云ふ芋蟲種屬の多きは海國の恥辱也

淡墨の痕

▲帆は檣に粘して離るゝことを厭ひ船は睡を貪りて進まず海波平かにして湖の如く烟霞繚繞岸頭の林丘皆薄紗を隔てゝ立ち長汀曲浦絶て淡墨の筆痕に濕ふ微雨の天よりも靜かに。人を倦殺するの日なり

鯨を食食し去る鯨の壯觀

▲灣內の水は大釜の湯の沸るが如くに盛り上りて渦を捲きつゝ外に崩れ其崩れたる跡には更に大なる銀塊の如きものあり盛り上りたり銀塊は日に映じて眩ゆきばかりに輝けるよと見る間に恰も爆發藥にて打ち碎かれたるものゝ如く其究無數の細片を八面に飛散し灣頭の空氣は一時光の霧となりぬ……無數の白銀の細片を紛として霧の如くに任せて盛り上りたる水は更に高く盛り上り灣口に當りて水の山を起したり幷も亦一瞬にして山は忽ち二つに割れ蒼き波の上に雪崩れを打つて白き波の走れると共に割れたる所に大なる黑き巖の如き物を露はしたり而して又忽ち沒したり其沒すると共に今迄盛り上りたる水は下より吸ひ込む者あるが如く層を減じ見る〳〵水平に復しぬ是れ鯨が鰐の群れるを灣口に

漁撈は詩的營業也

吾氣を豪にするの遊樂的勞働

究進し縦まゝに之を貪餐して去りたる也

▲漁撈は海國民の生業の隨一にして生産的事業の中最も爽快なるもの也是れ單に人類が衣食の爲にするの勞働なるのみならずして亦實に精神身體の高尚なる訓練法也詩的營業也人生俗に雜して平なるを得ずんば簑笠漁に隱るゝも亦風流なりとす扁舟を家となし江湖に漂蕩し一竿の風月王侯を釣るに意無く魚を穫て酒に換へ又飯に換へ微醺飽啖肱を曲げて盧花の下に臥し顧みて他の塵中に役々たる者を笑ふ自ら以て海國民たるの大領を失はずとなす矯なりと雖も亦可ならずや

▲漁業は單に痛苦なるの勞働にあらずして少しく勞力を加味するに過ぐるが如しと雖も亦一種の遊樂たるを失はざる也漁業の遊樂として優れる所は意氣を豪にするに在り心胸を快ならしむるに在り精力を養ひ元氣を充たしむる其効果なりとす板一枚下は地獄也故に彼等は必要に迫らるゝ所平生に於て死生の問題を研究して極めて單純なりと雖も其期に臨んで取り亂さゞる一種の諦らめを附け置く也彼等が敢て冒險を行ひ嘗て冒險を以て其趣味となすに至るもの要するに此諦らめより來るの結果なりとす

魚の都府の衰微

▲魚類には魚類の自覺ありて人に捕へらるゝの危險多き所には漸々接近せざるに至る也今日東京灣内に大漁業の行はるゝは人間の都府の發達する傍に於てはそれと逆比例をなして魚の都府が衰微するの必然的法則に支配せらるゝものゝゝみ

荒削りと彫刻

▲日本海は大陸より大島を分離せしめたる大仕事師なれば手腕粗大にして斧を用ひ荒削りをなせしが如き痕あり莽蒼跌宕也鬱濤荒凉也。風光人を傷ましむるに足ると雖も毫も樂みを與へざる也而して西伯利亞を渡り來る寒冷の風は殆んど日本海岸の景色より美彩を奪ひ盡さずんば止まざらんとす之を瀬戸内海の較や小細工的にして繪畫の如く彫刻の如く中に無數の島嶼を含み山陰山陽の脊梁山脈が日本海の冷風を防ぎて常春の温暖と湖水の如き平和とを保たしむるに比較し來れば到底一の地理學的作用に結果したるものと信ずること能はざる程也

鬼火亂點
默堅と氣焰
仄かなる入江
意味深き美
餘りに鮮明に失し

▲夜深く風益々加はり天地黑暗。波濤人立。海魔空に嘯き鬼火亂點す

▲渡船の着いたは丁度島の懷に當る所で肩に上ぱり脊梁を渡り腰を下りて草花の模樣美しき其裾に出た此所は燈臺の後に當る波打際で海水の浸蝕に成れる黃色の巖は百千の牛羊爭うて水を飲むが如き態をなして居る波と巖の外は何もない大きい富士が近く點座し小さい大島が遠くで氣焰を吐いて居る

▲入江の中の如何に穩かなるかは水際迄芝生になつて綠の絨緻に腰を掛け乍ら潮水に足を浸される

▲入江は風柔かに霞深く萬物皆疲れて睡るやうな、岸の芝生に咲く一本の蒲公英に二羽の胡蝶の戯るゝ態のみ廣大なる天地に於ける唯一つの活動として見らるゝ春の日に其淋しさ悲しさの意味深き美を表はす若し男子の青春に於ける淋しみと悲しみを語るに足るの人があるならば、それは此入江の神を女性にした者だ。

▲入江の曙を見に行た昨夜少々雨が降つたので景色が餘りに鮮明に失した鮮明

たる光景
若き希望の光りが一杯
一年一度の靜和

と云ふ形容詞の裡には單純と云ふ意味が籠つて居る入江の特色たる淋しい味悲しい味の底に深く包まれた美は空氣の澄み切つて透明な日に見出されない但し入江に注ぐ流れ緩き小川の岸に山吹の花の咲くのが見えて水に流るゝ黃色の花片が極めて鮮やかに目に映じ遠く〳〵海に趣く迄見失はれなかつたは今朝に限つた趣味のやうに思はれた

▲曙の朱鷺色の幕の彼方に隱れ去らんとする明星は幾たびか自分に目くばせした海にはまだ動物の呼吸に汚されぬ清新の空氣が一杯に充ち空にはまだ陰雲の妬みを受けぬ若き希望の光りが一杯に滿ちて居る

▲東北部日本は猶ほ後れ咲きの菖蒲公英に征途を狹められて行人よりは全く胡蝶が多いのである菖蒲公英の領地の外は滿眼濱茄子てふ薔薇科の灌木其紅は薔薇より鮮かに、其香に薔薇より柔かである、さうして濱茄子の外は心騷がしき日本海が一年唯一度の靜和を示す時で靑波の底に鯨の母の睡つて居る有樣、目に見え透くやうである

海國の長所短所

▲海國民としての日本人の長所は、怒濤怪巖を打つて倒まに雪花を吹くの態にして其痛裂にして爽快なることは物の比すべきなしと雖も唯是れ巖と濤と相打つ一時の壯觀にして、徒に人目を驚かすのみ濤の退きたる跡を點檢するに毫も嚴容に異狀あるを認めざる也、要するに日本人の不幸は、其餘りに善美なる國土に生育せる事也、其餘りに佳適なる氣候に沐浴せる事也、善美なる國土は、彼等をして母國を離れて第二の日本を建設すること能はざらしめ、佳適なる氣候は、彼等をして一時に鋭敏にして耐久の堅忍を欠かしめ、徒らに世界無敵の武力を閑却して、三千年間東海の孤島に蟄居せしむ

壯なる哉海賊の歌

▲渺々たる碧海の上我思想は無涯にして我精神は自由也軟風遠く吹きて見渡す限り波浪沫立てり、こゝに我等の帝國を眺め我等の家を望む是れ我等の領土にして版圖際限なし、我等の旗は凡て遭遇する者に向つては君笏也誰か服從せざるものあらん、我等の生活は喧囂中に於ける粗宕の生活にして、而も勤勞の後には休息あり、變化毎に喜悅なり、誰か我等の性樂を知らん、汝等波に頭を病

ます驕奢の奴輩の知らざる所、汝等安逸放恣にして、睡眠も以て息ふ能はず、性樂も以て樂しむ能はざる虛飾の輩の知らざる所、誰か我等の快樂を知らん、たゝよく其心膽を試錬し、渺々たる海洋に在つて精神踏躍し、感覺昂騰し、脈搏鼓動し、以て其精神を旺かんにし、好んで近づく所の戰鬪を求め、人々等の危險とする所は却つて之に喜悅を感じ、怯懦なる輩の避くる所は、非常の熱心を以て之を求め、薄弱なる徒の氣絕する所は、よく高漲する胸臆に於て中心之を感じ、其希望は覺醒し、其神氣は舞揚する者のみ我等の快樂を知り得ん、死何ぞ恐れん我等の死する時は敵も共に死する也、死は睡眠よりは聊か趣味なきものに過ぎず死來らば何時にても來れ、我等生命の生命は手中に之を有せり、若し放ちて之を生かしむるも病苦と紛爭との外何者か之を顧みるものあらん、彼の衰殘の身に戀々して匍匐せる輩は、其病床に執着して數年病み續づけ、重き呼吸を爲し、痳痺せる頭を擡げつゝ死せしめよ、我等の床は新鮮なる浪花飛玉也、熱症の床にはあらず、彼等の死するや一呼吸一喘息其靈魂を放失すと雖

も、我等は一苦痛一飛躍以て死苦の制御を脱す、彼等の屍體は美しき葬壺及狹隘なる窖を誇り、彼等を憎惡せる僞善の人等は飾りて彼等の墓を輝かすと雖も、我等の死するや太洋は我等屍體の蔽布たり、又墳墓たり、我等の爲めには人數はたとひ少しとも、流す涙は皆眞心より出づるもの也、我等勝利して獲物を分配する時、死せし勇敢なる友等今若し生きてあらんには如何に喜ぶならんと叫び、各々顏見合せて悲しき記憶を喚起する時、我等は宴席に於ても尙其記憶を飾る所の紅の酒杯中には、友人の死のかなしき追悼の意、及び危難なりし日の簡單なる碑銘ある也

波濤はそれ墓歌乎

▲大洋爾の波濤はそれ猶墓歌の吟ずる如きか、爾の深窗なる膝の中に於て、動きて已まず綠にして變せざる者は潮と爲す、潮の丘の下に眠らしむる者は是れ墓歌なり、爾の既に歌ひ去りし者は、知らず幾千萬人なるを然れども爾も亦驚くべく敬すべき者あり、彼の海面熒るが如く、微風動かざるの時に當り、既に靜に且つ寂にして、猶ほ華囊澎湃の音を聞くものは、神明の精魂水波に憑りて而して然るか噫孰れか其由りて起る所を知らん

夏時海岸に移るは人間の本能也

▲夏來りて、吾人は一年間の正直なる勞働に依りて、等しき休暇の賞を得たる時、吾人は本能的に海岸に移轉す、吾人は常に海の空氣の甘き香氣、波の囁き、波に舞踏る眞砂の音、海鳥の聲を追求し、又海の微なる接吻に胸を躍らし、輝く眞砂にて敷き詰られたる海岸に逍遙せん事を切望するもの也

陸に有せざる美麗なる

▲嗚呼如何に海岸の美はしきかを見よ、純白なる白堊岩、赤き砂石、石或は嚴めしき灰色の花崗石の崖の下に處々に僅かなる美はしき海草を撒布せる砂礫の海岸は横たはる也、波は音靜かなる海岸に打寄せ、其岸邊に達するや、各白き或は微弱なる石竹色の泡沫を以て淸く、凉しく透明なる綠色の水の曲門を作る、而して彼邊の大洋は日光に輝きつゝ横はれり、嗚呼愉快なる海よ、陸地は海の如く、かくも無限なるかくも美麗なる野を有せざる也

狂氣する程に麗なる海

▲海は實に時に狂氣する程に美麗なる事あり、朝夕に於ては、海は一面の活ける金銀の如く、日中に於ける海に濃き藍色を呈す、而かも餘りに藍色は濃く、

あまりに美麗にあまりに輝き居るが故に、今一點の雲影の何處かに一時の暗蔭を望まざるを得ざらしむ、晴快なる夏の日、海岸よりも美はしき光景は他に殆ど之れなし、波浪は日光に照り輝き、天空及び海水共に一層青く、而して海は恰も砂上に遊ぶ子供等と共に笑ひ遊び戯むる事の外は何物をも有せざるが如くに見ゆ、子供等が鍬及び手桶を以て勤勉に忍耐強く城壁を造れば、波は忽ち來りて之を洗ひ去る、かくて夕方となり子供等は皆我が家に歸る迄繰り返し卷き返し、同じ事を爲して遊べり、而して子供等の歸りし時には、海は萬物を平滑にして翌日の遊戯の準備を爲せり

巡洋航海

▲多くの者は海岸を賞讃して滿足せり、されど或者は更に慾心を逞ふして巡洋航海を選ぶあり、彼等はテニソンの書きし「航海」を實現せんことを望む也、港口に動搖する塗られたる浮標を後に殘し、南方に向つて速かに飛び行く時に吾人の心は狂氣せるものゝ如くに喜悅を以て踏る也、陸地或は曲がれる海岸に見るもの聞くもの、凡て新奇ならざるはなし、吾人は此樂しき世界が圓き者にして永遠に航海し得るものなることを知れり

海は時以上のもの也

▲海は實に時以上のものたり、千年萬年百萬年以前の昔に於ても、尙海は今日の如く見えしに相違なし、思ふに今後も亦然らん、山野谿谷、河川及び動植物は絶えず變化せりされど海は始終同一にして幾年を經るも同じく强固に活動す

休息なき海

▲湖水の特質は平和也、海のそれは一大勢力也、常に休みなく而も疲勞する事なくして動きつゝあり、地は眠れる小兒の如くに靜かに横臥し、天は常に靜穩なるに海のみ唯獨り夜を徹して休むこと無し

偉大なる立派なる表象

▲暴風雨の際に於ける湖水は、或惡魔に依りて惱まされたる美はしき水の靈の印象を吾人に與ふ、然れども海に於ける暴風雨は自然の最も偉大なる立派なる表象の一也

大詩人に極力描寫せられたる海の暴風雨

▲海の暴風雨に就ての最も活氣ある記述は、ラスキンの言なるべし、曰く甚だ少數の人は曾て間斷なく、三四月間晝夜續け通しに荒れたる力强き大風に於ける海の結果を目擊せり、而して此凄まじき光景を見し事なき人には思ふに想像

だも及ばざる所ならん、更に大浪や、海と空中の境界の光景のそれにても迚も想像し能はざる處也、長き激動より來る水は、單に泡沫となつて碎くるのみならず、堆積せる泡沫は塊を爲し、其塊は又波に依り碎かれて紋布の如き色彩を作る、此等泡沫の塊は塵埃の如くに斷片を爲してに非ず、塊の儘風に依りて空中に取られ、降雪の際に如くに是れが爲に空中は眞白にせらるる也、一片の塊は一尺より二尺に達す、大浪は自から泡沫を以て滿たされ、大瀑布の下にある水の如く全く白色也、面して其大浪を形成せるものは、半ば空氣なるが故に其起るや忽ち風に依りて片々に碎かれ、恰も活ける水の如くに怒り爭へる怒號せる水煙中に運び去らる、之に加ふるに長き降雨に依りて空氣の含有せし濕氣を盡く費やせし時、水煙は空氣に依りて捕へられ、面は全く霧を以て蔽はる、又海面に最も接近して來りし低き雨雲を想像せず、此等の雲は余が屢々見し如く波より波に片々となして飛び、而して終に其中に大浪を捕へて、空中高く或は山嶺に上り行く、かゝる有樣なれば、海と空氣との間に判然たる區劃のなき事

勿論也、又地平線も或は陸上の如何なる目標も或は自然物に依れば、位置の置處も何物をも見るべく殘されたるもの無し、天は全く霧を以て閉され、海は全く雲を以て蔽はる。

▲珊瑚島は實に多くの注意を引けり、而して何人も其直徑數哩に及べる此等の大なる珊瑚島の一つを見る時に驚愕を以て打たれざるもの無し、而も其此處彼處に白き砂の海岸の間にココア樹の茂れる樣及び外部は大洋の立つ大浪に依りて洗はれ、內部は反射に依りて普通青白き綠の色を呈せる靜穩なる廣漠たる淺水によりて充たさるゝを見る時は、何人か能く驚愕を禁じ得んや、博物學者は此等の明かに瑣々たる珊瑚虫の柔軟なる且つ殆んど膠質なる躰を檢査せし後、及び此固體の珊瑚礁が決して少も休む事なき大洋の波より晝夜激しく衝き當らるる外部に向つてのみ增加する事を知る時に一層深き驚きを感ずべき也、礁湖の人をして恍惚たらしむる美觀は、如何なる言葉も之れ無しと云も可也、此等仙境の植物は、又更に愛すべきものなり、光澤ある綠の葉、及び眞紅の花を開

く珊瑚樹あり、椰子樹は常に美はしく、ばらみ、なしだ其由種々なる美麗なる花の咲く草木あり、其外名前さへも知れざる多くの美はしき草花ありて一層の美觀を添ふ

南方の空の美

▲熱帶地方に入りし時より、吾人は毎夜南方の空の美を賞讃する事に於て、決し倦を起さざりき、而して南方に進むに從つて、天は吾人の前に新たなる星座を開けり、吾人は赤道に接近する時に殊に一半球より他半球に移り行く時に、實に云ふべからざる一種の感を起す、吾人は幼時より熟視せし星の漸々に沈み行きて、終には其姿を匿すに至るを見たりき、實に旅行者の腦中に起るものは、彼本國より離れ居る大なる距離の記憶及び未だ曾て見ざりし蒼天の光景の新奇のみ、第一等星の群、其立派さを銀河に競へる星雲、其暗黑の爲に生ずる著しき空間の區域等は、南方の空に獨特なる觀相を與ふ、南方に於ける此光景は精密なる科學の智識なきものにも賞讃を以て滿され、且又陸の景或は風ある河の景に於けるが如く、天空を熟考するに於て喜悅の感を起す者也、旅行者は植物學者たるの必要なし、普通の人と雖も、植物の有樣を一見して直ちに熱帶にあるを思はしむ、又天文學に就き如何なる概念をも有せずして、尙彼はシップの大なる、星座或は燐炎を放つマゼラン星雲が地平線上に上る時に、其身の歐州に非る事を自覺す、實に赤道地方に於ける天地は、外國の性質を明に證明する者也

東方多島海の風景

▲東方多島海に於ける風景は、生涯忘るべからざる者也、群島の頂きは平靜なる金の如き海上に露出して西南に延び、其處にて太陽は沒す地平線上には灰色の羊毛の如き雲、種々なる形狀を爲して横はり、其上には青雲の路をなせるあり、太陽の漸次深かみに退却するに從つて、こは驚くべき金の窓掛となり、其前面の灰色の雲は、漸次空間に消え行く前に不思議なる形にて渦卷きたり

川と水

山の壓抑……深潭と猛鷲の巣……絶えて夏なきの處……水面の大渦紋……兩涯の對照一幅の活畫……間斷なく奔る雪崩……瀧を下るの大筏……激流が生み出した倔强の舟師……鰥を突く河童の兒……七月尙寒し……美人の乳の上に囁く早瀨の水……船の生活……水と空とに縫目無し……惱りを帶んだ厭世家の面のやうな景色……林間の泉水……饒舌なる谿間沈默なる深淵……萬水雪出より落下す……不思議なる水の力……吾人の想像を迷はす水邊の動物……一滴の中に藏せられたる秘密……湖水は流動體の寶石也……川源より海に至る興味……河は最後の勝利者……溶角せる氷河……川は山よりも古し……水の速力……地を堀る恐るべき力

▲山大抵骨硬、終古水と苦鬪して分毫も讓歩する所無く、水は百折千曲して常に山の壓抑を逃るゝに忙はし、水の淸きは底に泥なきが爲也、底に泥なきは流れの駛きが爲め也、流れの駛きは傾斜の急なるが爲め也、傾斜の急なるは山の壓抑多きが爲め也、故に其曲折して山石に圍まるゝ處必ず滯りて十丈の深潭を

山の壓抑

爲す。

▲七座の石峰七曲をなして川を繞り、厄うして屏風を立つるに似たり、中腹以上は皮肉鎖磨して肋骨を露はし、巉として攀つべからず、巖際に猛鷲の巣あり、時に出でゝ山雲を搏し、或は糞を石頭に落す、其響きや磬を打つが如く滿山の森寂を破り全潭の魚龍を驚かす。

▲二千年に近き古廟と、神靈の石殿たる七座の峻峰とか、一は歷史を以て一は實體を以て、互に肩を聳かして對峙する處、中に開闢以來日光を見ざる部分あり、其處に潭あり、全山の靈怪幽暗を吸收して深底に蓄へ沈々として空しきが如し、水魔水妖の集まる處也、大魚長龍の潛む處也絶えて夏無きの處也

▲山骨水に入りて幾百仞、水底三四丈の部分に別に山骨より噴出するの活水あり、其小なるものは水面に何等の徵候を現はさずと雖も、大なるものに至りては直ちに向上して鑵水の沸騰するが如く水面に隆起し周圍に大渦紋を造る

▲御嶽山を下ること五十六町左右が拔いて頭の上の天が廣くなると一幅の活畫

猛鷲の巣

絶えて夏なきの處

水面の大渦紋

兩岸の對照一幅の活畫

間斷なく奔る雪崩

は開展される、多摩川西から來つて北に曲り、流急に崖高くて兩岸の住民の交通を妨ぐる處に、脚の無い猿橋式の長橋が、虹の空裡に横たはつて名さへ高橋と呼ばれて居る、右の岸は劒を植えた樣に尖つた杉の木が、幾百本と無く重なり重なつて一大杉の木の樣な形の山を成し岸に沿ふた一帶の人家は之に壓せられて平たくなつて見える、左は又較圓みのある雜木山で早や四分の紅を潮し其間に包まれて居る茅屋は如何にも安樂さうである、兩岸の對照が極めて面白い

▲數日前迄降り續いた霖雨の名殘は、猶ほ多摩の上流を平生に倍する水嵩にして、橋下數丈の處を間斷なき雪崩が奔つて居る、俯せば目の舞ふのみでは無い、餘りに空氣の震動が激しい爲に、橋臺が唸る樣な響を發する着物が下から上に捲れる久しく立つて居るに堪へぬ

▲橋から上二十間ばかりの處に、河床が急勾配をなして瀧の樣に水の激して居る部分がある、其處へ杉丸太を組合はした大筏が降つて來た自分はどうしてあの瀧の樣な處を降るであらうと、恐い樣な面白い樣な一種の思ひに胸を轟かして橋板へ釘附けにされた樣に立停まつた筏は面積八坪ばかりあらうと思はれる長方形で上に後鉢卷の男が五人突立つて居る、何れも紺の筒袖の半纏に同じ色の股引を穿いて、二間ばかりの細丸太の皮を剝ぎたるを棹にし、前には丈高く骨聳えた倔强の若者二個打並び、中には肩幅廣く色鐵の如き鍛へに鍛へた五十餘りの老夫一人八方に眼を配り、後には矢張前のに劣らぬ壯漢が前の樣に打並んで都合三段に陣立して居る、其排列の規律正しく、其身構へ腰の据りの格好よく氣力の充滿ちて居ること殊に其皮剝ぎの杉丸太を、四方上下縱横自在に運用する、手の早さ、極りの好さ、互に交叉して種々の幾何的な形を作る面白さ、キビ〳〵と一々胸に應へて、名人の踊りを觀る樣な心地である、筏は何の疑議もなく瀧に掛つた、人皆棹をねめて脇に挾み、自然に任せて此難關を通過するのである、見る〳〵筏は横に二つに折れた樣になつて、瀧の下なる水渦を捲いて泡沸くが如き處に突入した、人は膝迄其泡に沒し渦に捲かれて、飛沫は人程の高さの虹を描く

瀧を下るの大筏

激流が生み出した怪強の舟師

▲アッと思はず瞬きして再び開けば、瀧は早や後になつて、筏は物に彈かれた樣に橋下へ盲進する、五人の男は腰を屈め股を開いて身體の重心を保つ、眞上からそれを見降すと、平蜘蛛の如くに見える、忽ち橋の下に隱れたので、反對の欄干に身を向け換へると、筏は既に橋を過ぎて下流に出づること四五間、息を繼く間もなく、第二の急流と恐ろしき巖に迎へられた、平蜘蛛の如くになつて居た五人の男は、俄に伏兵の起るが如くに躍り上つて、水に濡れた棹をキラ〳〵と日に振ふかと思へば、筏は燕の如く飛過ぎて見えなくなつたそれより一時間ばかり經つて、自分は路の上で五人の男に逢つた、肩に掛けた棹の端は皆鮫の如く捌けて居る、彼等は其送るべき地に筏を送つて、陸路を山中の家に歸るのである

山の握手を妨くる水

▲相喚び相答へて、双方から握手せんと近寄る山と山を、無理に二つに裂いていけない、いけないと叫んで居るのは水、多摩川も御嶽山の下迄來て見れば、天に連る綠の底を、さながら一條の雪崩が奔つて居る樣である

鰍を突く河童の見し

▲一の華表と附近の民家を小高い岸の上に見て、水の上に背を現はした大岩壘を敷けば其壘を受けて尙ほ餘りある程な奴の上に、子供の着物が三枚とそれに對する紺木綿の兵兒帶が態と天日に晒らして置くもの〻樣に脱ぎ散らしてある、主達は何處かと見れば、其岩の下の日が當らぬ、涼しさうとよりは寧ろ冷たさうに見える處に、無論赤鰍で手んでに細竹の柄のすがつた銛を持ち、水底の石の間に潛む、鰍を突き刺しては、あたりに咲いて居る皷子花を無慘に引きぬいて、魚の鰓から口へ其蔓を通し、捕つた數を比べて互に甲乙を爭ふて居る

七月尙寒し

▲七月半ばの暑き盛り、此別天地でさへ、岸の上の路を行く者は、日に燒けた岩が吐き出す熱氣に蒸されて、流るゝ汗を拭ひ切れず、清水湧く樹蔭を望んでは走るのである、けれども鰍を捕る子供等はそれと反對で、寒くて堪らなくなると着物を脱いで置いた岩の上に這ひ上り、龜の子が甲羅を乾す樣に背を日に晒していゝ加減に温くなれば又水へ降立つ

▲オイ見な變な奴が來たぜと、三人の中一番大きい十歳ばかりの子、野蠻人の

鉾の先から多摩川上流の清い水を震ひ落しつ

裝飾の樣に、皷子花の蔓を花込め葉込めグル〳〵と頭へ捲き附けたのが、左に五六尾の鰍を蔓へ通したのを提げて、鉾を斜に持ち添へ、右の手を鼻の先にかざして、水から來る日光の反射を防ぎつゝ叫んだ、あとの二人の子の中、餘り色が白くない方の一人は、岩の狹間に追ひ詰めた大鰍を打棄てゝ、水の中から鉾を引き拔いた、『ドレ何處に』？　殘つた一人、全身雪の樣に白くて、肩から背に掛げ皷子の花程の赤味に日に燒けた八つばかりの子は、得たり畏しと、今其仲間が鉾を引拔いた跡に自分の鉾を挿込み、底に吸ひ附いた樣になつて、岩と同じ色の背を見せ充分に隱れ了せた積りで居る鰍をば、息を殺して一心に狙ひ始めた、鰍は珍らしく大きい、是れ一つ捕れば他の五尾に敵するに足るのである、『健ちやん見ないか、變な恐い奴が來たぜ』と云はれたが見向きもしない、『モウ止して着物を着やう』二人の子は痛に物に怖ぢた態で、慌たゞしく大岩へ這ひ上つた、『待つて呉れ、あたい一人置いてくと肯かないよ』と云ふより早く、グット突込んだ鉾の柄が微かに搖つた、『萬歳！』といれしげに呼はつて、引き

案の煙舟の煙

美人の乳の上に喘ぐ早瀬の水

拔くや否や高く差上げた鉾の先から、多摩川上流の清き水を震ひ落しつゝ、キラ〳〵と日に輝く山の魚、長さ凡そ六寸ばかりはあらう

▲時は今晴れたる夏の夕暮である、眺へた樣な涼風は、丁度川幅だけの幅を有つて、高く峙つた兩岸の間を靜に通つて來る、岸の上から山の半腹迄段々に位置を占めて居る百姓家が擧ぐる煙は、幾條の青白き直線を山よりも高く立てるのに、此船の屋根の下から漏れる細い煙のみ、唯一條横に川下に靡いて居るのである

▲島村は着物を脱ぎ棄てゝ其血氣の美しい立派に筋肉の發育した躰軀をば、淘然とばかり潭の正中に投じた、湧き立つ水玉の白きを殘して、沈んで暫く見えなかつたが、思ひ掛けなき艣の方に首を現はして、次に其石の手が擧つたと思つたら、一搖れ船が搖れて、矢を射る如く二間ばかり水を切り、がりゝと砂に食ひ込んだ、固よりこんな事に驚く瀧子でない、途端に心機活動して躰は意に隨ひ、蹶然と立つてパラりと帶を解き落し、裾を踏んで着物を肩から滑らせる

や直ちに、水煙を蹴立てゝ多摩川の淺き砂に走つた、一と息繼ぐ間もなくべツタリ座つたので、早瀬は其肩に激し、其乳の上に囁いて居る、之を女神の如き人間以上の者と見るは無理であらう、けれども、多摩川の精氣が凝つて成つた凄く美しい水魔と見るに差支へはあるまい……清さ冷さが骨迄泌み渡つて、凛と容が引締まつた男女は、固く帶を結んで再び舟の中に對座した、夕靄は布を施いた樣に川と並行して、寧ろ之も空に横ふ淡き川の樣に見える、靄の下には燈火が點々と現はれても、靄の上はまだ夕燒の名殘を留むる扉に農馬の嘶きが聞こえる、淵は頻に其底から闇を吐いて、舟もモウ燈明を點けなければならなくなつた。

舟の生活

▲水に棲む魔性の者と見られてから、四日目、島村の屋根舟は羽田迄降つた、水靜かに岸平かで、五日ばかりの月は低き空に霞んで居る、岸の上も水の中に遠い海の冲も、同じ高さに燈火が散らばつて、歌ふ聲、笑ふ聲航の音、下駄の音、凡ての物の響と色は、互に親しげに相關聯して居る、屋根舟に點る小さきランプも、島村と瀧子との低き話し聲も、此親しげなる景色を作るの一要素となつて居るので、青梅から上の急流に浮んで居た時に比べて見ると、舟の生活が餘程味ひを帶んで來た、莫物なら今や七八分に熟して來た

水と空とに縫目なし

▲靜な夜の水に驚きを與へて舟は東京灣の中に進み入つた、平かなる入海は一盃に星影を盛つて、空との界に縫目なく、飄々として天上を行くの思ひがある

慍りを帶んだ脈世家の面

▲夜乍ら白く見える薄雲は星空の半ばに帳し、水の上の景色は慍りを帶んだ脈世家の面の樣になつた、何處ともなく涙を含んだ笑ひ聲の樣な流笛の音がする

▲小男は耳傾けて莞爾と白き齒を露はし、砂に突き立てた棹を引き拔いて、丁と舷をたゝきつゝ一種の節ある口笛を吹き鳴らした、其聲は云ふべからざる悲涼を帶んで、風の如く水上に動くのである

林間の泉水

▲林間の泉水は潺々として流れ出で正に琴筑を鳴らすが如し、其傍らに座して小濤の謳ふを傾聽するものは幽靜(擬人)也、其歌ふや溫々として喜ぶが如く、依々として親むが如し、而して樹橋の上に居り、間關たる音を以て、之と相和

鱗沈深淵なる澤潤　鱗舌なる

不思議なる水の力

する者は禽鳥なり

▲山中の谿流は石を走り巖に抵り、淙々然たり瀧々然たり、方々在々、一波は一波に語りて曰く、某の物を見ぬ某の岸と某の花とを認めぬ、某の景は我と相逐りて、而して終に復た之を失ひぬと、其鳴るや嘵々として童兒の饒舌に似たり、其聲休まずと雖も、機心あるに非る也、抑も此饒舌なる谿間も深淵の納むる所となれば、其默々を學ばざらんと欲するも得ざる也、深淵の容は湛然として靜に處り窅乎として默を守る、然り而して兩岸之に映じ蒼天之に落つ、是亦奇也、汪然として直奔し猛士の敵に赴くが如く其威勢を有し、滔々として海に注ぐ者は長江に非ずや、彼の萬水雲山より落下するに方るや、其奔騰を極め戰歌の起るか如く、軍謠の發するが如し、掠亂の及ぶ所、陵を壞り、陸を浸し、雷轟霆擊以て大洋に投じ、礁岸之に觸れて、而して銀山を見はし砂漠之に震へて而して乍ら動搖す

▲昔時の傳說に流水は、有ゆる妖術及巫術以上の者也と云へり、如何なる符呪、

吾人想像を迷はす水邊の小動物　一滴の中に厥せら

魔術も活ける潮、突進する流水を止め能はざれば也、此概念の中には美と等しき多くの眞理を有す、且つ又盜るゝ水は汚物を一掃する力を有するのみならず、又腦中の欝を散じ、吾人をして健康と力とを回復せしむ、氷原、氷河、山に於ける急流、渾ける小河及廣大なる河、沼、湖水大洋自身も凡て同樣に此不思議なる力を有せり

▲吾人の目にはよくは見えざれども水邊の動物も、亦吾人の想像を迷はすもの也、實物よりも寧ろ影なれども、吾人は此邊彼邊に淸き水中に靜止せる斑點ある鱒を目擊す、或は淺瀨を橫切りて突進するを見る、時に又吾人は游泳しつゝある鴨、鴛鴦を見るべし、或は枝上に止り、或は電光の如くに閃く翡翠を見るべし、又壯嚴なる鷲の汀に立てるを見、或は其大なる翼を羽ばたきしつゝ徐に立上るを見るべし、小さく愛らしくして且つ美麗なる水鼠は至る所に存し、又獺の出入をも見るを得べし

▲綠の水草の或莖に依りて橫切られたる、水の一滴中に橫はる此不思議なる有

れたる秘密

機體を見、或は其行動に於ける文法よりして或觀念を推察し、或は針の尖程の小なる點を自由に游泳する微蟲を見、或は種々なる色を以て閃く其背鎧、其動搖せる睫毛の微光を以て輝く其頭を見、或は水草の莖を滑べり、其食物を探し求め、其餌を奪ひ、或は敵より逃れ、其友を追ふ樣を見、蟲自身の音樂に連れて狂氣染たる舞踏をなすを見、又其生活の如何にも幸福なるを見ば、誰か此光景より離れて單に書籍或は繪圖にのみ滿足するものあらんや、必ずや彼が後に殘せし凡ての不思議なる世界は常に彼が眼前に彷彿たるべし

湖水は流動體の寶石也

▲湖水は河海よりも更に靜止せり、河は暫へ徐々たりと雖も常に流れつゝあり、海は時々暫時靜止する事あれども、普通活動と勢力とにて充滿せり、然るに湖水に至りては、恰も眠りて夢みるものゝ如く、美しき景色に於ける湖水は美しき衣服の銀の裝飾の如く、或は美麗なる日沒に於ける流動體の寶石の如く、或は愛らしき顏の輝ける眼の如し、實に吾人が小山或は崖より湖水を見下せば、或大なる青色の水晶の如く、殆ど固體の如き觀あり

川源より海に下る興味

河は最後の勝利者

▲其源より海に至る迄、河を辿る事は實に愉快にして且つ興味あるもの也、ジーキ曰く山の頂上より下る時に、吾人は先づ最初泉に出會す、それより河は始まるなり、綠濃き草叢は、之れ水の表面に來るを示すもの也、意地惡く地を蔽へる綠草は、屢々其下に深き沼を隱蔽する事あり、此根源よりして水は草を傳ひて滴り、直ちに地を穿ちて流るゝ也、此水は水量を增し、又傾斜の度の增すに從ひ、益其川床を深め、且つ廣げつゝ堆積物或は小山を蔽へる脆き岩石を穿つ、好都合の場所に於ては、深さ二三十尺もある險しき溝は、如此にして數年の間にして堀らるゝ也

▲時として谷の兩側互に相接近して、堆積物の爲め其間に河及路に向て餘地なき迄に至るものあり、此場合には自然は實に最上權を要求す、而して道路は切り開かるゝか、或は恐らく岩石を通じて隧道とせられざるを得ず、他の場合には、自然は一人舞臺ならず、多くの場所に於て上方にある岩石よりの堆積物は、谷を正しく横切りて流水を塞ぐ事あり、此場合には自然に岩石と流水との間に

激しき爭鬪を起すを常とす、然れども河は常に最後の勝利者也、暫時の間は或は塞止せらるし事あるも、流れは其勢力を集中して、岩石の壘壁を越え、意氣揚々勝利を以て突流し、其以前の行路を回復す、而して後漸く其敵たる岩石を運び去る也

▲湖水が溢れて出るに依らずして、矢の如く流るゝ水の深さ十五尺もある河あり、之等は水と云ふよりは溶解せる氷河と云ふを以て可とす、氷の力は其中にあり又雲の冠、天の喜悅、及び時の容貌も亦其中に在り

溶解せる氷河

▲多くの場合に於て川は山より古きもの也、且又山は受動的にして川は活動的也、スキツランドに於て、現今殘れる山々よりも、更に多くの容積の動かされし事、及び現今の山嶽の多くは、其始め最も高く隆起せし位置にあらざる事明か也、英國の多くの山は曾て谷なりき、而して現今の多くの谷は、昔時の山の位置を占領せり

川は山よりも古し

▲山の起伏を生せし二つの要素、(1)隆起こは一時の者也、(2)崩壞こは永久的の者也、故に川は遂に勝利を制す

川の崩壞

▲流水の速力、一秒時に六寸の速度は細微なる砂を動かし、八寸の速度は亞麻仁大の砂を動かし、十二寸の速度は小石を流し、二尺四寸の速度は直徑一寸の圓石を流す、而して玉子大の角なる石を流すには、底に於て一秒時に三尺の速度を要す

流水の速力

▲地を堀るに於て氷河は恐るべき力を有す、ゲチヴア湖の横はる谷を堀りしと想像せらるゝ氷は、實に曾て少くとも四千尺の厚さを有せしものなる事を記臆せざるべからず、而して又堆石も巨大なるものにして、例へばアイヴリーの堆石は、河より高き事一千五百尺に及び、其長さは數里に及べり、其厚さ數百尺、或は時に數千尺の氷河が流るゝ河床に大なる壓迫を加ふべきものなる事は明かなり、吾人は其例證を硬き岩石の上に堀られたる溝及氷河に依りて流され來る細美なる砂に見る、實に氷河が其河床を深く穿つ事は疑ふべからざる事實也

恐るべき地を堀る力

湖沼

叙情詩の材料……限りなき幽怨……一種の美感……沼の性格の代表花……
湖國的夕暮……韵絶味絶の情趣……物を愛護する女德……高潔なる天女……
……地勢魂を惱ます……平水の美……全地球女性の不平……陰險なる魔女……
……冷たい胃襲

叙情詩の材料限りなき幽怨

▲孟蘭盆の十六夜、多恨の湖上青年は新らしき浴衣と新らしき下駄に派手を競ひ三々五々隊をなして湖畔の露深き路を徘徊して居る、水に垂るゝ柳、苫屋を埋むる眞菰、澪標、捨小舟、目に見ゆる物皆怨情を寫する叙情詩の材料たらざるなき其中に二人の若者が對立して彼一曲是一曲互に自分の潮來節に聞き惚れて居る銀の線のやうな細く顫ふ聲が、重く濕つぽい湖上の空氣に壓されて斷えて復續き韵盡きて猶殘れる餘情は限りなき幽怨を周回三十六里の大湖に滿たさねば止まぬのだ。

一種の美感

▲靜なる夕暮船を沼の中央に進め眞菰の濃き綠より低く筑波の薄紫を吐くを見るに及んで予が胸は卒然一種の美感を動かし『潮來出島の眞菰の中で菖蒲咲くとはしほらしや』てふ俗謠を想起せざる能はざりき

▲四尺に盈たざる清淺の水に無數の麥の葉の浮ぶを見試みに手を延て其一株に摘み上れば床かしとは是なり、しほらしとは是なり淡く小やかに熱き息のかゝらば消えなんと思はるゝ白き花は羞るが如く惱めるが如くに半ば葩を窄めつゝありまことに菱の花は印旛沼の簪なり彼女が柔順謙遜の性格は此花に依つて代表さるゝなり

湖の性格の代表花

▲湖沼の晴たる夕暮の特色として濃厚なる水蒸氣は藤鼠の慢幕に東北の遠岸を掩ひ西南の一角より半天に亘りてラスキンに極力描寫されたる千狀萬態の夕燒雲を散布し而して空氣は無邊に悽凉慘憺たる湖國的夕暮を動かし來り眞菰の中より漕ぎ出づる網船の棹の先、筑波の峰より高き、葭簀園の彼方に歸り去る菱取船に紅き襷の少女立並びて倒影を水底に落せる、渾て畫面に印旛沼的一種の沒彩を帶び、津守の小舍の燈火、遠里の暮柝、岸邊に睡る低き丘、あれが鎖魂の

悽凉慘憺たる湖國的夕暮

媒ならざらん深き幽怨ある其睫毛を涙に染めたる印旛沼の女神は消えなんばかりの菱の花を唇に當てつゝ彷彿として我が船の後に立てり

韵絶味絶の情趣

▲更に胸底の琴線皆鳴るが如き韵絶味絶の情趣を領し得たり燈心草疎にして水鳥の夢を守らざる淺き渚に臨みて物憂き水鏡に鬢のほつれを照らせる重き頭、瘤せたる姿の白百合よ兩岸相逼りて山容水態殆んど靜閑幽寂の極底に入れる一刹那、忽ち姿氣高く薫りゆかしき花に逢ひ恍惚として周圍十二里の印旛沼は此一輪の白百合を中心として四面に展開せるものなるべきを思はしめられたり此花に近き淺水に神も知らず人も問はず打捨て置かるゝ華表あり、風雨百年、其脚水に洗はれて纖に骨の半ばを殺せるにも拘はらず猶は花と同角度の傾斜を保ちつゝ水中に佇立するを見れば如何に印旛沼の柔順に謙遜に物を愛護して倦まざる女德に富めるかを知るに足るべし

物を愛護する女德

高潔なる天女

▲公津の岸より宗五の社に到る數町の間、山谷に鬱茂せる樹林極めて蒼潤にして其下垂數の白百合を描き一路香風衣袗に襲しく天上界を行くの思ひあり是れ印旛沼が空氣に多量の濕潤を與へて植物性を愛するの賜にして高潔なる天女の如き白百合は實に印旛沼の娘にてあるなり

一軸の巻物

▲印旛沼は一軸の巻物なり其細を解くの勞を厭はざる者にして始めて畫家の苦心を窺ひ得べし

地勢魂を惱ます

▲一言にして之を蔽へば印旛沼の風景は淡遠縹緲なり沈鬱蒼涼なり若し日本の風景は流水の浸蝕にあり火成岩の排列にありと云はゝ、印旛沼は風景に於て全く零なり、若し沈鬱蒼涼は好き風景にあらずと云はゝ印旛沼は風景に於て全く零なり然れども芭蕉が所謂淋しみに悲しみを加へて地勢魂を惱ますに似たりとの情趣を味はひ得る者は乞ふ此所に來れ、空氣の色彩を畫くに力を用ふる紫派の好材料も、亦朝暉、夕陰、氣象萬千なる印旛沼の寶庫に求むるに加かず新派油繪家たるもの何ぞ其鍵を携へ來らざる、水淺くして巨舟を泛ぶるに足らずと雖も猶ほ九反帆の高瀨船を動かし得べし

平水の美

▲其風趣の凡て弱々しく奥床しき何れか清淺なる平水の美を語るものならざる

べき

▲上沼と下沼の中間に當りて兩邊の丘陵相廻りたる處、東岸の沙嘴十數株の蒔繪に似たる古松を抽き、燈心草半ば刈り殘されたるの渚、數艘の捨小舟は三寸の淺水に横はりつゝあり、少しく傾斜せる白木の草表に立てる白鷺は卒然我船の到るに驚き横さまに沼上の翠微を掠めて飛び去れば水中に竿を植えて網を午風に晒せる漁艘は徐ろに頭を回らして好天氣と呼ぶ我が船頭之に對して一二の應答あり聲は兩岸に反響して更に三四の水禽を驚起せしめたり此時恰も水神の對岸眞菰の深き處より一葉の渡舟の棹さし出づるを見る

▲櫓痕に金波を碎いて一葉の扁舟樓下に來りぬ須臾にして自分は加藤洲の十二橋を墨繪に畫ける絹地の上の點景となり露けき袖に宿れる月を土産として涼夜佐原に赴くの客となつた

▲全地球の女性の不平を蓄積して、こゝに東半球第一の大淡水湖パイカルが存在する、彼女の帶は金絲銀絲の刺繍でない、玄武安山の鐵よりも硬く劍の如き

弱々しく奥床しき風趣

期地の上の點景

全地球女性の不平

尖ある巖石を聯ねて輪を成したものである

▲如何なる測量師も未だ曾て魔女パイカルが陰險なる心の底に沈錘を到らしめ得た者は無い、彼女は其千萬億の心を千萬億の魚形として恐るべき水壓の下、夜よりも暗きの處に潜まして居る、人過つて其魚形の物を捉ふることあるや、彼女は其心の秘密の千萬億分の一をも他に知らしむるを厭ふを以て、忽ち之を空氣中に掻き消すのである

▲世界に於て魔女パイカルが面上を船にて通過する程の冒險は無いと認められて以來、歴史は性慾もなき生靈の幾多を冷たい胃囊に斷送して居る

陰險なる魔女

冷たい胃囊

瀑布

瀑布に對して起る畏怖心……神秘なる白百合の花……瀧壺に臨む……無數の護謨の玉……一種の快き温か味……一の愛すべく精神ある耳語……心を碎く女瀧石を碎く男瀧……銀の鎧の姿

▲眼前高き一間餘岩滑らかにして白絲を束ねて下すが如きを雌瀧となす、仰げ

瀑布に對

して起る畏怖心

ば雌瀧の上更に爽絶なる飛流あり、巖石三面を包んで前面の一方纔に開け恰も絶大の瓶子の半ば破れたるが如き處に、水煙濛々の底兩條の白氣を認む、高さ各々五六間之を雄瀧となす、日光は破れたる瓶子の口にだも達せずして、其奥夜よりも暗く唯瀧の色を辨識すと雖も其水球の活動する狀態を細視することは能はず、我等が漢土の詩文及び父老の傳說に依りて養はれたる龍に對するの畏怖心は、如此境に臨むに至りて遂に其靈怪なる長身有角の動物を畫き出さずんば已まざるなり

神秘なる百合の花

▲瀧の上瀧の前、瀧の下、人の長程なる山百合は頭に見事なる大輪の白き花を、何れも二つ三つ宛頂きて餘りに水の勢ひの激しければ、風も無きに斷へず首肯きつゝあるなり、瀧は其花を打つて無數の活ける細かき水球子に一々高き其薫りを含み颯々聲を帶びて人の面を撲ち來る、軍人の素服老僧の白衣、予が着たる天野屋の貸浴衣、凡て百合の花と同じ色の着物にして百合の花と同じ薫りを發せざるは無し、人は皆百合の花を衣としつゝあるに似たり、景と花との配合の餘りに有意味らしく神秘的なればにや、何人も其一莖を手折んとするあるなし。

▲掛茶屋を出でゝ自然の石段を降るこゝ數歩すれば瀧壺の餘りの水は我が足の指を舐めつつ去り下に行きて再び瀧を作るべく忙はし

▲雌瀧の壺を掠めて淺き瀨を渡り行きたる勇ましき人々は、對岸の岩角を踏み登りて、深く暗く冷たく凄き雌瀧の壺に臨めり、中に腕を組みて腰を屈めたる人二三あり、オヽ寒いと云ふ後姿なり

寒さうな後姿

▲眞先に立ちたる太く逞ましき一人は、足に搦まる長き物を攫み上げたり、蛇にあらず、注連繩の古りて落ちたるものなり彼は开を兩手に取つてグル〳〵と腰に捲き附け、ヤツと掛聲をなせり、突貫の掛聲なり、次の一刹那には唯水煙の今迄より一際濃くなりたるを見るのみ、雄瀧の壺は白濛々に鎖されたり

白濛々

▲予は何とはなしに立上らんとせしが、手の中の不思議に痛みて我吻乍ら重くして擧げ難きに驚き、熟く視れば山松のまだ半ば生なる材を以て作られたる欄

手を洗はんには瀧の外に水なし

は琥珀を鎔かしたるが如き脂を吹きて、予が手を糊し住めたるなり、予は何時の間にか緊しく欄を握りつゝありき、洗はざるべからず、洗はんには瀧の外に水無し

▲仰げば頭上に絶叫あり、瀧壺に沒して白く形を失ひし彼の注連繩を帶の勇士は葬られし者の墓を破つて蘇へり來れるが如く、再ひ濛々の中より躍り出でゝ、咄嗟に二人の戰友を引込みたるなり

瀧壺に望む

▲登り盡して瀧壺に臨めば、水勢の激しきは下より仰ぎしに十倍せり、眼は何の識別なくして唯白く動ける物の天地に滿てるを認め、耳は何の識別なくして唯世界の凡ての物が鳴り響くを覺ゆ、飛沫は肉を穿つ、飛沫の外に風の如き氣あり倒しまに捲き起りて、濡垂れたる腰毛を逆立たしめんとす

無數の護謨の王

●足の達する處下は一枚岩なり、頸より以上は無數の護謨の毬を息も繼がせず打ち附けらるるが如き感ありて、頸より以下の水に沒しつゝあるを意識し得るなり即ち瀧壺の深さは五尺三寸七分ある予を呑みて纔に首を殘す程なり、如何に南山の鐵條網を破り來りたる勇士にても、呼吸も止まるばかりなる處に長く止まること能はず、彼等は皆砲丸の下を潜るが如く水の毬の下を潜りて瀧の裏の少しの隙間に、鯉の集まるが如くに頭を集むるなり、予も無論彼等に同せり

一種の快き温か味

▲爾れども予等が此時の感を想像して神死し骨凍るの類となすこと勿れ、強く激しき水の毬に打たれたる人體は一種の快き温か味を覺え來るものなり、全然憂を脫し去りて、更に一味の温暖を喜び受くるの感は單に涼風を涼しとなし冷水を冷たしとなす尋常避暑の客の夢想し得ざる境なり

一の愛すべき精神ある耳語

▲シユワイツに於て、チロールに於て、而して其池の高峻なる連山に於て、常に旅客の耳に接する者は一の愛すべく精神ある耳語也、是れ森々たる樹林より來るに非ず、是れ嘈々として流下する谿間より來るに非らず、是れ習々として旅客を扇ぐの空氣より來るに非ず、即ち其境涯に生ずるの濕聲也、其耳語するや、亦悅ぶが如く亦愛するが如く、亦慕ふが如く、人をして情緒綿綿、釋て去るに忍びざらしむ、夫の山中の自由なる男子をして、大に其必胸を痛めしむる

者は信に偶然に非ず、噫嘻是一の愛慕を以て充たされたる天籟と謂ふべきものか、其呼ぶや招くが如し人をして敢て違ふあるなからしむ、然れども終に其招ぎに應ずる能はざるを以て多くの心膓は既に斷絶したり、若し夫れ銀河天より落ち、百雷地を撼かす者は、其勢力の强且大なる宛も天地を動かし得る神明が昌言以て法を說くが如し、それ將に肅々乎として慄るべき者あらんとす

鰐が口を開いたやう

▲眞中に先づ鰐鮫が口を開たやうな尖のとがつた黑い大巖が突出て居ると上から、流れて來る瓢と瀨の早い谷川が、之に當つて兩に岐れて、凡そ四丈ばかりの瀧になつて、哄と落ちて、又暗碧に白布を織つて矢を射るやうに出るやうに出るのであるが、其巖にせかれた方は六尺ばかり、之は川の一巾を裂いて絲も亂れず、一方は巾が狹い、三尺位此下には雜多な岩が並ぶと見えて、ちら〳〵ちら〳〵と玉の簾を百十に碎いたやう、件の鰐鮫の巖にすれつ、縋れつ

心を碎く女瀧岩を碎く男瀧

▲唯一筋でも巖を越して男瀧に縋りつかうとする形、それでも中を隔てられて、末までは雫も通はぬので、揉まれ、搖られて具さに辛苦を嘗めると云ふ風情、此の方は姿も窺ひ容も細つて、流るゝ音さへ別樣に、泣くか、怨むかと思はれるがあはれにも優しい女瀧ぢや……男瀧の方はうらはらで、石を碎き、地を貫く勢、堂々たる有樣ぢや、之が二つ、件の巖に當つて左右に分れて二筋となつて落ちるのが身に浸みて、女瀧の心を碎く姿は男の膝に取ついて美女が泣いて身を震はすやうで、岸に居てざへ體がわなゝく、肉が跳る

銀の鎧の姿

▲其處は早や一面の岩で、岩の上へ谷川の水がかゝつて此處に淀みを造つて居る、川巾は一間ばかり水に望めば音は然までにもないが、美しさは玉を解いて流したやう、却つて遠くの方で凄じく岩に碎ける響がする……向ふ岸は又一坐の山の裾で、頂の方は眞暗だが、山の端から其山腹を射る月の光に照らし出された邊りからは石小石、榮螺のやうなの六尺角に切出したの、劒のやうなのやら、鞠の形をしたのやら、目の届く限り、殘らず岩で、次第に大きく水に浸つたのは唯小山のやう、自分達が立つた側は、却つて此方の山の裾が水に迫つて、丁度切穴の形になつて、其處へ此石を箝めたやうな跳へ、川上も川下も見えぬ

が、向ふの彼の岩山、九十九折のやうな形、流は五尺、三尺、一間ばかりづゝ上流の方が段々遠く、飛々に岩をかゞつたやうに隱見して、いづれも月光を浴びた、銀の鎧の姿、目のあたり近いのは、ゆるぎ糸を捌くが如く眞向に飜つた

氣象天候風雨色

梅雨と狂的發作……非常の事變と氣候風……伊勢の神風……火災と氣象の關係……青天と煩悶……壓迫的密雲並に陰雲……曇天と人心……螺線狀の渦卷……嶽上の雷雨……青雲と黑雲との戰……魔物の笑ふやうな風の聲……凄壯無比なる音樂……電光……掃いて洗つたやうな……強風電光月光……色と眼の調和……色彩の表情……色彩の疊積

▲梅雨を送り來るの氣候風は、高熱多濕にして極めて身心に不快に、血を沸かし、腦を蒸し頗る强健なる者と雖も、亦身體の不調和に心氣の活潑を缺くを覺えしむ、況んや平生多血にして激昂し易き者、若くは頭腦の健全ならざる者に於てをや、此天候氣象の爲に攪亂せられて、動もすれば狂的發作を敢てするに

梅雨と狂的發作

至る也、同時に非常なる覺悟を要するの大事も此時期に催され決行せられしの例少なしとせざる也、新聞紙の第三面が日々血に塗らるゝは此時期也

▲日本の歴史に於ける或る種類の非常なる事變の多くが、遠き印度洋上より吹き起る濕熱の氣候風と大なる關係を有せることに注意せんを要す

事變と氣候風

▲伊勢の神風は即ち毎年新秋我國に襲來するの暴風雨と同種類のもの也、語を換へて云へば、十萬の蒙古勢を玄海灘の底の藻屑となせし伊勢の神風と、毎年下谷淺草向島に洪水を起さしむるの暴風雨とは、全く同種類同系統にして、蒙古が此警戒すべき時期に於て漫然海上に屯せしは、是日本に向つて授けられたるの幸福なる也、之を天佑と云ふも可也、一段之を詩化して伊勢の神風と呼ぶの何ぞ妨げん

伊勢の神風

▲何に因りて日本は世界の大火災國なりやと云ふに、氣象の變動常に激烈にして、强風、暴風、颶風は時を定むることなしに起り、忽ち骨を腐らしむるの濕潤に入りしかと思へば、忽ち肉を枯らすの乾燥に移るを以て、動もすれば、風

火災と氣象の關係

と乾燥との爲に煽動誘引せらるゝの火が、其守るべきの範圍を超越して横暴を逞うするに至り易き也、是れ日本に火災多きの根本的理由にして、日本の家屋の構造が、日本人の開爽瀟洒を愛するの趣味と、其趣味に適せる材料即ち木材とに依ること多きは火災を多からしむる副理由也、而して日本人の性質の慎重周到ならざるは、輙ち火災を生ずるの機會を多からしめ、其輕快にして動もすれば矯激なるの氣風より、放火犯人を産出するの傾向も、亦他國に比して多きが如し、或地方の如きは今も尚互に恨を懷ける者の家に放火して、燒立ての競爭をなすの惡習を殘せるあり、日本人は放火癖ある種族なりと云ふも誣言にあらず

青天と煩悶

▲煩悶は青天の下に在つても、曇天の下に在つても、均しく激昂するもの也、最も昌榮せる人の生涯に在りてさへも、實際常に歡樂より悲哀の多きを覩れば、曇天は我々に恰好せるもの也、輝きたる快き天は、徒らに我々を翻弄するに過きず、造化は其悲しき光景にある時に當りては、我々に似又我々を慰む、然れど

密雲

晴雲

曇天

蟠線狀の渦卷

ども其焜燿し、減定し、靜着し、偉麗に、壯大に、我々が老ゆるに常に若く、我々は長嘆するに常に微笑し、空濶、超越、悠遠、充足、欣然として寧處する有樣にある時に當りては、其内に一種壓抑の處ある也、無慈無悲、冷淡高絶なる天を思うて感傷すれば、人は剃刀を取つて自ら終らんのみ

▲天空低く垂れ密雲いやが上に蔽ひ重なり、空氣は厚く且つ重く、呼吸に不快を感せしむ、微風だにあらねば、草木の一葉もソヨりともせず、靜着せりと云はんよりは、寧ろ凝結せりとも云ふべき天と地とは、今其中間にある有らゆる生物を、一瞬々々づゝ緊縮し壓迫せんと試み居る也

▲此時既に地平線を壓迫して、將に一切を掃ひ行くべき暴風あり、決裂せむとするの兆候を示したる恐ろしき陰雲は、予が曾て見ざる所のもの也

▲晴天は喜ぶべし、雨天は樂むべし、驟雨迅雷は快、烈風急霰は爽、然れども曇天日々低く壓して變化することなくんば、人は遂に發狂するに至らん也

▲今武州御嶽山三千八百尺の絶頂に突立つて居る杉の神木、周圍一丈五尺許り

あるのが、眞黑な髮鬚を虛空に逆立て、苦み蹙く樣に身を搖ると、恰も其髮鬚の中から振り出されんかと思はれる、一叢の濃き雲は、非常の速力を以て螺線狀に渦捲き昇り、直に一萬尺の高い處から雲の絕壁を削り成して、鼠と藍の兩色に天を區分した、午後零時十七分である

獄上の雷雨

▲ピカリと一つやつた、途端に大砲を連發するやうな恐ろしい雷は、立ち掛けた膝の向ふから轟き出した、續いて、梅の實程もある大粒の雨が、それに劣らぬ大きさの雹を雜せて其處動くなと礫を降らせた

雹雜りの雨

▲一瞬時に四邊は夜よりも暗くなり、强い電光が、活動寫眞の樣に樹木の動く態を描き出した、雷は御嶽山を二つに劈いてもこんな激しい音は出まいと思はれる程で、其又雷さへ打消されるばかりの一際激しい音は、雹雜りの雨である、雨と雹と相打ち相擦れて、頻に雪よりも白い散を飛ばし神木も隨神門も隨神門の中の人も、悉く濛々の裡に埋められだ

青空と黑雲の開ひ

▲五分間を保たぬに、太陽に極めて鋭い光線を雨の中へ射込んだ、虹は目の前五六尺の處に五彩を散らして忽ち又滅え、青空と黑雲が上になり下になつて闘ふ樣に見えたかと思へば高根に咲く五月の櫻を枝ごめに吹き散らす一陣の大風が、小氣味よく黑雲共を谷間へ追ひ落して、滿天キラ〳〵と葉木を離れる雫を跳らし、唯、總身水を浴びた樣になつた以前の青年のみ、通り雨の遺失物の樣に殘されて居る

魔物の笑ふが如し

▲ゴーッと半空に魔物の笑ふ樣な音がしたと思つたら、電線の物凄く悲鳴する聲に連れてギーッ〳〵と家鳴りがする、風だ、S字形C字形に捲れた飽屑はカラ〳〵と身を鳴らして板の間を競走する、一つ二つは戸の隙間から土藏の中へ飛び込んだ、カラ〳〵と何處迄も奥深く鳴つて行く音が、土藏がだん〳〵土の底へ滅入り込むかと思はれる樣に遠くなる終に戸の隙間を漏れる明りは消えた

凄壯無比なる音樂

▲三日間蒸しに蒸した雨氣の空は、卒然として人を赫かす樣な冷たい風を吹き起した、夜や早や九時である、人々は左程に驚かない、けれども海は殊の外に騷ぎ立つた、淺き泥の上にあるだけの水を悉く白波にして、砲彈の形に人工を

加へた此三角洲を爆裂せよとばかりに打つて來る、波音の中に雷が鳴り込む遠響きが聞えて來た。實に人をして劒を拔いて起て舞しめんとするが如き、凄壯無比なる音樂の合奏である、紫碧の電火は霰の如く座に亂れ入つた、洋燈の火は豆よりも固く縮んで、人の顏皆鬼に似て居る、相談終つて運び出された盃盤は種々の色を以て開き皿の中の燒魚は蘇つて跳り出さうとする

▲感昂まつて打震へる烈しい聲は、横さまに兩風の音を貫いて身の毛もよだつばかり

▲一頻り、天の腹がヒヾ割れて、中に包んだ光の溢れ迸ばしる樣に、眶を塞かしむる程の强い電が閃き渡つた

▲激昂のまだ收まらぬ血に、一種の悟りと抱負を帶ばしめた顏の氣高さ、總てが電の色に靑白くされて、人間界の物の如くならぬ凄味を含んで居る

▲恰も何子の叫ぶ聲の端が光りとなつた樣に、電が又もや激しく靑白い屈折線を走らした

電光

掃いて洗つたやう

雨の踊り

眞に是壯快なる詩

▲雨や疎になつて、雷の音は天の一角に遠ざかつた、電は逃げ乍らに箭を放つて、時々人を嚇かさうと試みるが、モウ睨みが利かない、掃いて洗つた模な島上の路を、壯夫の一群に守護された船の女神は、揚々として勝利者の如く歩み行くのである

▲月嶋と越中嶋とを結び附ける相生橋、墨染にしたばかりな眞の闇の裾を、食ひ裂くやうに激しい波音がする電の地に擲着けられる、度毎、橋板の上に雨の目覺しい踊りを描き出すのである、橋の下に繫がれてある一葉の舟も電の視線を逃れることは叶はぬ

▲寒風は忘恩よりも寧ろ不親切也

▲一千八百廿一年二月十九日、强風—電光—月光—男子は上衣を着—女子は面を蔽へり—雲は桶より牛乳の流されが如くに湧けり、眞に是壯快なる詩—風尙ほ止まず—瓦は飛べり—家は動搖せり—雨は降り來れり—電光は閃めけり—全くスキスのアルプス山の夕景に似たり、而して海は遙かに怒哮せり……Aより報

知あり、戰爭は甚だ近づきつゝありと云ひ來る、嗚呼此暴戾の君主は必ず斃ち倒さゝるべからず……イタリアには必ず甦生あり、世界には希望あり

色と眼の調和

▲凡そ光輝の厚く強き色は、人が之を視るとき甚だ其精力を消用し耗亡す、又其暗く淡き者は眼の精力に相當の運動を與ふるに足らざるが故に不滿不快の感を起さしむ、唯夫の綠と稱する色を、人に感せしむる光線は眼の精力に適當の運動を與へて、而も過不及なきの中を得るに依り、乃ち怡懌暢適の感を起さしむる也

色の表情

▲青は生也、白は殺也、紅は悅也、青黑は愁也、綠は暢也、純黑は德也靜也、紫は樂んで淫し、黃は自ら守る能はず、柑黃は測るべからず

色の疊積

▲紅は赤きに疑ひ無けれど、紅鍾兒に紅を刷く時の如く、彌が上に塗りかさぬれば、鏡物用の光輝を帶びたる綠色に見ゆるに至る、雌黃は黃なるに疑ひ無けれど、雄黃とは異りて、彌が上に塗り重ぬれば、終には柑黃色をなし、赤みを帶ぶるに至る、青色いよ〳〵重なれば瑠璃色となり、紺に近づき、黑に近づく、同じ色の顏料にても、雌黃、紅などの如く、透明性の傾きあるものは、是を塗りかさぬるに隨つて、漸く其色變りて見え、雄黃、朱などの如く不透明性の傾きある者は、塗り重ぬるも其色變りては見えぬやうなり

幽咽せる潮來節

音樂自然の音響

幽咽せる潮來節……銀の線のやうな細く顫ふ聲……天地の異變に刺激せられた技能……絃聲に靈氣を添へる雷と電が消えた……八分の自信に二分の掛念……撥は絃を斷つ聲は喉を裂く……颶風萬籟皆鳴る……火の音響……自然の言語……夜濤の聲

▲潮來節には雪濤月を蹴る巖の上に聞く海岸の民の歌の如き激越悲壯の調がない、亦白雲碧樹の間に山中の民が嘯く高朗悠揚の聲もない、其昔半ばが霞ヶ浦が半ば海灣の性質を帶びて潮來の津に檣が林をなした時、國々から寄り集まつた舟人征夫が暮の雨、夜半の月に魂を惱ます湖上の風景を看て家鄉を思ひ情人を憶ふ痛切の情は、潮來出島の眞菰よりも繁く、自然に發して絲竹と調和し而して

潮來に特殊の歌唱となつたに違ひない、所が霞ヶ浦沿岸の他の地に比較して、最も重く濕つぽく霧の如き空氣を滿たして居る潮來だ、それに、四邊は平かなる洲と廣き水のみで、餘韻を受けて反響を與へる物體がないこれぞ是れ、銀の線のやうな細く顫ふ聲に重く濕つぽい空氣を穿ち、及び其聲を載するに適當な歌調を作つて、こゝに幽咽せる潮來節があるの原因である歌ひ手は自分の耳の批評に依つて其肉聲を鍛錬するのだ、潮來へ來なければ眞の潮來節は聞かれぬ

銀の線のやうな細く顫ふ聲

▲蟲の音咽ぶ草の原に迫つて、貸家造りの新らしい長家が、斜めに紙を貼られた儘に並んで居る處を通り掛つた、中に一軒淋しく明りの漏れる窓がある、此天地の一大異變に滿身の技能を刺激せられたのであらう、何者か、絃と撥とを用ひて、蒼低き矮屋の中に、樹を拔き石を走らしむるの疾風急雨を起して居る

天地の異變に刺激せられたる技能

……瀧子は我を忘れて立停まり『い、絃だこと紅葉狩を彈いてるわ』と傍に人なきものゝ如く微笑んだ、絃斷じて咽喉を裂くの聲、『物凄くも亦恐ろしけれ』

絃聲に靈氣を添へる雷と電とが消え

……我を忘れて立ち盡す瀧子の背に、月島の雨は歌んだ、空は電の活動に草臥れて自ら撑へる力なく、沾ふて重き星が搖々として皆落ちんとして居る、……濡れた衣に透る雨後の汐風の强面さに、大の男共が己れの胸を抱き締めて縱に悚へるのである雨が歌むと共に、屋内の絃聲に靈氣を添へる雷と電が亡くなつた『アゝ』と拍子抜けしたやうに撥を措く音がした、それでも瀧子は立ち去らうとせぬ、天の變と絃のインスピレーションに誘動された胸中の技藝は、四肢五體から迸發して自ら止むること能はざる樣子である、突と入つて『御免下さい』と發した聲が、尋常より少なからず高かつた、

天才が小肉塊を動かす一種の痙攣

▲八分の自信に二分の掛念を帶んだ微笑は若き血を頰の匂ふ程に騰しめた、紅葉狩の更科姫とは見えず、寧ろ關の扉の墨染に近い打扮乍ら、踊りは正に神に入つたものである、人力を盡して得たものでなく、天才が此小肉塊を動かす一種の痙攣である、扇は小さき蝶で人は大なる蝶、扇は小さき人で人は大なる扇、人の輕きことは扇に讓らぬ、双蝶翩々として共に地を離れて飜へるのである、絃と唄との一呼一吸に隨つて足を下せば、疊の鳴る音は檜の板よりも固い……

良あつて調は急になつた、撥は絃を切り聲は喉を裂いて、怒雷激電再び月島の夜を襲ひ至れるかと怪むの時、一たび退いた美人は、横に張つた袂に上半身を掩ふて、腰を屈めつゝ現はれ出でた、蹲まつて例の一喝、被にからぬ袂を投じて頭に手を掛け振りほどけば、垂れて膊を打つべき、誇りの黒髪、颯と一波打つて空に颺るを下つて肩に掛るを待たず横さまに跳ぶこと二間、美人を其儘の形で鬼神になり濟ましたのは、成程慾くべき珍無類の紅葉狩である。金泥朱碧の燦爛たる舞扇をサヽラの樣に拐り裂いて、當意即妙の紅葉の枝、飛び散る紙の切れは楓の葉の畑である。『此扇再び用ひざらん覺悟！』、舞終つて鬼神は女子に變じた『貴方、師匠へたんとお禮をして下さいな』

珍無類の紅葉狩

▲一の怖るべき豫言は白雲の中に響き、人をして悚然たらしむ、空氣は沈々として凝著蒸すが如く、人の呼吸を停めんと欲する者に似たり、但だ見る、空氣の中に於て其響きの益々烈きを、既にして颶風俄かに起り、恐怖せる陸地の上を旋轉しつゝ掃除し盡し、而る後に嫋々として吹來り、夏の頰の上に一の寒冷なる氷の接吻を與ふ、樹葉は勿々として軟風の手に搖動せられ、花瓣は之が爲に斜々として相傾く、而して迅速なる日の蛇は突如として雲中より出で來る、彼は久しく熟睡せり、然れども今や起きて雲の獅子を咬して而して其吼聲は天の窓を震動せしめたり、是れ何等の光景ぞ

颶風萬籟皆鳴る

▲火の中に於ては甚だ勢力あり、甚だ恐怖すべきの音響あり、然れども我豈其畑畑の中に圍まれたる、悲むべく憐むべきの音聲を叙するに忍びんや、夫の自然が颶風を作り、萬籟皆鳴るの時に當りては、即ち亦吾人の心胸に根柢して靜肅なる喜悅を生ぜしむる者あるも也

火の中の憐むべき音響

▲自然は自ら亦其音響を風及火より、地及水より聽くことを得るか、多くは常に其畏るべきの響と、愛すべきの響とに盲ならん、殊に後者に於ては、了悟する所最も少なからん、自然の言語は人之れを靜聽して而して幸、之れを靜聽して而して福而れども彼又了悟し難き者に非る也、彼は特に一の廣大なる思想を宣言して曰く此れ乃ち神明なりと

自然の言語

黄樓夜濤の歌

▲古より文人韻士物の聲を寫すも亦多し、其細なる者は我言はず、其洪且壯なる者に至つては莊子の風の聲を寫し、歐陽子の秋の聲を寫し、シルレルの失火の時の聲を寫す如き其最も著はるゝ者也、然れども全篇一意貫串、而かも中に曲折斷續、山水透邐の妙ありて、尤も我が意を恬ぱす者は、王陽明が黄樓夜濤眠に過ぐるはなし、其『或は隱れ或は隆んに、斷つが如く逢ふが如く、揖讓して而して樂進むが如く、欷ち掀舞以て相雄し、孤憤を崖石に觸れ、逸氣に長風に怒し、爾して乃ちひつち闔ち復た闢き、既に横に且つ縱に樅々、洶々洶々瀜々風雨已に呂梁の東を過ぐるが如し』と曰ひ『噫嘻異なる哉是れ何ぞ聲の壯且つ悲きやそれ烏江の兵散じて而して東に下り、帳中の悲歌に感じ、慷慨激烈聲を呑み泣を飲み、怒戰未だ已まず憤氣臆を決し、戈を倒にし載を曳き、紛々籍々、狂奔疾走、呼號相ひ及びて而して復た彭城の側に會する者乎、其れ赤帝の子、威海内に加はり、故郷に歸るを思ひ千乘萬騎、霧奔雲從、車轍霆を轟かし、旌旗空を蔽ひ、萬夫の鼓を擊ち、千石の鐘を撞き、大風の歌を唱ひ、節を按じ、翔翔して而して、將に沛宮に返らんとする者乎』と曰ひ『俯して而して之を聽けば則ち簾咸を洞庭に奏するが若し、仰ぎて而して焉れを聞けば、又鈞天を廣野に張るが如し、是れ蓋し有無の相激する其れ殆んど造物者、將に千古の不平を寫し、而して用ゐて以て吾が胸中の壺鬱を盪せんとする者乎、而るに君亦何爲れぞ樂まざるや』と曰ふ如き實に是絶妙の形容、絶高の思想、世間豈能く此れと相匹敵する者あらん乎

自然觀

自然は活物也……自然は言語を有する朋友也……夜の書……夜の容貌……星晨これ天の詩……寂寞たる天地……嚴肅無限……墻壁なき大殿堂……暴風及闇黑……暴風と夜の樂しさ……雷霆の一語……露けき朝……自然と我との同化……忘却さるゝ一切の時間……高山も我感情也……新鮮なる翼……不朽の得分……自然を愛する純潔なる情……力に充てる思想……太洋の權威

自然は活物也

▲星も山も活けるにあらずや、岸打つ波は精神を有せざるか、露滴も洞窟も其に幽默なる涙を流すの情無きか

自然は言語を有する朋友也

▲山の高き所、彼の朋友あり、太洋怒濤の逆卷く所、其上彼の住所あり、天晴れて蒼く氣候和煦なる所彼其所に逍遙するの力と情とを有す、沙漠も洞窟も又波濤も、彼に向つては皆朋友たるなり、彼等は其語を以て語ること人間の言語よりも明瞭なり、自然の文字は日光に由つて湖面に寫映せられてあればなり

夜の書

▲山も星も、亦彼に魔術を敎へ、彼に向て夜の書を繙き、幽玄よりは聲ありて宇宙の驚嘆及其秘密を啓示せり

夜の容貌

▲星は進み、月は雪山の戴きに輝く美なり、我れ自然と共に逍遙す、何となれば夜は人間の容貌よりも親しければなり、而して星光微かにして、蔭ほの暗き所に於て、吾れ他界の言語を學べり

星辰これ天の詩

▲星辰これ天の詩なるかな、汝の輝く紙面に於て我れ帝國及び人間の運命を讀む、我れ偉大ならんと感奮せるときは、吾人の歸向する所は、此肉體を脫却し、以て汝と同體ならんとするにあり、實に汝は美麗なり、又神秘なり、而して遙かに在て愛情と敬意とを我が心中に起さしむ、吾人運命、名譽、權勢及び生命等は皆稱して星と謂ふ

寂寞たる天地

▲天地寂寞これ眠れるにあらず、されども萬物呼吸を收む、吾人の深き感情に熱中せる時の如し寂たり寞たり、吾人の幽玄なる思想に沈める時の如し、天地萬物寂寞たり天上の衆星より靜けき湖水、山なす岸邊に至るまで、皆な强盛なる生活に於て統一せり、一條微細の光線も、空氣も樹葉も一として冷々たる無く皆造物者及防護の存在及感情を分有す

嚴肅無限の感情

▲此寂寞に獨居して嚴肅無限の感情起り、眞理は我體に溶解流入し、以て我が本我を淸む、嗚呼これ音樂の調なり、精神なり、又源泉なり、而して人をして大調和を知らしめ以て矯美を注ぎ、宛サイラレア(女神)の帶の如く、美を以て萬物を連結し我をして死を恐るゝの念をも去らしむ

墻壁なき大殿堂

▲古代のペルシャ人が神机を高山の頂上に設けたるは、豈意味なからんや、此

處に墻壁なき大殿堂に於て大精靈を求めたり、而して人工的の祭壇はかゝる高大なる禮拜に向つては微弱なり、社殿の梁柱、偶像の家屋、ゴチック式の伽藍、或はグレシア風の神殿等と、此自然の崇拜處たる地球、空氣及び墻壁を以て祈禱を限らざる所のものとを比較せよ

暴風及暗黑

▲天候變化せり、甚しいかな、かくも變化せるや、嗚呼夜及暴風及び闇黑、汝の強力は驚くに堪へたり、されど強力なりともその愛らしきことは、宛も女子の黑き眼の光の如し、峰より峰に亘り岩間には活雷殷々として轟き、衆山皆口舌を有して言語を爲す、ジュラ山は其漠々たる雲霧の中より、樂しげなるアルプス山に呼び對ふ

暴風及夜の樂しさ

▲之れ實に夜に於て存す、最も光榮ある夜、汝は睡眠の爲に作られたるに非ず、我をして汝の恐しさと、且一層の樂しさとを受け得しめよ、即ち暴風及夜の樂しさ之れなり、湖面は輝き海上には燐火燃え、篠突く雨は舞踏して地上に來れり、忽ちにして暗黑となり、又忽ちにして衆山聲を揚げて樂しむ、宛も之れ若き地震の生誕を欣賀するが如きなり……嗚呼汝暴風よ、汝の目的何れにかある、尙ほ人間の胸中に鬱屈するが如きものなるや否や、或は鷲の如く他に高崇なる巢を發見せるや

雷霆の一語

▲若し最も深く我胸中に存せる所のもの、感ずる所、知れる所、精神も感情も、又思想も、一切心中に存する所、大となく、小となく、強となく、弱となく、凡て我が欲する所、堪ゆる所知る所、感ずる所、盡く之を一語に含蓄せしめて之を發表することを得ば、且此一語にして雷霆ならんには我れ語らん、然りと雖も、余は現在あるが如くにしてかく生活し、人に聽かるゝことなくして死し、無聲の思想を持すること、宛も利劍を鞘中に藏するが如くならん

露けき朝

▲朝は再び昇れり、露けき朝其呼吸は馥郁り、其頰は花咲きつ　いと樂しげに雲霧を吹き去り、宛も地は墓を有せざるが如し、而して晝となり吾等は再び生存の途に進軍す

自然と我との同化

▲かく自然を愛し、自ら自然と合躰し、時に暴風たらんことを希ひ、又時に天

躰其物たらんことを思へり、かくて天地の美と大とに打たれて、恍惚として我を失ふこと數々なりき、彼れかく自然を愛せば自然も亦彼を愛して、其範域中に我を抱き、此泥土の身を溶解して、以て自然の大海に冥合せしむ

▲此我戀々たる、而も誤信なる自我不變の念を去れ、天空の美を眺むるのとき誰か「我」を思ふ者あらんや

一切の時局を忘却す

▲地球に住せずして其恍惚（エクスタシー）に住す、彼の周圍には時日も世界も無意識に經過するなり、吾人自然界を讃美せるときは、一切の時間を忘却す

高山も我感情也

▲山も彼も皆我精神の部分なること、猶我身體が天地の一部たるが如きに非ずや

▲我は我身に生活せるに非ずして、我周圍のものゝ一部となれり、而して我に取りては高山も感情なり、然りと雖も人間の作れる都市の騷ぎの聲は我れの苦しむ所、我れたゝ肉體的連鎖の結繩を以て、動物中に分類さるゝを嫌ふの外、我精神は自由にされて、或は蒼空、或は峰嶺、或は大洋或は星辰等を合體するは我が毫も嫌はざる所也

新鮮なる翼

▲かくて我れ天地に呑入せらる、これ生命なり、我れ過去の人間界は、宛も紛爭の場合にして、我は或る罪科に由りて、或は悲しみ、或は勞苦せざるべからざるが爲めに、此場所に設置せられたるが如しと觀ず、然りと雖も、終に新鮮なる翼に乘じ、てたとひ若しと雖も強壯なる勢力を以て、樂しげに、陣風の如く飛揚して、我れの繫縛たる所の寒冷たる泥土たる我身を後に蹴棄つるが如きを感ず

不朽の得分

▲而して精神は蠅となり虫なりて人間よりも幸福に生くるの外、遂に全然此墮落したる肉體より分離して自由となり、我を構成せる諸原素は、もとのまゝの原素に歸し、我塵土はもとの塵土に歸する時は、凡て我見る所のものは、其まばゆさを少うし、一層の温かきを以て感せられざるか、即ちこれ無體の思想、各處の精神にはあらざるか、之れ今と雖も、我等の時に、獲る所の不朽の得分には非るか

自然を愛する純潔なる情

▲山も波も又大空も皆我及我精神の一部たること猶ほ我は、彼等の一部たるが

如きに非るか、我心情に於て是等を愛するの深きは、純潔なる情には非ざるか、一切の物を是等に比較する時は、實に輕侮すべきかな人皆其眼は只地上にのみ向ひ、毫も高尚熟誠あることなく、困難多き、而も俗世界の冷淡なることに對して、此純潔なる感情を棄てんよりも、寧ろ俗界の苦勞に面することを爲さん

力に充てる思想

▲バイロンの思想は力に充てり、故にアルプスの高山を見ては『地は如何ばかり天を突き得るやを示すものとなせり

太洋の權威

▲深玄なる大洋激浪逆卷き、數千の戰艦泛々として又遂に爲す所無し、人間の權威は漸く陸上に行はるゝと雖も、海岸に至て此處に止る、渺々たる大洋汝獨其處に主權して荒暴す、人間の如きも此に至ては煩悶して泡を吐きつゝ深きに沈む、何ぞ雨滴に異ならん、葬るに墓なく、吊ふに鐘なく、遺骸を收むる棺もなし、地上の破壞も之を蔑如し、汝怒濤は人を九天の上に揚げ、忽ち之を狂瀾の中に沈む……嚴々たる要害の都府を攻擊し、帝王及人民をして、其都城に戰慄せしむる所の大砲、武器、及び堅牢なる助骨を有せる軍艦は、泥土たる人間をして自ら海上の主權者なりと思はしむと雖も、汝に向ては唯是一箇のの玩弄物にして、忽ち波濤に溶解すること雪片に異ならず

風なる專制君主

都府研究

風なる專制君主……雨の保守的感化……悲みの都怒りの都……保險なきの安全……冷笑的學……寸鐵殺人一警語……眞珠を發掘すべき金針……一擽り……厚顏無恥なる小術數家……特殊の粧飾を與ふる美術家……老蒼なる景物に配合する鼠色……風の經營慘怛……貪食の動物……勝者と敗者……喉黑と領黑……三種の東京美人……可驚消化作用……無意義なる生存者……風流は表皮一枚也……紅蓮の花……名の都利の都……秀吉的と家康的……江戸ッ子氣質……詩味を帶べる沈痛峭烈……怜悧は小乘の器也……聞かね氣の負けじ魂……上層下層の間を走る電火……社會の裏を行く伏樋……變形せる反抗……植物的營養の吸收

▲自然が行樂の時期として日本人に與へたる、櫻花の春さへも東京に於ては風なる專制君主に其大半を强奪し去らるゝ也、櫻花は其先天的の壽命未だ竭きざ

雨の保守的感化

るに、早くも風の暴手に名殘惜しき枝よりもぎ取られ、泥の中にたゝき附られ恨を心なき人の足駄の齒に留むるに至るなり

▲雨は都府を組織せる物質に保守的感化を與へんことを試むと雖も、斬新を好むの風は、雨雲を驅逐して一所に停住せしめず、雨脚は匆忙として都府の上を馳せ過ぐるなり、されば雨が辛苦して與へ行く保守的感化、即ち屋宇墻壁の間に含有せる微細の植物種子を發育せしめて、都府に古雅蒼潤なる風致を添ふる要素をば風は塵埃なる其軍隊を指揮して瞬時に破壞し去らしめ、樹木をして電線をして一齋に雨の徒勞を嘲笑せしめて止むなり

悲みの都怒りの都

▲京都の婦人は赤子の泣くに向つて『泣かいでもいゝがな』と云ふ東京の婦人は『憤らなくてもいゝぢやないか』と云ふ、京都に於ては涙は悲みの表情作用にして、東京に於ては怒りの表情作用と認識せらる、京都は雨の都―悲みの都にして東京は風の都―怒りの都なり

保險なきの安全

▲東京の地皮は隅田川の建設作用に成れる沖積土と都府草創以來大小數千回の火炎が化製せる灰とに依りて組識せらるゝを以て、微風にも細雨にも其與し易きを侮られ忽ちにして屐齒を呑むの澤泥となり、忽ちにして鬢髮を抹するの纖塵となり其變化の迅速なること猶の目よりも甚し

風の感化

▲風なる專制君主の支配を受けつゝある市民は下駄屋をして齒の長き足駄を供給せしむる外に、洗湯屋をして女の髮洗料を輕視すべからざる收入に算せしむる外に、色揚げを染物屋の職業を重要なる部分となさしむる外に、大道の水撒てふ一種の職業を需用する外に、至る所水栓を設けて、素破と云はゝ地底の黑龍に滿肚の白水を吐き來らしむる準備をなし、豫め暴虐を避くるの餘地を作り置かざるべからす、此故に都府を組織する凡ての物質には安全なる永久の保險なし、今日を以て今日に繼續し、現在に交換するに現在を以てするあるのみ

淺薄なる今日主義

▲都府に生存する市民は變化より變化に轉ずる限りなき現在の應接に追あらず、四圍の事物の變化に伴ふて自己の境遇を新にするに日も維れ足らざるを以て、自ら其心理的作用に現在的影響を受け、遠大の計圖を忘れ恒久の志操を失

一種の冷笑的樞學

ひて淺薄陋劣なる今日主義の下に其靈性を鎖磨し去るぞ是非なき

▲人は今日主義を以て滿足し得る動物に非す、然れとも東京に生存する者に至つては、實に理想を今日主義以上に進歩せしむる間暇を有せざるを如何せん、彼の職業は彼が喫飯しつゝある間に他の競爭者に奪ひ去らるべし、彼の家屋財産は彼が睡眠しつゝある間に火の舌に舐め盡さるべし、彼若し病んで臥すこと三日なれば社會は彼を殘して三十日程の前路に進み去るべし、彼等は箸を握りつゝ働き、目を開きつゝ睡り藥瓶を帶びて戰場に出でざるべからず、爾するとを欲せざらむか、敗北と滅亡は自轉車に乘じて彼等を見舞ふべきのみ此に於て彼等は一種の冷笑的哲學を理性の標準と定め强て自己の不安心を欺かんことを試むるの究境に陷らざるを得ざるなり

寸鐵殺人的一警語

▲四圍の事物の變化急激なるに馴致されたる、耳目は驚愕を以て新奇なる事物に對するの彈力を失ひ、之を迎ふるに冷笑を以てするの傾向を生ず、既に彼等の冷笑に迎へられたる事物は必ず、寸鐵人を殺す底なる一警語の批評を與へられずんば止むこと能はず、しかも彼等は其批評の範圍を大膽に擴張して忌憚なく形而上の問題に及ぼし、爭ふて卑近なる警語を拈出して、舊江戸ッ兒が編輯し始めたる無形なる冷笑的哲學書の頁を增し、今日主義の教科書を潤色することを榮譽となす、萬一冷笑に附し去り難き問題の起るあらんか、こは由々しき大事なり、彼等が極力欺騙しつゝありし自己の不安心は一時に激昂して彼等に反抗すべし、縱令如何なる心靈界の大問題にても彼等は必ず之を冷笑に附し去らざるべからざるの餘儀なき也

眞珠を發掘すべき金針

▲地方に於ては强大なる天然力が人事を屈服せしめて、之と鋒を爭ふことを許さずと雖も東京の人事は、常に天然と咫尺の地を爭ふて激鬪しつゝあり、其天然が人事を屈服し、若くは人事が天然を壓倒したる瞬間に於て、極めて切迫したる一種の詩境を開くや、詩人が機敏に捉へ得たる對境中の美點を盛らんには堅密簡潔なる十七字の詩形の外適當の器物あるべからず、俳句は實に東京の皮肉間に潛める眞珠を發掘すべき金針にてあるなり

俳味と動機を同うする人事

▲拙速は巧遲に勝る碎いて云へば物事手ッ取り早きを尙ぶ、是東京の生存競爭場に於ける勝利の第一義なり、日まぐるしき走馬燈裡に出沒する詩料を捉へんとす、勢ひ手ッ取り早からざるを得んや、暗中何者か饅頭を我が口に投じ去る、之を覺るものは唯舌のみ故に俳味と云ふ、禪僧の一喝、劒客の一打、月を貫く時鳥の矢、水を斷する鯉の太刀、此瞬間の美的假象に含有さるゝ內容即ち是俳味なり、飜つて東京に於ける人事を觀察するに、其成敗得失の別るも動機たる瞬間に含まれつゝある內容は、俳味と同質量のものなることを首肯し得べし

輕便なる一り

▲今日主義の大都會たる東京に於ては、人々盡く一朝に高名を釣り一夕に巨利を網せんことを夢想せざるはなし、此夢想の反應として、全東京に充たす鵜の目鷹の目の人を以てし、爭ふて尺寸の間隙を開いて自家の立脚地を索む、凡ての武器は之が爲に試み盡され、凡ての戰術は之が爲に講じ盡され、人々の腦裡に盤るは、如何に激しく戰はんか、如何に巧みに戰はんかの問題にあらずして如何にして人意の表に出でんか如何にして他人の未だ着眼せざる所に一頭地を拔かんかと云ふにあり、如此空氣を呼吸する東京人の高品なる俳味を嘗むるのみにて其飢を充たす能はざるは、蓋必然の結果にして彼等は緊密なる十七字の詩形を借り來りて、之を格法の束縛なき狂句の用に供し、一攫ぐりに多數の人を笑はしむることの、勢少くして眼前の効果多きを擇ばざるべからざるに至るなり

厚顏無恥なる小術數家

▲『伏木から出るとしこたまに小便し』描寫し得て皮肉の極、賴朝の墓を鎌倉に訪ふ旬に、大頭の人が地下に此句を聞いて苦笑しつゝある面貌を想はずんばあらず、何人も想像を此に至らしめ得べし、唯斯る想像を文字に現はすの馬鹿らしさを敢てし得るの勇氣なきのみ、人事の實際に於ても亦斯の如し、何人も一たびは腦裡を經過せしむる空想にして、其餘りに馬鹿らしきが爲め、多くの人は眞面目に實行するを憚り、却つて自己の生才覺に苦しめられつゝある間に、一人厚顏無恥なる小術數家あり、思ひ切つて此馬鹿の眞似を敢てし、却つて意外の大當りを取る事あり、厚顏七分術數三分岩谷松平の如き此一例のみ、松平

特殊の粧飾を與ふる美術家

老蒼なる景物に配合する鼠色

は其れ狂句的商人か

▲歴史上有名なる專制君主の或者の如く、風は一面に於て暴虐なる政治家たると共に他の一面に於ては其王國に特殊の粧飾を與ふる美術家たるなり、其一たび塵埃を捲いて起つや、錦の如く花の如き東京を一變して、忽地に荒涼たる灰色の大都たらしむるのみならず、其過くる所、凡ての物質の微少なる虧隙に一點々々纖細なる塵埃を塡充し行くを以て、見るとして盡く固有の色素の上に黯淡たる灰色を加味せざるはなし

▲京都人の其明麗なる風光と調和せる幽禪縮緬を愛重するが如く、東京人も亦其老蒼なる景物に配合して、種々浴彩に鼠(灰色)を加味したる染色を嗜好す、風なる美術家が埃埃てふ原料を以て製作したる美術は、東京市民の趣味を敎育して、其嗜好に著しき特殊の感化を與ふ、其反射として、東京市民は色に於て『鼠』を嗜好し、趣味に於て『澁い』と云ふを嗜好するに至れり『澁い』と云ふは動作の上に發展するの鼠色なり、鼠色を含める一種のインスピレーションなり、東京的趣味の神髓を咀嚼し得たりと自ら信ずる所謂通なる男女が、ポツト出の田舍者と同視されんとを痛く恐るゝ爲、鼠を加味したる澁彩の衣服を纏ひて、自ら澁がるは言を俟たず

東京人に倘ばるゝ美人

風の經營慘怛

▲美人の如きも豐艶むき卵子に似たる東京人に重んじられず、銀に爛しを掛けしが如き氣品を帶べる、所謂澁味のある、美人を尙ぶの傾向あり

▲東京の空氣が比較的水蒸氣に富める事を先決問題となし、一歩を進めて風なる美術家が或夕暮に其經營慘怛の結果を展覽するの場合を見んとす、朝より吹き暴れし空風は日沒と共に收まり、空氣中に浮游せる極微なる塵埃と濃厚なる水蒸氣と混淆せるものが、既に地平線下に沒せる太陽の餘光を受けて、紫色の幔幕を東京の周圍に垂れ繞らすを見よ、概觀すれば唯一色の紫なるが如しと雖も、地平線上の日沒點を中心として、之を遠かるだけ多く暗色を帶び、水ある所火あるの所、花白きの所、葉綠なるの所人行織るが如きの所、空中の水蒸氣に多少の反影なき能はざるのみならず、尙精細に點檢すれば卷雲、積雲、層

雲、等、各特殊の形態と色彩とを有せる遊雲は、其紫色の慢幕を透して隠見しつゝあるを以て、慢幕の部分々々には白茶あり金茶あり利久茶あり栗梅あり栗小豆あり櫻鼠あり銀鼠あり藍鼠あり藤鼠あり鳩羽鼠あり鐵色あり御納戸色あり此他猶未だ染工の配合し得ざる複雜なる色彩即ち澁き染色の見本數十百種は此一時に於て東京を圍繞せる空間に展覽せらる

貪食の動物

▲東京は強大なる胃囊を有せる貪食の動物にして地方人は其食料也彼は新橋上野てふ二個の大なる口と、本所飯田町てふ二個の小なる口を以て、限りなく地方人を吸收し、之を胃囊の中に消化して、間斷なく血肉の組織を新陳代謝せしむ、

勝者と敗者

▲一面より見れば東京の歴史は田舍者の東京蹂躙史にして、平面的東京即ち下町は、新來の地方人と土着の市民と生存競爭をなすの一大戰場、凹面的東京即ち山の手は勝利を得たる新來者の占領地、凹面的東京即ち河東は、敗北せる土着者の流竄地也、しかも今日の新來者は忽ち明日の土着者となり、更に必勝の利運に乘じて入れる第二の新來者に向つて、必敗の非運を荷へる心細き戰鬪を開始せざるべからず、勿論山の手にも敗北者あり河東にも勝利者あるの例外は少なからざれども、大體の趨勢に着目し來れば、當に如此傾向を帶びつゝあるを見るべし

喉黑と領黑

▲山の手の喉黑とは、凹面的東京の占領者が長く其勝利者の地位を持續せんが爲、朝日に向つて平面的東京の戰場に出で夕日に向つて其城廓に歸るの狀態を意味し、本所(河東)の領黑とは凹面的東京の流竄者が、常に其敗北者の地位を脫却せんとして朝日に背いて平面的東京の戰場に出で、夕日に背いて其奠窟に歸るの狀態を意味するの警語なり

山の手と河東

▲勝利者は何が故に凹面的東京を根據地となすや、是れ他なし、山の手には彼等が鼻と親密なる土の香多く、彼等が目と親交ある緣の色多く、彼等が故郷の生活の一端を移植して下肥臭き菜畠を開くべき餘地に富めるを以てのみ、然らば敗北者は何が故に凹面的東京を根據地となすや、此問題の解答は更に簡單な

り、曰く河東は生活の程度頗る低く、之を比例して物價の低廉なるを以てのみ、高爽にして衛生に適せる凸面的東京の勝利者に占領せらるゝを餘儀なしとせざるべからざるが如く、卑濕にして病毒を包藏せる凹面的東京の外、甘んじて敗北者を迎ふるの餘地なきを如何せん

三種の東京婦人

▲水瓶の中の御飯つぶ然たる美人は山の手の產物、銀に煙しを掛けたる如き美人は下町の自慢、素袷素綿入に襦袢を重ねず、夏來れば腰卷を締めずと云ふ恐ろしき美人は河東の名物なり、山の手は野暮に、下町は粋に、河東は凄し、山の手は田舍の地金に文明の鍍金をなせるもの、河東は生粹の舊東京の自棄になりしもの、而して下町は其一端に山の手的臭味を含み、他の一端に河東的氣風を帶びつゝあり

可驚消化作用

▲東京は周圍の村落より入り來る荷車に依つて野菜の青を吸收し、周圍の村落に向つて出で去る荷車に依つて屎尿の黄を排出す、絶大なる東京の胃腸が、此青を化して黄となすの作用は實に驚くべき強盛なるもの也

無意義なる生存者

▲東京と村落の境界線に當れる道路は、野菜車と肥車の爲め骨を露はさんばかりに破壞され、晴るれば忽ち馬糞の殼飛んで駄菓子屋の硝子蓋の上に亂れ松葉形を置き、雨降れば忽ち蹴上げの泥迸つて路傍の庚申塚に田樂の味噌を塗る、沿道の住民は夜の未だ明けざるより、青物市場に赴く野菜車の響に枕を震動され、晝は終日肥車の響と其惡臭に惱まさるゝを免れず、此地は田舍にあらず都府にあらず、田舍及都府の美點は一も有する所なくして、其弊所は盡く之を併有せり、極めて氣力なく主張なき愚人、若くは非常の強ね者にあらざれば、甘んじて之を永住の地と定むる者あるべからず、されば日本人中最も醜陋なる容貌を有せる者を見んと欲せば此所に求むべし、日本人中最も無意義に生存する者を見んと欲せば此所に問ふに如かず

風流は皮一枚剝るを禁物とす

▲朝霞芝浦の岸を掠むる白帆の影には、相模、安房、上總の海より非運を人類の腹底に斷送すべき魚介を積み、夕時雨隅田の流を遡る苫舟は江戸草創以來詩中の物にして亦畫中の物と定評あれども、苦一枚剝ぎし下を見ば、俄に興趣の

索然たらざるを得んや、頭巾を冠り被布を着たる老牛可通曰く、兎角風流は皮一枚剝がるゝを禁物となすと

紅蓮の花

▲脆弱なる基礎の上に可燃性の材料を組織したる都府なり、連日の強風之を乾燥せしめたる結果は如何、螢の如き火の粉一點横さまに飛べば八百八街に紅蓮の花を開かんこと是れ先天的の運命のみ

火災に對する消極的習慣

▲舊江戸市民に對しては、火の勢力は恰も專制の統治者たる將軍の權力の如く、其一たび發動するや絶對的に抵抗することを得ず、其偉大と強盛は人をして、感嘆し心醉せしむるに足るを以て火災の來るや江戸市民は、知らず〳〵崇敬を以て之を迎ふるの傾向を來し、一種の壯美觀を以て之に對するの習慣を生せり、其實は江戸市民の先天的運命として、豫め家屋財産を燒失するの場合あるを定め置かざるべからざるを以て、之を憂慮するの到底愚劣なることを悟り、火事は江戸の花と稱して、消極的に其不安心を欺くの習慣を養ひたるものに過ぎざるべし

名の都と利の都

▲名の都東京に對して、利の都大坂あり、大坂の氣風即ち贅六風の、あくどく、しつこく、けちに、しみつたれに、こまかく、よくばつて居ること、寧ろ家康的にして秀吉的ならず、是れ甚だ怪むべきに似たり、然れども今の大坂が秀吉に作られし都府にあらざるを知らば、此問題は容易に解決せんなり、秀吉の創めたる覇都は、秀吉の覇業の地に墮ると共に、其龍鳳彩五の氣を銷し去り、空しく形骸を留めて、相集まつて錙銖の利を爭ふべく、膓泥の如き俗子の場に供いたる也、今日大坂に殘されたる秀吉の紀念物は唯馬鹿に大なる石のみ、之を運び至りし時は、定めし多くの人と金とを要したるものならんと思はるゝのみ

秀吉的と家康的

▲東京の氣風即ち江戸ッ子風の、はなつぱり強く、おほまかに、いげぞんざいに、ちやらつぽこに、癇癪まじりに、燒糞まじりなるは、甚だ秀吉的にして毫も家康的にあらず、然れども是亦深く怪むべきに非るなり、鋒鋩ありて彈力強き江戸ッ子風は、元是れ德川氏が強制的に作らんことを試みし、極端なる屈從の氣風に反抗して起りたる者也、德川氏の階級制度は我を蹂躪して蛆蟲同然の

物たらしめずんば已まざるに、我は階級制度を蹂躙して糞土に齊しき物たらしめずんば已まず、德川氏の政治法律は我れを束縛して手無き足無き者たらしめんとするに、我は政治法律を一枚の反古紙の如く突破りて、手足の外に翼ある者の如くに飛躍せんとす、此極端なる反抗こそ、即ち江戸ッ子氣風の原動力也、

江戸ッ子氣質

適切に云へば、此氣風は家康の供給せる材料以外に新らしき材料を求めて、家康の建築したる家屋を打壞すべき大槌を造りたる也、恰も家康は自家の流儀を用ひて、秀吉が事業の痕跡を拭ひ消さんとするに、江戸ッ子は秀吉の流儀を用ひて、家康が事業の結果を打壞さんとするものゝ如し、江戸ッ子は家康の系統に屬せずして、秀吉の系統に屬せり

▲江戸ッ子の特色は、大なる刺激に興奮し、大なる抑壓に反抗する時に於て、其癇癪の破裂したる時に於て、其燒糞になりたる時に於て、始めて一種人心鑫動的に現れ出つるものなれば、平生に於て未だ輕々しく其衰へたるを斷定し得べからずと雖も、玉を韜める石は輝きを外に發し、魚の古い新しいは、腸を引出して見る迄もなく目の色に依つて鑑定し得べしとなす、若し江戸ッ子にして毫厘にても其體面を傷けられたる時には、鐵壁を頭もて、突き破りても大蛇の口に飛び込んで腹を割いて出でゝも首を切られたら首丈け飛んで行つて相手の喉笛に食ひ附いても、後から抱きすくめたら自分の腹に刀を立てゝ圓子刺しに相手の脊迄貫いても、必ず侮辱に報いざれば附寢かれずと云ふの、負けじ魂を尙ほ存せば、沈痛峭烈の氣は、隱々として眉間に籠り、肉を透して骨の稜々たるを看取し得べき筈ならずや、江戸ッ子の兒孫は尙聊か其浴泊にして快活なる面影を留めつゝあるが如し、されど其沈痛峭烈にして多少の詩的趣味を帶べる一種凄く寂びたるが如き氣象に至つては、今日の江戸ッ子に之を見ると能はざる也

詩味を帶べる沈痛峭烈

江戸ッ子の衰退

▲論より證據、今日の江戸ッ子は田舍者よりあらゆる侮辱を受けつゝあり、而も田舍者の後塵を拜し、鼻息を覗ひ、田舍者に嘲笑せられ、欺騙せられ、驅使せられ、翻弄せられ、彼より加へらるゝもの甚だ多くして、彼に加ふるものは毛一筋もなき也、上邊は江戸ッ子がつて、大きな事を云ひ、强い事を云ひ、虛

勢を賣り、虚喝を商ふに巧みなれども、皮一枚を剝ぎたる下には、何の沈痛なく、何の峭烈なく、何の骨無く、何の魂なし、強ねて強ねて骨が捩れて了ふ程の強ね者もなく、洒落れて洒落れて血の茶色になつて了ふ程の洒落者もなく、生命に紐を附けて玩具に振り廻す程の惡戯者もなく、山氣も商賣氣も無くて己れ自ら變り物たるを知らざる眞の變り物も亦見るべからず、要するに江戸ッ子のいやに怜悧になつたのが惡いなり、馬鹿は大乘の器なりと雖も、怜悧は小乘の器也、英雄、豪傑、聖人、大盜は、馬鹿者の中より出づれども怜悧者の中より出でず、怜悧者の中よりは唯怜悧者が出づるのみなり、江戸ッ子の兒孫何ぞ其本に歸らざる

怜悧は小乘の器也

▲階級制度に對する人情の反抗は、一種奇矯なる狀態を以て、社會の上層下層の境界線上を電火の如くに走り、又社會の裏面を伏樋の如くに行けり、德川氏に依りて保險せられたる社會の平和は、首府江戸及全國各都市を膨脹發達せしむること驚くべきものあり、隨つて士民百姓の外に素町人の階級が社會の一勢

聞かぬ氣の負けじ魂

上層下層の境界線を走る電火

力と認めらるゝに至りたり、素町人即ち市民の父祖は戰國時代に於て、劒戟矢石相打つの間に商工業を營み、武人の兵略を運らすが如く商略を運らし、武人の兵戰をなすが如く商戰をなし、偏に膽と氣とを尊び、險を踏み危を冒して成功を尋ね、或は萬里の波濤を凌ぎて雄圖を策する等、其抱負毫も武人に讓る所あらざりし者也、小西彌九郎(行長)、原田孫七郎、山田仁左衛門、魚屋助左衛門等は皆素町人の出身にして純武人を背後に瞠若たらしめし者にあらずや、故に是等の徒の系統に屬せる德川時代の市民は、皆聞かぬ氣の負け嫌ひなる魂を有せり、大名及び士大夫が竊々として自己の領分を守り、其權限を超えんことを戒むるの狀態を陋也となせり、淀屋辰五郎の豪氣を出だし、紀國屋文左衛門の膽略を產して、暗に武人の意氣地なきを冷笑せり

▲德川氏が平和と安全の爲に設けたる嚴密なる階級制度は、是等の豪邁なる市民を抑壓して、士民百姓と同じく牛馬の地位に降らしめ、眉を昂け氣を吐くの自由を剝奪しぬ、此に於て彼等の不平、彼等の憤悶は漏らすに處なし、彼れサ

ンピン何者ぞ、何れ二本榛何者ぞ、彼れ鳥威し何者ぞ、彼れ大名何者ぞ、彼れ將軍何者ぞ、頂天立地我れ我が行かんとする處に行き、我れ我が爲さんとする事を爲さんに、何者か能く之を遮らん、劒の山刀の林の中にも我が行く道あり、油の釜竹の鋸の前にも我が爲す事あり、我が本心の承認にあらざる以上は、何者の命令も何事の障碍も、我をして一歩を狂げしむるに足らずと、乃ち肉を刺して五體を花の如く沒色し、縮緬の犢鼻褌日に〳〵新たにして、何れの時何れの處に屍を暴すも死後の美觀を失はざらんことを期す、所謂俠客是也、幡隨院長兵衛の徒是也、俠客は階級制度に對する反抗の自暴自棄となれるもの也、狂的となれるもの也、俠客にあらずして狂客也、社會の上層と下層の境界線上、武士と素町人との中間を電火の如くに走る者とは之を謂ふ也

▲他に一種義賊なる者あり、盗賊を職業となし而も慈善を行ふ、慈善を行はんとするは盗賊をなす目的の全體にあらずと雖も、其一部分たるには相違なかりしが如し、是亦俠客の如く階級制度に對する反抗の自暴自棄となれるものにして、異なるところは喧嘩をなすと泥棒をなすとの別のみ、正面より反抗すると裏面より反抗するとの差違のみ、時代は我を冷遇して奇才を伸ぶるの地を與へざるが故に、我は時代の保護に依りて地位或は財富を得たる者と戰ひ、其勝利の分捕品を我と同じく時代に冷遇せらるゝ者に割與して、小なれども時代に對するの敵國を作らんと云ふ也、鼠小僧の徒是也、社會の裏面を伏櫃の如くに行く者とは之を謂ふ也

社會の裏面を行くの伏櫃

▲土偶を並べて社會を組織するが如く、制度を以て活人の活氣を壓殺し得たる平和は、平和にあらずして寧ろ死のみ、平和は喜ぶべきも死は厭ふべし、德川氏の制度は、坦々たる大路の處々に往來止の札を立つるに似たり、何れの方面に向ふも此札に妨げらるゝを以て、札と札との狹隘なる制限に我が天地を開かざるべからず、札の内も坦路にして札の外も坦路なれば、走つて外に出づると極めて容易也而も一たび外に出づれば死刑則ち下る也、實に究屈にして且つ危險なる制度と云ふべし、故に此制度に對する畏懼の人心を感化するところ、

坦々たる大道に往來止の札

市井の間より、甚だ淺薄なる甚だ卑屈なる俗的哲學は揑ね出だされ人間生活の原理として一般の信據するところとなれり、其究屈にして危險なること、是亦人間の心情界の處々に往來止め札を立つるものに外ならざる也、浮世の義理とか人間の道とか云ひ、苟くも心情の滿足に發達したる者より見れば、其無意味なること一笑にも價せざる道理てふものに、身動きのならぬ程束縛せられざるべからず、人情如何ぞ之に反抗せざるを得んや、斯くて長の暇を賜はる浪人あり七生迄の勘當を受くる親不孝者あり、世間に持て餘されて乞食となる者あり、情死をなして社會の壓抑に屈服せざるを示す者あり、皆是れ階級制度に對する反抗の變形せるもの也、間接の反抗也、間接の間接の反抗也

▲或植物が周圍の土地の滋養分を吸收して、己れに近い他の植物を弱らせるやうに、東京は繁華熱鬧の要素を吸收して、己れに近い他の村落を淋くするのであらう

▲自分は東京化した爲で、嘗て田舍者として東京の熱鬧に驚いた反動に、今は東京者として田舍の寂寥に驚く譯でもあらう

哲學＝宗教＝道德

最高の生活……眞の人間……人類の天職……人類の目的……人類の不幸……天才と國家……歷史論……非歷史觀……過去の忘却……歷史の用途……歷史の無益……貧しき自由……吾人と何等の關係なき史的眞實……甚だ惡しき騰寫……歷史と民衆……自由の本能……殘忍は人の本能也……偉大なる罪人の精神……科學と個人主義との衝突……精神の絕對的自由……威力の意思……非獻身的行爲……國家は猛獸の一群より成立せり……自ら命じ能ふ人……道德は惡しき良心に依て作らる……奴隸の精神的復讐……奴隸道德の勝利……道德價造者……君主道德……粗野卑賤なる一貧僧……絕大の君主人……奴隸の舞臺……非基督敎的救世主……宗敎家の不人情……惡人の開祖カイン……我を咀ひたる者は父母也……偶然の禀生……死の呑食……破壞者兼造物者……生れざる幸福……敎人の增殖……日の下に行はる虛過……惡より善を生む……惡も亦神也……神の虛言咀はるべき神……剛復なる靈體……汝全能者よ……世界を造りたるは耻辱也……耻ちべきノア

の一族……天國よりは地獄に行かん……道理は誤謬に充てり……惡魔は大智也……脆弱なる道德……怒れるエホバ……怒れるサタン……暴君の哲理……敗れたる惡魔の意思……反亂的自由の精神……我運命の星……一個の硬頸一個の紅唇……衆弱……一切の正邪は意見の一致のみ……道德は强者の理想のみ

最高の生活

▲元始野蠻の族は清新なる威力を有せり

▲猶ほ汚穢なる沼澤の如し、凡べての沈滯疲倦の泥土は其底に蓄積し其毒氣を含める雲霧は一切の努力奮勵を衰亡せしむ

▲天才非凡の人多くは數奇、四邊の冷酷なる虐遇に堪へずして、先つ陰鬱となり厭世となり次で病める人となり、終に狂となるを常とす

▲吾人の客貌にして、既に吾人が一生の辛酸困苦の痕跡を留むるものならむには、何ぞ吾人が爲せる一切の事業が、同一の痕跡を有するを怪まんや

▲大なる人物は時代の兒にあらずして時代の繼兒なり

▲幸福なる生活は到底不可能の事に屬す、人間の到達し得べき最高の生活は英雄的生活なり、衆人の爲に最大苦痛と戰ふ所の生活なり

眞の人間

▲眞の人間とは、一躍直ちに大自然となるべき人なり彼等は自己の事業に據つてよりも寧ろ自己の人物によりて世に教ふる所の人也

人類の天職

▲人類は偉人天才を生せむが爲めに、孜々として勉めざるべからず、之を外にして人類の天職あること無し

人類の目的

▲人類の目的は、其最後に存せずして、人類の最高なる典型即ち偉人に存す

人類の最大不幸

▲余は人類の歷史を讀みて、其幸福なる時代を求めたることなく、常に天才の生るゝが爲に大なる恩惠を與へたりし時代を求む、人類の遭遇すべき最大なる不幸は、天才の顯はれざるにある

文明の目的

▲國民は、數人の英雄を生せむが爲に自然の求めたる迂路のみ

▲文明の目的は偉人の生存を奬勵するに在り之を外にして文明の目的あること無し

天才を迫害するの社會

▲社會の人々を擧つて偉人天才の發達を障碍し、或は天才をして生るゝこと能

はざらしめ或は天才に向つて頑迷なる迫害を加ふる如き社會は、純乎たる野蠻よりも文明を去ること遠し

天才と國家

▲天才は國家より期待すること甚だ多からざるなり、天才にして國家に仕ふることあれば國家は天才に向て何等の益を與ふることなし、國家にして天才に惠與するに純然たる獨立を以てせば始めて天才に益することあるべし、天才をして僞學者の犧牲たらしむると否やとは、實に其國の文明狀態如何に由る

非歷史觀

▲吾人が自由なる呼吸と大膽なる行爲とを妨ぐる者は實に歷史なり、吾人が歷史を有するは猶重大なる彈丸を曳いて歩行するが如し、其進歩の遲々たる知るべきのみ

非歷史的に感ずるの幸福

▲歷史に基ける敎育は、吾人の行爲と享樂とを阻害すること最も大なり、現在に向て己れの力を集中し、現在の中に生活することを得ざる輩は、自ら幸福を感ずること能はざるのみならず、又何事をも爲し得ざればなり、非歷史的に感するの前なきものは幸福なるべき謂れなし

過去の忘却

▲一切の事業は、凡べて過去を忘却し、若くは過去の知識なくして始めて大なることを得べし、過去の忘失は吾人が生活し得る唯一の雰圍氣なればなり、彼の青春の齡ひ酣にして相愛する男女を見ずや、又彼熱心至らざるなき事業家を見ずや、過去彼等に向て何する者ぞ、歷史はた彼等に向て何の功かある

歷史の用途

▲茲に天才あり、彼は大なる爭鬪に堪へ得るの快男兒なり、彼は模範の人を求め、師たるべき人を求め、己れを慰藉すべき人を求めて已まざるなり、然れども彼は不幸にして之を同時代に有せざるなり、歷史はかゝる天才に向て始めて其用あり

同上

▲文藝復興期を見よ、幾多の天才雲の如く輩出せりと傳ふれども、其數僅かに百に滿たざるなり、而かも其偉業の甚大なる、遂に能く僞學者の輩をして其跡を絕たしめたるに非ずや、是實に大なる敎訓なり、後の天才をして奮起せしむるの遺業なり、而して其敎訓遺業を傳ふる者は即ち歷史也

歷史の無益

▲凡庸の人に向ては、歷史は寸毫の益なきのみならず、恐るべき損害を加ふる

の外なきなり、試みに今日の青年藝術家を擧つて、之を自然の天地に遊ばしめずして、長く美術館に入らしめよ、或は有名なる藝術の都府に遊ばしめよ、勇氣沮喪せざるもの果して幾人かある、如此輩に向ては如何なる形を以てするも歷史の功あることなし。

貧しき自由

▲現今敎育ある人とは歷史的に敎育せられたる人の謂なり、即ち百科通典なり。

吾等と何人の關係なき史的眞實

▲今の所謂哲學は哲學に非ずして哲學の歷史也、今の所謂思想の自由は、自由に非ずして憫むべき貧しき自由也

▲世人は幾百千の眞實なる事實を敎ふる歷史家を賞讃す、然れども世には吾人の人文と何等の關係なき事實あるを知らざるべからず、其甲たると乙たるとは、吾人と何の關んする所なき史的眞實あることを忘るべからず

非世界の歷程

▲歷史家は歷史を以て世界の歷程（ウェルトプロセス）と稱す、然れども汝は何が爲に此世に生れ出でたるか、誰か能くかゝる疑問に答へ得るものぞ、汝は既に此世に生れたり、宜しく汝が能くする範圍に於て、高尙なる目的を設くべきに非ずや、其他問ふことを要せざれ。

▲歷史は嘗て爲政家の見地より成れり、今や一轉して民衆の見地に據りて書かるゝに至れり

獸性甚だ惡しき謄寫

▲民衆とは何ぞや、1+1+1+1……に非ずして1+1+1+1……+x なり、x とは何ぞや獸性即ち是也、獸性は彼等の普通性なり、彼等は大人物の謄寫なり、甚だ惡しき謄寫なり、粗惡なる材料より成れる謄寫也、彼等は時に大人物に反抗し、時に大人物の手足となる

歷史と民衆

▲玆に統計學者ありて、模倣、怠惰、饑餓、及色情の中に歷史的法則を發見せむとなさば、其材料を供するものは、則ち彼等民衆に外ならざるなり

苦樂の關係

▲苦樂の關係は極めて密接なり、天の如く高く喝采せらるゝ者は、又死の如き苦境に陷るを免れず

自由の本能

▲人間は自由の本能を有す、此本能に逆らうものは凡べて不可なり、されば法律の如き道德の如き、或は繁文褥禮を以て、或は偏狹なる理論を以て、個人の

殘忍に人の本能

權能を律せむとするは斷じて可ならず

▲殘忍は人の本能なるを知らざるべからず、罪人は往々人間の本能を發輝したるものなるを忘るべからず

偉大なる罪人の精神

▲茲に罪人あり彼は殺人犯の罪人なり、彼を國法に照しして重刑に處するは固より已むを得ざることならむ、然れども汝はまた彼犯罪の如何に美しきかを顧慮せざるべからず、彼は無殘にも其子を殺したり、何か故ぞ彼は唯人を殺すことを樂めるなり、彼は人なき處に其子を誘ひ、自ら樂んで之を殺したり、苦痛に惱める兒童の容貌も、痙攣を起せる愛らしき手も、慄へる身體も、悲鳴の聲も、彼の心を動かすに足らざるなり、彼は破顏一笑徐ろに其子を殺したり、其行の善惡は今問ふ所に非ず、唯彼が精神の强固なる、其意志の猛烈なる所以を觀取せよ、誰か彼の翼に倣つて、彼の行を再びし得るものぞ、誰か己れの愛兒の死と戰ふを見んよりも、寧ろ先つ己を殺すことを欲せざるものぞ、讀者よ、汝等若し斯る罪人の精神の偉大なるを歎嘆し、其行の美しくして且つ恐るべき所以を解することを得ば、冀くは、斯る人の王位に生れたる時、如何なる大事業を成し得べきかに思ひ至れ

科學と個人主義の衝突

▲世人は科學を尊重す、然れども余を以て之を見れば、科學は余に用なきなり、何となれば科學は人の小なることを敎ふればなり、無限なる宇宙の廣大無邊なるに比すれば我は實に大海の一滴にだも若かず、而して之を敎ふるものは科學なり、宇宙には千載動かざる天則ありて存す余は之に從はざるべからず、而して之を敎ふるものは科學なり、然れども個人主義を唱ふる余は、如此敎を受くるを欲せざるなり、余は自から小たらむことを欲せず、自から服從の人たらむことを欲せざる者なり、余は自から神の地位に立たむと欲する者なり、個人主義者たる余に向ては、地球は宇宙の中心點たらざるべからず、而して余は地球の中心たらむことを欲す、天文學の如きは、宜しく宇宙の外に放逐すべし、一切の科學は人間の自重心自敬心を失はしめ、人間の自信を以て自負傲慢となすの外他に能なきものと知るべし